
ハヤテのごとく！～初恋物語～

隣のマニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテの「」とくー～ 初恋物語

【著者名】

隣のマニア

【ZPDF】

N1685D

【あらすじ】

桂ヒナギク知つての通り彼女は綾崎ハヤテに恋をした。初めは否定していたが、今では自分でもはつきりと自覚しているハヤテ君が好きこれはそんな彼女の初恋を描いた物語である

一章：1話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

http://nocode.syosetu.com/n4238
d/

一章： 1話

桂 ヒナギク

知つての通り彼女は綾崎ハヤテに恋をした。

初めは否定していたが、今では自分でもはつきりと自覚している

ハヤテ君が好き

これはそんな彼女の初恋を描いた物語である

一章

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

小鳥のさえやきが聞こえる静かな時にスマッキングな機械的な音
が鳴り響いた。

「ん~っ・・・・もう朝なの?」

ヒナギクはポツリと囁きながらのびをした。

「こよこよ今日からね・・・・・」

ヒナギクの顔はやる気と期待に満ちている。

今日は始業式の日。彼女は春休みの間、ずっとこのときを楽しみにしていたのだ。

今田は待ちに待ったクラス分けの結果の発表。

ハヤテと一緒にクラスになる唯一のチャンスなのだ。胸が高鳴るのは当然である。

同じクラスになれば、一緒にいられる時間はいままでと比べ物にならないほど増える。

そんな幸せをかみ締める為、もつ一期勤めてくれと先生に言われた生徒会長の座も降りた。

高校生活で一番楽しいといわれる一年生を、精一杯楽しむ為だ。

早々と朝食も済ませ、ヒナギクは今日の大舞台の会場、白皇学院へと出発する。

「さあ、行きましょうか」

「行つてきまーすー！」

いつもより少し大きめの声で言った。特に意味はないが、そういう気分だった。

「ふふふ。青春ね、ヒナちゃん」

玄関でヒナママが微笑んでいたというのはだれも知らないことである・・・・

外はこれ以上ないほど快晴だ。

だれでも気分がうかれる、そんな感じの天氣だ。

「今日はついてそうね」

つい、そんなことを口走つてしまつほどだ。

と、そんなとき、聞きなれた友人の自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「おっはよー、ヒナちゃん!」

「やあ、ヒナ。今日はずいぶん機嫌がいいみたいだな」

「まったく、ひそかに尾行していた我々に気付かないとはな

元・生徒会三人組がいつもの楽しそうな感じで笑っていた。

彼女達も、仕事をしたくないというもののあるのだろうが、学校を楽しむ為に生徒会の座を降りた。

まあ、ヒナギクからもう辞めなさいと言われたのは内緒である。

「あら、三人ともおはよう。つていうかなに尾行なんてしてんのよー！」

期待通りの反応に三人組は笑い出す。

ヒナギクの分かりやすさ^{さぬけ}の性格は、何回にじくつても面白いものだ。

一方のヒナギクは、口では怒っているが、実際は楽しんでいる。

ヒの三人と一緒にいると、心が楽になる気がしていた。

そんな楽しい時間を過ごしながら、桜が咲き乱れる学校への道を歩いていった。

それから少しして、学校の校門前に着いた。

入り口では、数百本はある桜が満開を向かえ、見事な桜吹雪が起こっている。

今見ると、見慣れた校舎やガーデンゲートが全く違つものに見える。

ガーデンゲートで気づいたこの気持ち、今年は伝えられるだろ？

いや、今年こそは伝えるんだ、伝えさせるんだ。

桜景色を見て決意を硬く固める。

「ああ、みんな行きましょうー。」

ヒナギクの言葉で、一同はクラス発表ある会場へとむかつた。

一章： 1話（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここは「いつするといいんじやないかな？」
とか、

これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。
よろしくお願いします。

2話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

http://nocode.syosetu.com/n4238
d/

「キャーーーー同じクラスよーーーー！」

「おい、何で俺はあの方と同じじゃないんだ！」

四人がクラス発表の会場へ着いた時、すでに結構な人数が集まつて大賑わいをしていた。

たつた一枚の紙を見に、1学年全員が来るとなると、想像もしたくない壮絶な込み合いになる。が、今は早めに来たのでそれほどはない。

しかし、某ねずみの国の入場開始時間数分前程度の込み方はしている。

これは気を引き締めていかなきゃ殺やられるわね・・・

ヒナギクはよしと氣を引き締めてその人ごみの中に入ろうとする。が、そのとき、氣の抜けた、けれども恨めない青色の髪の少年の声に呼び止められた。

ヒナギクはちゅうぶ歩き始めてようとしていた時をやられ、前のめりになり転びそうになつた。

「おはようございます、ヒナギクさん。どうかしたんですか？」

人の気持ちもしないでよくそんなこと言えるわね・・・

まあ、それがハヤテ君らしいんだだけ。

そんなことを考えながらハヤテに挨拶をする。

「ひじてハヤテと会話をしていると、美希たちと話していくとめぐり、いや、それ以上に微笑んでしまひ。

と、突然下のほうから聞き覚えのある不機嫌そうな声が聞こえてきた。

「おいヒナギク、私のこと忘れてないか

「えつ、あつ、ナギーーおはよ」

あまりに突然だつたのでつい変な声が出てしまつた。

いつもは学校に来ないとほいえ、今日へりこは来るだりつさすかり存在を忘れていた。

ナギの探求の目が自分に向かつて突き刺される。

「のままだとまづこわね・・・・・別の話題を振らなきや・・・・

「えつと、そういえば今日は学校来るの早いわね」

「ああ、当然だ。今日は大事なクラス発表の日だからな。この日でハヤテと同じクラスなのを確かめに来たのだ」

「ひやひやくまく話をそらせたよつだ。

しかし、このままここにいるとまた地雷を踏みかねない。

「とりあえず、クラス分け、見に行かない？」

こうしていつの間にか雑談会が始まっているといふに声をかけ、皆で人ごみの中へ突入していった。

それから五分後・・・・・・

「はあはあ、もうダメです・・・・」

ハヤテは草むらに力なく倒れこんだ。

文字通り大の字になつて倒れ、顔は汗で溢れている。

それを見守る女子一人はあからさまに「機嫌オーラをだしていた。

そう、二人ともハヤテと同じ『2・6』になつたのだ。

ちなみに元・生徒会三人組も同じである。

それはさておき、一人は不思議そうな顔をしていた。

そもそもそのはず、人ごみに突入してみても、自分はピンピンしているのだ。

車にはねられても生きていったハヤテがこれほどまでに疲れている理由がわからなかつた。

まあ、実際は最近やたらとヒナギクと仲良くして、さらに同じクラスにまでなつたハヤテへの男子の総攻撃があつたのだが。

いつまでも寝ているわけにも行かないでの、ハヤテはいつもの営業スマイルをしてひょこつと起きたした。

「すいません。もう大丈夫ですので。」

執事服についた汚れを手で払つて行きましょうと合図をする。

「そうね、行きましょうか、私”達”のクラスへ」

「ヌフ！私のハヤテとなれなれしくするなー！」

こつしてヒナギクはハヤテと同じクラスになつた喜びをかみしめながら、三人で教室へと向かつた・・・

ちなみに元・生徒会三人組はといふと・・・

「いやー、疲れたなー」

もつすぐ教室へ行かないと遅刻になるのも関わらず、木陰でのんびり過ごしていたそうだ。

2話（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここはいいつするといいんじやないかな？

とか、

これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。

よろしくお願いします。

3話（5／25加筆修正）（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

http://nocode.syosetu.com/n4238
d/

3話（5／25 加筆修正）

「えへっと、ここね2年6組は」

教室前に辿り着いた。今まで足を踏み入れることの少なかつた棟なので、たどり着くまでに何度も道に迷つたりした。だだつ広い校舎の助けもあって1kmは軽く歩き

回つただろう。

ヒナギクは余裕でここねとか言つているが、体力の無さで一位一位を争うどころか独占する勢いのナギはもちろんばてている。

「ハヤテ・・・、早く教室に入つて一息するぞ」

さつむと席に座つて休みたいナギに引っ張られてハヤテも教室に入る。後を追つてヒナギクも入る。

早めに学校に着いのだが、迷いに迷つたせいで、すでにHRぎりぎりの時間になつていた。教室にはすでに嫌なんだけど一年間過ぐすかもしけれない大体の新しいクラスメートが揃つている。

スマートが揃つている。誰か落第しなかつたら一年間の付き合いだ。

ハヤテは見渡してみると、ほとんどが話したことがない、初対面のばかり人だつた。考えてみれば編入してからまだ半年間しかいなくて、やつとクラスメートと仲

がよくなつたひりで、他のクラスに知り合いなど皆無に等しい。

うまくやつていけるかな」とか考えながらハヤテはナギの座る席へ向かつた。

一方ヒナギクは、四、五人くらい知っている人がいた。ただ、知っているというだけで友達とかそういうレベルではない。ヒナギクも顔は広いが積極的に友達を作

るほうではないので（相手が勝手に寄つてくるタイプ）、自分の中の良い人はあまりいないという状況だった。まあ、相手から見れば超絶美貌の完璧生徒会長を知

らないはずは無いので、すでに友達リストに入っているのだが。

そんなことを知る由はあるけどしらないヒナギクは、一通りの人を確かめながら、ひとまず黒板に張つてある座席表で自分の席を確認する。

えーっと、左から三番目の前から三番目か。なんだか度真ん中ね。

ヒナギクは一番前が良かつたらしい。先生に質問がしやすいし、集中力が上がるからだそうだ。考え方が違う。

うーん。隣は誰かしら。

左は・・・竜宮さんか、知らない人ね。仲良くなれるかしら。

仲良くなつたら部活に誘われないよう注意したほうがよさそうだ。

右は・・・綾崎ハヤテっていう人か・・・

• • • •

突然奇声を発したヒナギケにケラス中の視線が集中する。

力ア / / / / ● ● ● ●

ヒナギケは慌てて何でもでもなにしてすと周りに必死の弁明をしてから今の自分の置かれた状況を必死に整理する。

えうつと、私があそこに座つて、ハヤテ君があそこに座つて……

•
•
•
•
•
•

つて隣回士じやない！！

当たり前です、とかそういう突っ込みは許されません。今の彼女は普段の冷静さを完璧すぎるほどに失って、いわゆるパニック状態にあるのだから。

隣同士・・・・・つてことはこれから私はハヤテ君の隣で勉強する・
・・・

考えただけでうれしくなる。いままでこんなシチュエーションを夢に見たことすらなかつたのに、まさか現実世界で叶おうとは。

願つても無い絶好すぎるチャンスに最高の喜びを胸の中で味わうの
だつた。

ただし・・・

こんな幸せにも問題はあつた。

まだ知る由もないことなのだが・・・

上機嫌なヒナギクは、ややスキップ交じりの歩き方でハヤテの隣、
もとい自分席に向かつた。実際に自分の席であるひとつ隣にハ
ヤテがいるのを見て、見間違

いでなかつたことを確認した。

いつもつたら後することといえばひとつしか残っていない。

「隣の席ね。よろしく」

出来る限りハイテンションが表に出ないよう話してみた。生徒会長といつ肩書きがある以上、人前で取り乱すことは許されないので。

そんな感じで自然にハヤテに近づくと、ハヤテが座っているはずの席にナギがいることに気がついた。

しかし、良く見ると座っているのではなく机に倒れこんでいるというの方が正しかった。

すっかり忘れていたが、疲労困憊なナギをハヤテは休ませているのだった。ハヤテは鍛えられてた視力で自分の席を確認し、ナギを座らせたのだった。どこまでも

好きの無い仕事、それが執事である。

そんなこんなでご主人の体力ないわねえとかそんな感じの話をした。普通なら自分のことを悪く言わるとそこまでやらなくてもというくらい噛み付いてくるナギ

だが、本当に付かれきつてこるようでもまるで反応が無かった。

まるでただの屍のようだ・・・

とりあえずこんな状況なので、自分が望むままにハヤテと雑談を始める。これから授業のこととか、強化の先生は誰かとか他愛も無い話だったが、ヒナギクには

これ以上ないほど幸せな時間だった。

しかし、幸せな時間というのはすぐに過ぎ去るもので、まだまだ話していないこともあるのにHR開始を告げる鐘がなった。まあ、今まで話しかさせないわけじゃない

から今日のところまでのやりこなしをおくことにした。

ハヤテは動こうとしないナギをやせしく起こして自分の席につかせる。その動きに無駄は一切なく、すげーとも思つたがそれと同時に慣れているなどいうことも分

かつた。さつといつも自分から起きよつとしない主人をこうやって起こしてくるのだらう。

そんなことを考えていると、隣に戻ってきたハヤテになんですか？
と言われた。どうやらすつと見つめていたらしい。どうも氣を抜く
とミスが出るようなので氣を

引き締めておく。

ちなみに、二人はまったく気づいていないが、この周りから見ればイチャイチャな2人を見て、ヒナギクファンクラブの男子からハヤテに殺人的視線が注がれ始めて

いた。一人一人のハヤテを憎む気持ちの強さも異常だつたが、それを注ぐ数も多い為、教室はカオスフィールドと化していた。もはや普通に生きていられるのは気

づいていない一人だけのようだ。

と、この時ちょうど運良く新しい担任の先生が入ってきた。凍り付いていた空気はどこかへ流れていき、ハヤテをにらみつけていた男たちの顔も元通りになつて

いた。

さつきの空氣から考へると、先生の到着があと数秒遅れていたら何が起つたかわからなかつた。ナイス先生。それでこそ脇役です。

何も知らない先生は、毎年同じことをやつていることがバレバレなくらい慣れた手つきで名簿を広げ、まず黒板に自分の名前を書いた。

「『ほん。えーっと、私が今日からこい』『2年6組』の担任をすることになった薰・京ノ介だ。よろしく」

担任の名前を聞くと、クラスにざわめきが起つた。

理由の分からぬハヤテはヒナギクに聞いてみると、どうやらガンラマニアらしい噂が流れているということだった。そんなのこの間お嬢様が初代から全部大人

買いしていなのにとかハヤテは思つたが、まあ口にしないことにした。

一方の薰先生は、生徒の話が聞こえたのか、顔を赤くしながら恥ずかしさを隠すように声を張り上げて続けて言った。普段から人前で

作っているくせに情けない。

心のオタクは堂々としているものなのだ！

「話はまだあるべ。副担任のことだ。一応女の先生だぞ」

女の先生と言つ言葉に反応して、なにやら男子の態度が変わった。
急に身だしなみを整えだした。どうやら先生に何らかの期待をして
いるらしい。

薫の入ってきたといつ合図と共に、教室のドアがゆっくりと開き始
める。

クラス中の視線が集まる。ハヤテとヒナギクも誰になるのだ？
ワクワクしてしまう。

ガラガラガラ・・・

ドアが開いた。

そして入ってきたのは・・・・・

「ういーっす！私が副担任の桂・雪路よー！」

雪路だった・・・

美人を期待していた人の中には顔を見た瞬間ずるつとこける人もいた。

クラス中から聞こえてくる不満の声に雪路はやや立腹気だ。

「ちょっと、私だって好きでやつてんじやないのよー副担任に降格させられて給料ちょー減ったんだからー！」

こんな発言、教師として許されるのだろうか・・・

まあ、許されないから薰るが担任になつたわけだが。

そんなこんなでHRが始まった。

薰が出席を取るとある事実が判明した。ヒナギクの前と後ろと、その横の席が空いているのだ。

薰は座席表でその席の住人を探す。

「えっと、そこは花菱と朝風と瀬川か・・・・

またあの三人か・・・・」

薰は生徒会の仕事を担当しているので、三人娘との面識もあり、どのような生徒かもわかっている。もちろんサボリ癖があることも。

「まったく、あいつらときたら初日からこれかよ

しじうがないなと言いながら雪路に探しでここと書いて振り向くと、そこにはすでに雪路の姿はなかった。

「まつず、こんなのがばれたらまた私の給料が引かれちやうわー。」

そんなことを叫びながら校内を走り回った。

予想以上の気合の入り方に薫は少しの間言葉を発せずにいたが、軽く苦笑こするといつもの調子にもどつてまたHRをはじめた。

とまあ、ここまで波乱続きだつたが、残りのプリント配りなどは順調にすすんだ。

少しすると無事に三人娘も雪路に引っ張られながら帰ってきた。まあ、三人娘的には無事ではなかつたようだが。少しなみだ目になつている姿を見れば一目瞭然だ

。

「ひっぴどく叱られたようだね、これは。

「ほいじゃあ今田はこれで終わり。解散！」

こうして2・6初のHRは無事に終わった。

部活動のある生徒は各活動場所へ、帰宅する生徒は家へ帰つていつた。

ある1人の少年を除いて・・・

ヒナギクは帰ろうと思ひ席を立つた。剣道部はというとじつは定休日だつたりする。生徒会も今日は仕事なしだ。こんな日は滅多にあるものではない。こうこうと

きは早く家に帰つてのんびりするのに限る。

しかし、彼女は大事なことを思い出した。今、自分はハヤテと一緒にクラスなのだ。

もしかしたら一緒に帰れるかもしねれない・・・

そんな淡い期待が胸の中に生まれた。そしてそれはどんどん体中を侵食する。気づくと、一緒に帰りたいという思いでそれ以外は何も考えられないくらいになつて

いた。

幸いにもナギはまだ元気を取り戻していない。

近づいても気がつかないだらう。

今が格好のチャンスだ。勇気を振り絞つて隣で座っているハヤテに聞いてみる。

「あのハヤテ君・・・？」

といひがハヤテから一向に返事が返つてこない。

少し肩をゆすつてみる。

「ちゅうとハヤテ君？」

そうすると案の定、ハヤテはびくつと反応した。しかし、見てみるとハヤテの顔色が良くない。体の具合でも悪いのかと聞いてみたが、特にいつも通りだと言つ。

しかし、ハヤテのことだ。どこか悪いことひを隠しているかもしない。

その思いはハヤテの顔色を見て確信に変わっていく。

一緒に帰れなくなるかもしれないが、ヒナギクは保健室に連れて行くことにした。こんなに辛そうな人を黙つてみているわけにはいかない。

「ほり、一緒にいくからついてきて」

手を引っ張つて連れて行こうとするが、ハヤテはいこですよと黙つて教室から出ようとした。しかつた。

みんなに迷惑がかかるのが嫌らしい。人のことを優先して考えるハヤテらしい考え方だ。でも時には自分のことも考えてあげなくてはダメだのだ。

「ほり、もう行くわよー。生徒会長として生徒の健康を守らなくてはいけないのでー！」

多少強引にハヤテの手を引っ張る。

今度は何の抵抗もなかつた。

ヨーロッパの政治 · · ·

ヒナギクはそのまま歩き出そうとした。そつすれば後からハヤテが歩いて付いてくるだろ？と思つたからだ。

しかし、一步田を踏み出すと急に手に負担がかかってきた。後ろを振り向くと、そこにはハヤテの姿はなかつた。

あれっ？ つと思つて辺りを見回し見ると、ハヤテは床に倒れこんでいた。

「えつ、ハヤテ君？」

呼びかけても返事が返つてこない。

肩をゆすつてみると、一向に動き出す気配がない。

ヒナギクの顔が青ざめていく。

「ハヤテくーんっ！！！！！」

じばかりして、騒ぎを聞きつけた人たちによつて運ばれていつた・

•
•
•

3話（5／25加筆修正）（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここは「いつするといいんじやないかな？」

とか、
これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。
よろしくお願いします。

4話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

http://nocode.syosetu.com/n4238
d /

「あれ、 IJIRIはビームだ？」

ハヤテが田を覚ましたとき、自分が最後に見た景色とは明らかに異質なものが目に入ってきた。

よく辺りを見回してみると、周りは自分がいつも使っている家具に囲まれている。

「なんだ、僕の部屋か・・・」

ひとまず今の状況は理解できた。

しかし、なぜ自分がIJIRIにいるのかが分からない。

外はすでに夕焼け色に染まっている。

「確か、僕は学校に行つたはず・・・」

そこまではなんとか思い出すことが出来る。

しかし、HRが終わった後からのことがいくら考えても思不出せない。

拳句の果てにはこんなことにたどり着いた。

「そつかーお屋敷に帰りたいといつ強い願望が僕をここにワープさせたんだな！」

「全く、何意味の分からぬこと言つてゐるんですか？」

突然、横の方から声が聞こえてきた。

ドアの方を見るとじょうがないですねという顔をしたマリアがいた。独つ言のつもりでしゃべっていたので、これは予想外な出来事だつた。

このままでは自分の体裁が危うい。

マリアに変態だと思われたらもうこの屋敷では生きていけない。

「えつ！？いや！だからですね……」

ハヤテの弁明は長時間続いた……

「そういえば、お客様が見えてますが」

ハヤテの必死の弁明も飽きてきたころ、マリアは客が来ていることを思い出した。

ずっとそばにいてくれていた人だと云つことをハヤテに伝えると、マリアはその人を呼びにいった。

ハヤテはとりあえず、寝巻きのままなので失礼のないよう机執事服に着替える。

ハヤテの部屋と応接間は離れているので着替えている間に来てしまう心配はない。

「それにしても、誰だろう」

さつきからこれが気がかりだった。

とりあえず候補に挙がったのは、ナギ、三人娘、ヒナギクだった。

ナギは・・・

まず客ではない。違うだろう。

三人娘は・・・

HRの終わつたあと、すぐ帰つたし、そもそもあの三人がおとなしくそばにいてくれるなんて事はないだろう。

ヒナギクは・・・

忙しい人だろうから多分違うだろう。それに、これ以上迷惑をかけたらどうしたらよいのかわからぬ。

ハヤテは、ヒナギクが機嫌を悪くしている原因はそういうことの積み重ねだと思つてゐる。

まあ、実際は鈍感さなのだが、本人は全く気づいていない。

「ンン

丁度このとき、マリアが言っていた”那人”がやってきた。

扉がゆっくりと開き始める。

自然とハヤテの胸が高鳴る。

扉が開ききったとき、そこにいたのは”ヒナギク”だった。

4話（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここはいいつするといいんじやないかな？

とか、
これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。
よろしくお願いします。

5話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

http://nocode.syosetu.com/n4238
d/

「すみません、ヒナギクさん」

彼女の顔を見て瞬時に飛び出してきたのは、の言葉だった。

また迷惑をかけてしまつて、怒つてこるとの読みだ。

ふかく上げていた頭を上げてみると、予想に反してヒナギクの顔に怒りはなかつた。

それどころか心配そうな顔をしていた。

「マコトさんから聞いたわよ。冬休みの間、ほとんど寝てないんだつて？」

何があつたかといつて、休みの間、ナギのゲームに夜遅く、とか朝まで付き合つていたのだ。

ナギは毎晩に寝れるが、執事であるハヤテは寝るわけにはいかない。

それが冬休み中、ほぼ毎日続いたのだ。

倒れて当たり前だ。

「全く、すぐさうやって無理をするんだから。若いうちに無理しがると老後に響くわよ。」

ヒナギクはハヤテを寝かせて、隣の椅子に腰をかける。

ハヤテが起きたして仕事をしようとするのを監視する為だ。（マリアに見ていないとそうなると言われた）

「そうそう、マリアさん、ちょっと買い物に行くらしいから私が面倒みることになったの」

思い出したので何気なくハヤテに叫んだ。

ところがハヤテの様子が変だ。

顔を赤くして何やらもがいている。

あれ、何か変なこと言つたかしら……

マリアさんが買い物に行つた、

そういうばナギは寝ているはずだとさつきハヤテが言つていた、
ところは・・・・・

ハヤテ君と二人つきり！――！？

今度はヒナギクの方がもがき始めた。

二人つきりー？いやいや何言つてんのよ、いやいいけど

二人ともすでに自分を見失っている。

とりあえず冷静になろう。

「えっと、ちよっと紅茶でも入れてきまますねー…？」

「え、ええ、ありがとうございますー…？」

ひとまゆの部屋から退却する」とこした。

そうじなくてはお互い気が気がでなくなる気がする。何が起るかわかつたのもではない。

それに自分の入れた紅茶をハヤテに飲んでもらいたいといつ思いもある。

ヒナギクは一呼吸すると、ハヤテの部屋の少し離れたところにある台所に向かった。（マリアに場所を教えてもらつた）

広いこの屋敷なので、少し道に迷になつたが、なんとか台所と書かれた札が掛かつた入り口の前にたどり着いた。

中をのぞいてみると、業務用の調理器具やら何やらがずらつとたくさん並んでいる。

紅茶はどうなの・・・

部屋の中を見渡せば、紅茶の氣配は全くしない。

そもそも台所が広すぎるのだ。10畳はある。食器棚も二つあるみたい個あるんだか。

この中からちつぽけな紅茶を探し出すのは至難の業だ。

しかし、今はそれをやり遂げるしかない。

「どうあえずあそこからね」

ヒナギクは飲みかけのコーヒーの置いてある棚の辺りから探すことにしてた。

棚を空けると、そこにはコーヒー豆、インスタントコーヒーで一杯だつた。

奥の方まで探してみたが、世界中からかき集めてきたと思われるコーヒー類しか入っていない。

仕方がないので隣の棚を探す。

「あっ、これね」

扉を開けると案外あっさりと見つかった。

これまたコーヒーと同様に、何十種類もの紅茶が入っている。

紅茶好きなヒナギクはこれらが世界中の高級品だといつてが一目で分かつた。

これは紅茶の入れ甲斐があるわね

おいしい紅茶ほど入れるときの難しさがある。

ハヤテに自分の腕を見せるためにも「こゝはす」のを作らねばな

らない。

「わ、がんばりなくつちやー。」

ヒナギクは準備を始める。

まずは、熱々のお湯から。沸騰した瞬間のお湯約95 ℃が紅茶には最適です。沸騰させすぎると水の中の空気が抜けてしまうので、沸騰した瞬間のものを使いましょう。

次はティーポットにお湯を注ぎます。ティーポットを予め暖めておくと紅茶を高温に保てるるのでベターです。お湯は高めの位置から注ぎます。

次は茶葉を蒸らします。3~5分の間で好みの味を探しましょう。10秒違つだけでも印象がかなり変わりますので正確に時間は測りましょ。

さあ、ここまで出来たら完成です。

「よーし。いい感じね。早くハヤテ君のところへもって行きましょう」

一通り準備が終わるとヒナギクはハヤテの元へ向かった。

一方、ハヤテはといつと・・・

「ヒナギクさんと一緒にいるなんて・・・ダメだ考えると顔が赤くなるーーー！」

いまだに混乱していた・・・

5話（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここは「いつするといいんじやないかな？」
とか、

これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。
よろしくお願いします。

6話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

http://nocode.syosetu.com/n4238
d/

「ハヤテ君、入るわよ」

ヒナギクは入れたての紅茶を持って部屋に入る。

するとそこにはなにやら逝ってしまった顔をしたハヤテがいた。

どうしたのか聞くと、二人つきりになることを考え込んでいたらしい。

全くしようがないわね、そんなに恥ずかしいのかしら

まだ顔を赤らめているハヤテを見ると、思わず微笑んでしまう。

その過剰なまでの純粋さも人をひきつける魅力なのだ。

とまあ、解説してみたが、早く飲まないと紅茶が冷めてしまいますよ？

「あっ、そうだつたわ。危ない危ない

といつあえず紅茶にしよう。

ハヤテをベットに座らせて、カップを渡す。

ありがと「さこま」と言ひて、ハヤテは口元へ運ぶ。

どうかしら・・・

自分ではおいしいと思っても、他人がどうかはわからない。所詮味はそれぞれの主觀だ。

ハヤテの口の中に紅茶が注ぎ込まれる。

「とってもおいしいです、ヒナギクさん」

・・やつた！－！

ヒナギクは思わず心の中で叫んだ。

やはり好きな人に自分の作ったものをおいしいと言われるのは嬉しいことだ。

紅茶作戦は成功のようだ。

「うなれば後はお楽しみのティータイムが待っている。

ヒナギクもベットの横にセッティングした椅子に腰をかける。

紅茶の効果か、前回のような混乱は起らなかつた。

「やついえば、同じクラスになつたんですよね

紅茶も飲み終えたころ、暖かい午後の日差しを窓から眺めながら、世間話で盛り上がつた。

ハヤテが倒れたとき、実はナギもかなり心配していたことや、学校中にこの噂が広まつた（ガダムが倒れた）事など、話のネタはいくつでもあった。

たまにハヤテをおちょくつてみると、期待通りの反応するのでこれもまた面白かった。

こんな感じに。

「え、じゃあハヤテ君は私のこと嫌いなの？」

「いや、そういうわけではないですよ！？」

「じゃあ好きなの／／／／？」

「エイツ

W

!

そんなことをしているうちに、窓の外を見ると夕焼け色に染まつていた。

作者的には泊まつていってもらいたいが、明日も学校がある」とを考えると現実的ではない。

そろそろ足りなくなつた”池”の幸を”釣り”に行つたマリアも帰つてくるころだ。

「せつ、そろそろ私は帰るわ」

ヒナギクは仕方なく帰る準備をする。

といつてもまだ制服で、荷物もかばんしかないのだが。

家まで送りますよとハヤテが言つたのでそいつすることにした。これは願つてもないことだ。青春の代名詞、自転車一人乗り（違法です）が出来るのだ。

わざわざハヤテの部屋を出る。いや、正確に言つと由よつとしただけね。

丁度ハヤテがドアノブを触つた時、地震が襲つてきた。

ハヤテはドアの近くにいるので安全だったが、ヒナギクはまだ部屋の本棚付近にいる。

ハヤテはほぼ本能的にヒナギクを守る為、自分の下にかがませる。

すると、ハヤテの予感どおり本が大量に降ってきた。

ハヤテは余裕で耐えられると思ったが、片付けていなかつた広辞苑や英和辞書など重いものばかり降つてきて、姿勢を維持できなくなつてきた。

だんだんと腰が下がつてくる。

下を見るとそこには心配そうにひらひらを見ているヒナギクがいた。

まーこ、こままではつ……！

ハヤテは必死に耐えるが、筋力の限界が見えてきた。

仕様がない、こうなつたらフ！！

ハヤテはヒナギクを抱くと、物が落ちていないところへと瞬時に飛んだ。いや滑り込んだといったほうがだらしきたろう。

ふう、何とか助かったかな・・・

瞑っていた目を開けると、なんと田の前にヒナギクの顔があつた。

あれ、おかしいぞ。

そつこえば口元に何やら柔らかい感触がある・・・

つてえええええ――――――――――――――――――――

気付くと、自分とヒナギクの唇が、重なつていた・・・

6話（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここは「いつするといいんじやないかな？」
とか、

これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。
よろしくお願いします。

7話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

http://nocode.syosetu.com/n4238
d/

次の日の学校・・・・

「おはよひびきこます、ヒナギクさん／＼／＼

「おはよう、ハヤテ君・・・・・／＼／＼

そこには何やら氣まずい雰囲気の一人がいた。

あ～、もひーなんでこんな時に限つて隣同士なのよ（なんだ）！..!

二人は話すに話せない状況だった。

昨日も、あの後結局ハヤテはヒナギクを家まで送つたのだが、家に着くまでも間、一言も話さずに帰つた。

お互ひに、顔をあわせるだけで思い出して顔が赤くなつて、会話どころではなかつたからだ。

今日、いつたじどうやって過ぐせばいい（んだ）のよ・・

そんな端から見れば超青春ライフを送つている一人を観察する三人がいた。

「ねえねえ美希ちゃん、あれってヒューヒューなカップルさんだよね？」

「いや、まだあれは煮え切らないタイプだな。ここは我らがサプライズをして盛り上げてやらんと！」

美希が目を”キラン”と輝かせて叫ぶ。

その横では理沙が頭を縦に振りながら不敵な笑みを浮かべている。さあいくぞ！と息高らかに彼女らの任務を遂行しようとしたとき、運悪くHR開始を告げるチャイムがなった。

それと同時に遅刻ギリギリを狙つてくる生徒が山のように教室に入ってきた。

これではもうサプライズ（いたずら）ビリードではない。

今回は残念だが諦めることにした。

HRが始まると、薰が何ともいえない”またかよ”といつような顔をして入ってきた。

この時間は本来、副担任の役目なのだが、定番化した雪路の遅刻の性でわざわざ来ることになってしまった。

宿直室に泊まっている人間がどうして遅刻するのかは一般人には理解できないことだ。

薰はささっとHRを終わらせると、クラス内のまじめそうな生徒を呼び寄せた。もちろんその中にはヒナギクも入っている。ついでにハヤテも入っていた。

「知っているとは思うが、今日は生徒会役員選挙の立候補手続きの日だ。立候補しようと思っている人は放課後に職員室の私のところまで来るよ。あつ、あと桂は俺の推薦がついてるから。じゃあそういうことで」

そう伝えると、忙しそうに次の時間の授業のある教室へ向かっていった。

「全く、先生にはもう生徒会はやらないって言ったのに

残された生徒はやるかやらないかで話し合っていた。

それを聞くと、一人も立候補する生徒はいないようだ。

今年はヒナギクが降りた理由で生徒会をやめたり、立候補しない生徒が多い。それで教師側も人で探しに必死だ。ヒナギクは有能ということもあり、目をつけられたようだ。

一方のヒナギクは生徒会はやらないつもりだ。

仕事 자체は嫌いではない、むしろ好きな方だが、せっかくのハヤテとの時間がそがれてしまう。

せっかく一緒に時間が増えたのにわざわざ・・・あれ?でもハヤテ君も役員にすれば一緒に仕事が出来るってこと?

そうすれば放課後も一緒に・・・

生徒会、やつてもいいかも。

全く、怒涛の発想である。頭がいいんだか悪いんだが意見が分かれ
そうな発想だ。さすがケンカで男子に勝つただけの事はある。

それはともかく、決まつたら次は行動だ。

すぐ横で考へ込んでいるハヤテにやつアタックだ。

「ねえ、ハヤテ君。やつきの生徒会の話なんだけど・・・」

しかし、ハヤテは話しかけられるとすぐに後ろを向いてしまつ。

「やつたんだわ・・・

考えてみて氣付いた。昨日の出来事を。

思い出すと今度は自分の顔が赤くなつてきた。

しかしこんなところで負けてはいられない。

楽しく学校生活は今、この手に掛かつてゐるのだ。

「ねえ、じぶな時に悪いけど、生徒会をやるつもりはない?」

「いやあ、僕には執事の仕事もありますし」

「そんなの関係ないわ。私、だつて生徒会と部活を両立してたんだから、一流の執事なら学校と仕事を両立して当たり前でしょ」

ハヤテは痛いといひを突かれて返す言葉がない。

返す言葉を考えていひがじやあそつこいつでねと書つてヒナギクは去ってしまった。

「えーちよつとーあーもつ、お嬢様やマリアさんこどり話したらいんだーーー！」

こうして教室には悲鳴を上げるハヤテだけが取り残された。なぜかつて？次は移動教室だからです。

こうして放課後、結局ハヤテは断りきれず、立候補手続きをしてしまった。

何度も断らうと思つたのだが、横で振りまいてくれるヒナギクの笑顔が印象的で、これが見られるのならやつてもいいのかなと思つてしまふからだ。

その不思議な気持ちが恋心の始まりだといつかわかる日が来るのだろうか。

今を見る限り、ハヤテの春はまだまだ先になりそうだ。

あとがき

白皇の職員室ってどれくらいの広さなんでしょうね。小中高一貫で、予算もあるから先生は普通の学校より多いでしょう。多分300人くらいでしょうか。つてことは職員室はかなりの広さですね。迷いますよ、確実に。先生の机は座席表で確認できるように家の学校はなつてますが、300人も名前があつたらまずその中から目的の人を見つけられる気がしません・・・。

そのところ実際のどうなつているのでしょうか。

7話（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここは「いつするといいんじやないかな？」
とか、

これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。
よろしくお願いします。

8話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

<http://nocode.syosetu.com/n4238d/>

前の話の夕方……

「ただいま戻りました～」

ハヤテは屋敷の玄関にいる。そこにはいつも通りマリアが出迎えに来てくれている。

「おかえりなさい。今日はちょっと遅かつたですね。ナギが待っていますよ」

ナギは昨日学校に行つたということで今日は休んでいる。ゲームの遊び相手がないと暇でしうがないらしい。（マリアは強すぎてつまらないらしい）

とりあえずハヤテはマリアと共にナギのもとへ向かつ。

ナギのいるフステ部屋に着くと、マリアはお茶を入れるため、すぐそばにある台所へ向かつた。

ハヤテはとりあえずノックをして部屋の中に入る。

「遅かつたではないか！」

中ではマリアが言つていた通りナギが「ぐるぐるしながら一人ゲームをしていた。

相当暇だつたのか、ハヤテの顔を見るとすぐに飛びついてきた。

そしてすぐさま一人で対戦を始める。

「あー、僕のクーラークが！」

「ふつ、私のテー・ガード」「勝とうなんて100年早いな！」

丁度ゲームも白熱して疲れ始めたころ、マリアがお茶を持ってきた。

「はいはい、そろそろお茶にしましょうね」

ナギも疲れてきていたので、三人でお茶することにした。

普通、主従関係にある場合、お茶といったら主人だけが飲み、執事やメイドは後ろで見ているのだが、三千院家は主が堅苦しいことが嫌いなので皆で和気合い合いとしている。

「そういえばハヤテ、今日はどうしていつもより遅かったんだ？」

ナギはいつもより遊ぶ時間が短く、それが気になっていた。もしかするとまた面白こころに巻き込まれていた可能性もある。

ところが、ハヤテからの返事は予想だにしないものだった。

「いやー、ちょっと生徒会選挙の手続きをしていまして」

それにはマリアとナギが口をそろえて驚いた。

「おーハヤテ！生徒会とばかりこのことだ！私はそんなこと聞いてないぞ！」

「私も初耳ですよー本当にやるんですか！？」

「いや、ヒナギクさんにやらなきかつて言われまして、それで断れなくて・・・」

ハヤテの言葉を聞くと、ナギの様子が急変した。

額にはあからさまに”ムカつきマーク”が出ている。

ハヤテは本能的に感じた。

あれ、なんか地雷踏んだ？

そこまでは分かった。だが自分が言ったはずの”禁断のワード”がいぐり自分の言った言葉を思いだしても見当たらない。

困り果てたハヤテは最終手段のマリアに救いを求める田線を送つてみる。

だがマリアはもうダメですねという顔をしてくる。

やばい、完全に追い詰められてしまった・・・

だがナギの怒りは一向に収まりそうにない。

「私以外の女と関わると何回言ひたらわかるのだー何が”ヒナギク”だ！そんなにヒナギクが好きなのか？私よりヒナギクのほうが大事なのかー？」

ナギの周りはアーフィールドと化し、異様な迫力をかもし出していた。

もういつならつたら勘で回避していくしかない。

「いや、お嬢様のことも好きですよ?」

「んつー…じゃあ何が、ヒナギクのことも好きだตうのか…?」

ナギのことは命の恩人として好きだ。もちろんヒナギクにも世話になつてゐるので嫌いになる要素はない。

「いやまあ、ヒナギクさんのことも好きですけど…」

やつてしまつた。ついにこの一撃でナギのスイッチが完全に入った。

「なんだとぉ…・・・・・!…!…!…!…!…!…!

ナギのライジングアップバーがハヤテに炸裂した。

ハヤテは部屋の外まで吹っ飛ばされ、部屋の扉は閉められてしまつた。

ドアの向ひ側からはふんだ!ハヤテのバーカといつ声が聞こえてくる。

「痛くて…・・なんでこつもいつなるんだらつ

毎度ながら借金執事は未だ事の原因を理解できていなかつた。

やることのなくなったハヤテはひとまず台所へ向かうこととした。
それ以外にやることが思いつかなかつた。

廊下から立ち上がる「う」とすると、ナギの攻撃を受けたところが少し痛んだ。

すると、突然後ろから声が聞こえてきた。

「そんなことではいくら命があつても足りませんよ?」

振り向くとそこにはマリアの姿があつた。

「全く、しょうがないですね」

月の輝く夜景の輝きを受けたマリアの微笑みは、その名の通り聖母のように優しく、ハヤテの落ち込みかけていた心をすぐに癒してくれた。

「すみません・・・マリアさん」

二人は仕事場（台所）へと歩き出した。

「それにしても、生徒会の話は本当なんですか？」

二人は台所で夕食の準備をしている。

二人にとつて料理は手馴れたものなので集中力を要するもの以外は話しながらでも普通に出来る。

ハヤテはマリアに学校での出来事を一通り説明した。

「どうでしたか。（ヒナギクさんも案外大胆なんですね）でもナギはどうするんですか？学校のことばかりで執事の仕事をほつたらかしどいうわけにはいきませんけど・・・」

マリアはナギのことが一番心配だ。

恋人でもあるハヤテが屋敷にいる時間が少なくなるときつと悲しむだろう。

「それも考えたんです。ヒナギクさんに言われて気付いたんですけど、学校も仕事も両立してこそ一流の執事だと思うんです。偉そうなこと言つてますが実行できるかどうかが問題なんですけどね・・・」

「へえ、思つたより大人なこと言つますね・・・

ハヤテ君は頑張り屋さんですからね・・・なんとかなりますね！きっと！

「そうですか。では一いちいちできるかぎりサポートさせていただきますね。えつと書記になるんでしたよね？頑張ってくださいね！」

「はい！がんばります！」

こうして、ハヤテは無事にその口を行きぬくことが出来た。

ちなみに、翌日はナギの「機嫌を取るのがものすごく大変だったら
しい（ハヤテ談）

8話（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここは「いつあるといいんじゃないかな？」
とか、

これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。
よろしくお願いします。

9話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

http://nocode.syosetu.com/n4238
d/

なんだかんだあつたが無事に翌日。

今日から生徒会選挙の選挙活動開始日だ。

というわけでハヤテとヒナギクも今日から演説などを始める。

それで、今校門前で一人で演説をする準備の真っ最中だ。

「それにしても、本当に僕が生徒会になれるんでしょうか・・・」

「何言つてんるよーハヤテ君なら大丈夫だつてば！」

ハヤテは人前に出るのは本当は得意ではない正確だ。

ただ幼いころからのバイト生活のおかげで慣れてはいるが・・・

もちろん、今回もハヤテはかなり不安がある。

まあ、周りから見ればこれほどまじめで几帳面な生徒会向きな人間はそうはないと思うが、本人は全く自覚していないわけで・・・

そういうわけで、今回も演説内容は前日に考えたものをほとんど暗記してきている。

対するヒナギクは、性格上、リーダーシップというか人前に出るのが得意な正確なので全く心配はない。

こちらも本人は自覚していないが・・・

そんなわけでお互い励ましながら公約のチラシやらの準備を進める。

しかし、この平和で羨ましいラブ臭のするふたりに迫る邪悪な人影があつた。

「このおー、綾崎！一人だけ桂さんとなれなれしくしゃがつて！..
その罪をつぐなわせてやる！..」

校門の近くの木の陰から一人に殺人視線を送る、どこからどう見ても怪しい、末はストーカーな東宮だ。

「黙つていれば、俺の許可もなく桂さんとあんなことやこんなことを・・・（注意：消して怪しいことではありません）！..」

実は東宮はヒナギクと違うクラスになっていた。

ただでさえ彼にとつては究極のストレスであったのに、さらにやらとヒナギク親しくしているハヤテの姿が不幸にも彼の目に入ってしまった。

すでに平常心を失つた彼は行内最大の加入者と噂される”ヒナギクファンクラブ”のメンバーとともにハヤテに復習することを決めた。

そして、すでに計画は実行されている。

本当なら、ハヤテは学校には来れないはずだった。

ハヤテの通学路に仕掛けた数々のわなで登校不能状態に陥れるはずだった。

だが、どうやらハヤテのケタハズレの身体能力によってそれは回避されてしまったようだ。

「だが、次こそはお前に屈辱を貰えてやるー。」

そうこうと、どこからか出した無線機で指令を出した。

「いつでも笑顔を、一年綾崎ハヤテをよろしくお願ひします」

「责任感なら誰にも負けません。桂ヒナギクをよろしくお願ひしますー。」

そのころ、ヒナギクとハヤテの二人は登校する生徒増えてきたので演説を始めていた。

しかし、まだ早い時間帯なので人影はまばらだ。

ただ立っているのもつまらないので一人でときどき余談もする。

「それでも今日は朝から不幸でしたよ」

ヒナギクはまわりに人がいないか注意を払いつつハヤテの話を聞く。

また不幸な目にあつたのね・・まあ、珍しいことでもないんだろうけど・・・

「屋敷を出た途端、ゴミ箱から大量のねずみがおそつてきてですね。・・・」

まあ、想像できないようなことでもないわね・・・

「やつと追い払つたと思つたらなぜか交差点で轢かれかかるて・・・」

「

それって大丈夫なの！？警察に行くべきじゃないの・・・

「なんだか嫌な予感がしたので人気のない通りを通つていたら、今度は野生の猫に引っかかれて・・・」

なんでそこまで不幸が集中しちゃうのかしら・・・

読者の皆さんは分かっていると思いますが、すべて東宮の計画です

そんな感じの話をしていると、生徒の集団が近づいてきた。

アピールはこうこうとうときにするのが一番効率的だ。

すかさず一人はチラシを配り始める。

ところがハヤテはある事実に気がついた。

ヒナギクとハヤテは今、左右の校門にそれぞれ立っている。

しかし、まとめてやつてきた生徒数十人は”全員”ヒナギクの方に
よつていくのだ。

えつ、そんなことが・・・

ハヤテもビラを配りうとしたが、生徒達は受け付ける雰囲気が全くない。

ヒナギクはビラ張りが忙しくてハヤテのことには気付いていない。

ハヤテは数分間の間、孤独に立たされた。

やつぱり僕は、ダメなのかな・・・

あからさまに落ち込んで、地面に座り込むハヤテを見て、木の陰で東宮が勝利の笑みを浮かべていた。

9話（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここは「いつするといいんじやないかな？」
とか、

これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。
よろしくお願いします。

10話（前書き）

美希の短編を書きました。
是非見てください。

美希外伝

http://nocode.syosetu.com/n4238
d/

「フツフツフツ、計画通りだ！」

先ほど通つた男子生徒（と少数の女子）は全員ヒナギクファンクラブの会員だ。

今回の作戦はハヤテを選挙から脱落させて、少しでもヒナギクとハヤテの距離を離そうといつものだ。

まずは、ハヤテのやる気を削がすため、自分への自信をなくさせる作戦だ。

「完璧だ！ 今度こそ俺は綾崎を打ちのめしたぞ！」

東宮は自信満々に部下のファンクラブメンバーに自分の成果を見せ る。

ところがメンバーは東宮にあそこを見るとこいつサインを送つて いる。

なんだよ、せっかく作戦が成功してとこいつ

ハヤテがさつきまで地面に座り込んでいたところを見ると、そこではヒナギクと手を取り合つて いる姿があつた。

ビーゴー！ とダ――――――！

もはや心のなかで叫ぶしかなかつた。

見ているだけでかわいそうになつてくる程落ち込んでいるハヤテを見
ヒナギクが見捨てるはずがない。

ましてや、東宮は知らないがヒナギクの好意のことも考えるとこれ
は必然の出来事だ。

明らかな作戦ミス。

「くそ……っ！ 次こそはお前を倒してやる、綾崎！ …！」

そういうて東宮は数人の部下と共にビックへ走り去つていった。

ハヤテはといふと、

「ヒナギクさんって本当に頼りになりますね」

登校時間も過ぎ、ヒナギクと二人仲良く教室へ向かっている。

精神的ダメージも、ヒナギクの励ましでなんとかなつた。

「それにしても、ハヤテ君……」

ヒナギクは聞いておきたいことがあつた。

今回、生徒会にハヤテを立候補させたのは自分だ。

もし、ハヤテが本当は嫌がつているのなら今のうちにでもやめても
らつた方がいい。

わざわざ、ひびく落ち込んだ姿を見てヒナギクはそんなことを思った。

でも、それ以上に聞きたいこともある……

「ハヤテ君は、本当に生徒会やりたいの？」
「…………」

ハヤテ君は、私のことじう思つてゐる……

本当に私と生徒会やつてもことと思つてゐるのかしら……

しかし、ヒナギクの不安は瞬く間に消し去られた。

「何言つてるんですか！ ヒナギクさんと一緒にだから生徒会に立候補なんかしたんですよ？」

えつ、それつてどういふ意味……

「いつもヒナギクさんにはお世話をなつてばかりいるので、今回は僕がそばでサポートしますから！」

ハヤテはヒナギクの手を握る。

「だから、絶対に僕は当選しますよ！ ヒナギクさんと一緒に！」

クスツ

全然私の思いに気付いてないんだから。

でも嬉しい事言つてくれるじゃない。

ヒナギクもハヤテの手を握り返す。

「そうねーじゃあ一人で頑張りましょうか！！」

ヒナギクは向かい合うとハヤテに小指を出す。

「絶対、当選するって約束よ」

そして二人は誓った。

二人で力をあわせて絶対当選するっ！！！

誰もいない校舎の片隅で

少女の思いは

確実にハヤテに伝わつていった

10話（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここは「いつするといいんじゃないかな？」
とか、

これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。
よろしくお願いします。

そして放課後・・・・・

ハヤテは帰る準備中だ。

放課後は特に選挙活動はない。

しかも、執事の仕事もここ最近時間をかけられなくなつてきているので、今日は久しぶりにナギと遊ぶ（遊ばれる）予定だ。

しかし、そんなハヤテにお呼びがかかった。

「ハヤテ君、今日の放課後久しぶりに剣道部に寄つてかない？」

それは少しだけ一緒にいたいと思つよつになつた人からだつた。

ヒナギクだ。

ハヤテは考える。

今日くらいは屋敷に帰つてお仕事しないとまずいだろうな

しかし、ヒナギクを見るとなぜか一緒にいくなる。自分ではまだなぜかわからないけど。

そして結論は二つなる。

まあ、今日くらいはいいかな

こうしてハヤテはヒナギクと格技場へと向かつていった。

しかし、それを影から観察する男が一人・・・

「剣道か・・・・」これは良い！見てろよ綾崎！――

東宮も格技場へと向かつていった。

「ティヤ――――つ―！――！」

格技場はすでに数人の部員が練習を始めていた。

ヒナギクは部員にハヤテが練習に参加することを伝える。

すると一瞬だけハヤテに視線が集まる。

（（またあいつかーーっ！））

ハヤテは背筋が凍るような殺氣を感じたが、次の瞬間には何事もなかつたかのように穏やかな空気が流れていった。

何だつたんだと不思議に思いながらも、ヒナギクの言つとおりに稽古を始める。

編入直後に来たとき以来に剣道はやっていなかつたが、執事特有の運動能力で驚くほどの速さで上達していった。

やつぱりハヤテ君はすげいわね・・

一度手合させしてみたいけど、さすがに一人だけで試合つてこうわけにもいかないわね

ちょっと早いけど、しうがないから全員で練習試合でもしようかしら

理由は部長にしては不順だがとりあえず試合をすることになった。

「じゃあ形式はいつもと同じ勝ち残り式でやるわよ。じゃあ一番は綾先君と・・・そこの人!」

((そこの人!-?名前で呼んでくださいないのか!-?))

オリキヤラは使いたくないんです。がまんしてください。

しかし、問答無用に試合は始まる。

「試合開始!」

二人はまず間合いを取つて相手の出かたを伺つ。

「まあ良い、綾崎ハヤテ。悪いが俺が倒せてもうつー。」

「えつ、何で僕の名を!-?」

「問答無用!-!」

相手は面のフェイクを掛けながらすばやくハヤテの胸元に飛び込み、
腕を狙う。

ハヤテは体の前に竹刀を構え、ぎりぎりで受け止める。

そこからの鎧迫り合いは力でハヤテが押し勝つ。

「もうつたああー！」

よろけていたように見えた相手に懇親の面を打つ。

しかし、それは見事に止められてしまった。

「甘いな」

相手は竹刀を上に上げた状態から腕を放つ。

しかし、確実に決まるはずだったそれは虚空を切った。

何！！今のは達人でもそう簡単には避けられないんだぞ！？

見回してもどこにもハヤテの姿はない。

「上ですよ」

相手は咄嗟に竹刀を構えようとする。

しかしどきすでに遅し。

「面つ……！」

ペッパー。試合終了。綾崎ハヤテの勝ち！

試合が終わると、すごい試合があるといつ噂を聞きつけてやつてきた生徒が入ってきた。

勝者にも敗者にも歓声が送られた。

狭い格技場はどんぢゃんさわぎだ。

何これ、こんなにうちの部活強かつたっけ？

つていうかそんな強い人いなかつたわよね？いたなら今まで手を抜いてたつてこと？

どーなつてんのよ————つ！！！

部屋の片隅に1人取り残されてしまった少女がいた。

1-1話（後書き）

小説の感想、意見等隨時募集しています。
ここは「いつするといいんじやないかな？」
とか、

これはダメだろ

という意見でもなんでも結構です。

初めての小説投稿なので経験が不足しています。是非、アドバイス
を頂けたらと思います。
よろしくお願いします。

試合が終わると、ヒナギクはハヤテのもとへ駆け寄った。

目の前で好きな人がかっこよく勝つたのだ。いても立つてもいられない。

「す、いわハヤテ君…」

さつままで氣になっていた部員達の異常な強さも忘れ、ただハヤテがすじかつたことを話した。

我を忘れてハヤテの手を握りながら。

しかし、ハヤテは困った顔で周りを氣にしている。

ヒナギクはハツとして周りの見ると、自分達に視線が集中していた。

よく見ると自分の手はハヤテと……

思わず顔が赤くなる。

まずいわ、場の空気がなんかすじことになってる……！」これは適当に話をそらさないと死んじゃいそうだわ……。

「いやー、それにしてもどんなトレーニングをしたらあんなに強くなるのかしらー？」

頭をフル回転させたが、結局そんなことしか口から出でこなかつた。

「えつ、いやー特に何もしてないんですけどねー」

ハヤテが話をあわせてくれて、よつやく息がつまる視線から開放された。

ふうー、危ないとこりだつたわ

今までこいつの展開を味わつたことのないヒナギクは随分と精神力を消耗した。

次の試合まではまだ少し時間がある。

ヒナギクはハヤテの休憩の意味も含めて外で一息つくことにした。

手を引っ張つて、少しほなれたところのベンチまで連れて行く。

外に出ると、そこはまるで人気がなく、格技場のお祭り騒ぎが嘘のようにひつた。

天氣は気持ちの良いくらいの晴れで、心地よい春風も吹いている。

ヒナギクはベンチに座ると、さつきまでの出来事を思い出していた。

普段はあまり活躍していなかつた部員の活躍、ハヤテのすゝ過ぎる体力、技量・・・

そういうことばっかり特別な訓練はしていないとか言ってたわよね

あれほどどの動きをしながら、トレーニングはしていないというハヤテが信じられなかつた。何かしていても信じられない動きだつたが。

周りに人がいないことを確認し、ハヤテの体をチェックしてみる。

腕は・・・・意外と筋肉質ね、筋の形がはつきりわかるわ

足は・・・・服に隠れて見えないけど意外と太いわね

いつして調べてみると、ハヤテは意外とマッチョだ。

当然といえば当然だが。

本当にこれでトレーニングしてないの？

考えれば考えるほど疑問が浮かび上がるばかりだ。

うーん、やっぱり仕事をしてると違うのかしら。そういうことばかり来たとき筋トレやってたわよね、うーん、

「・・・・わん、・・・・くわん、ヒナギクわんー。」

ヒナギクは気がつくと深く考え込んでいた。

ハヤテは心配そうな顔をしてヒナギクを見ている。

「あの、ヒナギクさん疲れます？」

いや、あなたのことを考えてたんだけど……

考えていてもしょうがない。本人に聞いてみる。

ヒナギクは運動能力について聞いてみる。

ハヤテは昔のことと思い出し、どこか懐かしそうにも悲しそうにも見える様子で空を見上げて話してくれた。

小学生になったときからやっていたバイト生活、肉体労働が始まつたこの辺の辛い体験など今まで聞いていなかつたことを聞いた。

その話から、やはり小さじこころから労働に耐える為に本人は皆やつているところを教わったトレーニングや訓練があつたことがわかつた。

それに加え、小さじこころからの苦難が、いつの間にか丈夫な体を作つていたのだ。

ヒナギクは、そんなハヤテがとても強く見えた。

前からすこじこ生活をしてきたと噂で聞いていたけれど、まさかこんなにすごることは思わなかつた。

それをハヤテは乗り越えてきたのだ。

おもわず涙がにじんでしまつ。。

「ハヤテ君、私、その……」

言葉に詰まつたしまつた。

と、その時ベンチの後ろの茂みから三人の少女が飛び出してきた。

「暗すきるがそこの一入！」

「これを何の小説だと思っている！？」

「こんなこの作品に似合わないよ～」

三人娘だ。ハヤテが剣道部にいくと言つ噂を嗅ぎつけで一人を尾行していたのだ。

が、さつきのあまりの空氣の重さに耐え切れなくなり思わず出てきてしまったのだ。

しかし、当然尾行がバレればヒナギクからお仕置きを食らうのは決定事項だろう。

「あんた達、全部聞いてたのかしら？」

さつきとは一転して、ヒナギクからは何か殺人的な気がメラメラと漂っている。

一応顔は笑っているが、まったく笑っているように見えない。笑顔がまた怖さを強調している。

このままではタダでは済まない。

（（（なんとか切り抜けなくちゃ）））

三人は必死に言い訳を試みる。

「い、いや、ヒナ。尾行とは人聞きが悪いな。私達はただ剣道部が面白いことになつていてると聞きつけてやつてきただけで・・・」

「そうだ、あんなにギャラリーが多いのは私達が噂を広めたからなんだぞ」

「そうだよー盛り上げる為に達人達に部員に変装してもらつてるんだからー。」

一瞬場の空気が固まる。

泉は言つてはいけないことを言つてしまつた。

(しまつたー————!————!)

こいつなつてしまつたら、もう言ひ返すことも出来ない。

「くえー、じゃああの部員達は偽者なんだ。全く余計な」としてくれるじゃないの?」

ヒナギクから発せられている氣の濃度が高まっていく。

「いやあ、ある人に頼まれてそれで面白そつたから・・・」

もう死亡フラグ確定だ。ヒナギクの追い討ちが迫る。

「あんなことしてハヤテ君が怪我でもしたらどうするの?やつらいつとも考えたのかしら?」

怒り度99%。じつなつたら最後の手を使はしない。

「逃げろ――」

三人はあつといつ間に見えなくなってしまった。

ヒナギクはまたくもうとため息をつく。

「どうしていつもだけあの子達は体力があるのかしら」

愚痴を言いながら再びハヤテとベンチに座る。

それにしても、三人娘の話が本当だとすると部員ではない部員が試合をやつてになる。

部長としてそれは続けさせていいのだろうか。

初戦のレベルからすると、大怪我を生まないともいえない。

部長としての責任を考えるとやめさせたほうがいいのではないか・・・

しかし、そんな考えはハヤテの顔を見たら吹っ飛んだ。

ハヤテは今までに見たことのないやる気に満ち溢れた表情をしていた。

ハヤテは戦う楽しさを感じていたのだ。一対一の勝負はなにか心躍るものがあった。

ヒナギクはそんなハヤテを見て、試合をやめさせることは出来ない。

今のハヤテには男らしさがある。今は邪魔をしてはいけないと思つた。

ハヤテ君なら大丈夫よね・・・・きつと、

不思議とそう思えてきた。

時計を見ると五分ほど立っていた。

「ああ、せりそろ会場へもどりましょつか！」

二人は早足で各議場へと向かつていった。

会場に着くと、すでに試合開始直前だった。

ハヤテは急いで次の試合の準備をする。

勝ち抜きなので次の試合にもハヤテは出なければならない。

選手席にハヤテが着くと、すぐに対戦相手が決まった。

「第一試合、綾崎ハヤテとその人！」

またも実名で呼ばれなかつた対戦相手は、細身の綺麗な黒髪の少年だつた。

背丈も小さめで、かわいいとギャラリーの女子から「ブゴールが轟く。」

見た目は強そうには到底見えない。

あれ、これなかいけるかな

初戦からレベルが高かつたので身構えていたが、肩の力が抜けた。

試合前の礼が始まる。

それにしても本当にこの子も達人なのかな?なんか本気で戦つたらダメな雰囲気なんだけど・・・

しかし、ハヤテの心を読んだのか相手から手加減無用「ホールが掛かった。

いや、でも本気とが出したらあそじらぐんの女子からの非難がやばそうなんだけど

礼が終わり、試合が始まる。

「試合開始!」

とりあえずハヤテは相手の出かたを見る。

しかし、相手の方は序盤から積極的にせめている。

籠手面胴とバランスのとれた攻撃が繰り出されてくる。

その技の完成度は初戦の相手よりもむしろ高く、ハヤテは守る一方になっていく。

何なんだこの子はー。やつらのひとより全強いー。」**ヒカル**は本気を出さんないと負ける！

ハヤテも相手の攻撃をよけながら少ししずつ攻撃を加えていく。

しかし、それは相手にはかすりもしない。まるで未来が見えているのかのように余裕を残しながら戦っている。

時間がたつにつれ、だんだんとハヤテは追い込まれていく。

「なんだ、こんなもんだったの？ 紺先君。つまらないじゃん」

相手は鍔迫り合いの状態から一瞬なり力を抜き、ハヤテの体制が乱れた一瞬をついて突きを繰り出した。

それはハヤテの腹部にあたり、ハヤテはその場に座り込んでしまった。

「なーんだ、強いつて聞いてたからもつと楽しめるかと思ったのに。じゃあもう終わりにしようかな」

ハヤテは激痛をこらえ、何とか立ち上がる。

しかし、その瞬間、相手は尋常ではない速さでハヤテのふところめがけ飛び込んできた。

スパーン

そしてそこからハヤテの胴めがけて竹刀が振られた。

1-2話（後書き）

久しぶりに手の込んだ回となりました。少しだけ「いつこう展開をやりたい」と思います。「意見」「感想」がありましたらどうぞお送りください。

スパアーナン

ハヤテの胴めがけて竹刀が振られる。

くつ、避けられない、これで僕は終わるのか・・・

周りに視線をやると、心配そうにしているヒナギクが見えた。

その時、ハヤテの中で種がはじけた。

こんなところで、負けてたまるか

！！

ハヤテは襲い掛かってくる竹刀を受けとめ、決定打を防いだ。

しかし、相手の威力で10mは後ろに飛ばされてしまった。

あれ、決まったと思ったのに

相手は確実にハヤテをしとめるつもりだった。しかし、今のハヤテの動きは予想を超えたものだった。

「へえ、やるじゃん。出来るなら始めるからやつてくれればいいのに。じゃあそろそろ僕も本気を出そつかな」

ハヤテはさつきの一撃のダメージで朦朧としている。

相手はその隙に呪文を唱え始めた。

「 I have to take a restrained save Executive Access Agreement ! 」（ 訳があつてゐるとは限りません。本来はギリシャ語です ）

相手の周りからは不気味な光が現れ、模様が浮き出てきている。

「 Ceremony end Full open organization 」

全てを唱え終わると、相手から力のよつたものがあふれ出してきた。

ハヤテはよつやく立ち上がると、その圧倒的な力に晒された。

「 何なんだ、これは！？」

ハヤテの体は氣とは違ひ力によつて吹き飛ばされそうになる。

「 驚いたかい？これは俗に言ひ魔力つてやつだよ。野々原先輩と同じようなものだよ。僕の方が上級だけね 」

そういうと相手はハヤテの目の前から消えた。

とほぼ同時にハヤテの体に衝撃が走る。体に目をやると竹刀がめり込んでいる。

ハヤテは倒れそうになるのを耐え、相手がいるはずのところに勘で竹刀を叩きつける。

しかし、それは虚空を切った。

相手はわざと見付けていた。相手は比べ物にならないスピード、パワーで襲い掛かつてくる。

すかさず相手は再び攻撃を再開する。

もはや今のハヤテには決めてとなる一 手を防ぐことしか出来ない。使つてゐるのが竹刀とはいへ、相手のパワーともなると武器は何であれ関係なく大ダメージを与えてくる。

「がつかりだよ、せつかく本氣を出してみたら全然弱いじゃない」

相手の攻撃がさらによくなつていく。

「君はピンチに追い込まれないと強くならないのか？」

相手は肩、足などを狙つてくるようになつた。しかしそこを守つてしまは一本取られてしまう。

氣の遠くなるような痛みがハヤテを襲う。

ハヤテは朦朧とする意識の中でただ必死に攻撃を耐え続ける。

もうダメかも・・・視界もかすんできたな・・・

この氣の緩みでハヤテに一瞬の隙が出来てしまった。もちろん相手はこれを見逃すはずがない。

「じゅあこれで決めひかおうかな。ひょっと痛いけど我慢してね」

バシィイイイイイ——ン

ハヤテの面に風を切る音を立てて竹刀が降られた。

そしてハヤテは倒れた。

「ハヤテ君――――――！」

意識が戻ると、遠くからヒナギクが自分を呼ぶ声が聞こえた。

それと同時に烈しい痛みも襲ってきた。

くつ、完全にやられた・・・・もう体が持たない・・・・

そんな状態のハヤテを相手は見下ろしている。

「さあ、これで君ピンチに追い込まれた。これで少しほは強くなるかい？」

不敵な笑みを浮かべて竹刀を掲げる。

動けるのは数秒ってところか・・・・もう何も策はないけどあたつていいくしかない！

相手の竹刀が顔に当たる寸前、ハヤテは立ち上がり攻撃を再開する。

まだ種ははじけた状態だ。

「イヤアアアア――――！――！」

残された時間と戦つように、言葉の通り疾風の如く攻める。

相手は突然のことに対応し切れていない。

ハヤテは最後の力を振り絞り一瞬で間合いを詰めて面を打った。

スパーン

避けようとした相手は間に合わずかすり程度だが面に当たってしまった。

「ピュー、試合終了！ 綾崎ハヤテの勝ち！」

「はあ、終わったーー」

ハヤテは床に大の字になつて倒れこんだ。

そこへ相手が寄つてくる。

「おめでとう綾崎君。まさか僕が負けるとはね。見下してたよ」

ハヤテとしては今回の偶然勝ったのは分かつている。

そんなことはないですよと苦笑にする。

「最後の足の速さはずじよ。あれはほくもびっくりだったよ」

ほんとに・・・まさか君も魔法が使えたとはね・・・

魔法のことは言えないから黙つておくけど、いつか本氣で戦える日
がくるかも・・・

そういうと相手はそそくさとビードルへ消えてしまった。

それといえれ代わりにヒナギクがやつてきた。

大丈夫？とか痛くない？とか聞いているがそうじゃないわけがない。まあ、それは本人も分かつてはいるけど聞かずにはいられない。

聞かれたからにはハヤテは返さなければならない。けれど普通に痛いですとも言えない。そこで

「大丈夫ですよ、ヒナギクさん」

結局こう言つてしまつ。しかし今のハヤテは大丈夫じゃない。

ハヤテの視界がだんだんぼやけてきた。

そしてあっさりとぶつ倒れてしまつた。

気がつくとハヤテは自分の部屋にいた。

体を起こすと、気がつかなかつたが横にいたヒナギクが寝てなきやダメといつてまた寝かされた。

なんかまたヒナギクさんにお世話になつてるな・・・

起きてみればまた看病してもらっているのだ。ありがたくて（）いつからすると羨ましくて（）ショウがない。

ハヤテはふと思いつ出した。試合はビリになつたんだね。

説明するとそれはヒナギクが危険すぎるといつことで中断させた。もちろん重態なハヤテを見てはむかうよつた者はいなかつた。

「はあ、それにしても僕負けちゃつたんだな～」

ハヤテは試合のことを思つ出す。

やはつ負けるところは悔しかつた。

「でもすくべかつによかつたわよ。ほんとうに」

実際は動きが早すぎてよく見えなかつたがかつによかつたのは本当だ。

こんなことをしてみるとハヤテは入学式の日を思つ出した。

あの時も倒れちやつたんだよな。もつと鍛えなきやな。あのときもヒナギクさんはそこについてくれたな。

そういえば地震もあつたんだよな。それでヒナギクさんとなつゆきでキフュウ・・・・・・・・・・?

ハヤテは勝手に自分の回想にもがき始めた。顔も赤みが掛かつている。

ヒナギクは？マークが浮かぶ。

「どうかしたのハヤテ君？」

「いやつ！別になんでもないですよ！別にヒナギクさんと接吻したとか思ってませんよ！…？」

ハヤテは混乱していく何を言っているのか自分で理解できていない。当然ヒナギクの顔も徐々に灼熱し始めて……といつ悪循環に陥ってしまう。

「なんだか楽しそうですね」

顔を赤くしてもがいでいる一人端から見ると変だったが、マリアは超人的洞察力でだいたい何が起こったのか悟った。

そんなに慌てて何をしていたんですか？とか時々ジョークを混ぜて二人の調子を整えてあげた。

それでもしないと話なんて出来そうもなかつたからだ。

運んできたお茶も飲み終え、一段楽した頃、マリアはハヤテを見て言つ。

「それにしてもまた怪我をしてきたみたいですね」

包帯に半身を包まれた姿はいかにも痛々しい。

「無理をしたらダメでしょう？ただでさえ寿命の縮まりやつうことばかりしてきたんだから少しは体をいたわらないと」

頑張りすぎ症候群 + 何でも出来てしまつおかげでつこ無理をしがちだ。

今までだつて、そしてきつとこれからも・・・・

マリアは一度深呼吸するとハヤテのほうを向く。

「ハヤテ君。今日からまもつと自分のために生きてください。仕事は私達がフォローしますから。もう頑張りすぎはなしです」

マリアは続けて言つ。

「これは約束ですからね。私からだけではなくナギやヒナギクさんからもです」

ヒナギクも照れくさうに首を縦に振つてゐる。

「じゃあ、最初の使命はヒナギクさんを『お送りしてきてください』

ださー」

やつこひとマリアは部屋を出て行つた。

ハヤテは心中で精一杯のお礼を言つた。

14話（後書き）

感想いただけたら幸いです。

ぐだぐらな展開なので具他的なアドバイスなどいただけたら幸いです。

オレンジ色に染まつた空の下、一人はヒナギクの家に向かつている。

もちろんヒナギクを家まで送る為だ。

ハヤテは自転車を左手にヒナギクとタト色に染まつた道を歩く。

「でも、なんで自転車がいるんですか？」

ハヤテは乗らないのに自転車を持たせヒナギクの意図が分からぬ。

もちろんヒナギクは青春の象徴、自転車一人乗りがしたい。

しかし、違反というのもあるが、それ以上に恥ずかしくて言い出せない。

もお、なんでこりまでしてゐるに気がつかないのよ……

そんな感じで何も出来ないまま帰り道も半分を過ぎようとしていた。

このままではいけない……・・・・・

ヒナギクは意を決して言ひことにした。

「「あのー」」

しかしその言葉は誰かとかぶっていた。もちろん声の主はハヤテだ。

予想外に出鼻をくじかれ、急にやれりじてこた人に赤くなってしまった。

それを隠す為に必死に顔をそらす。

「あつ、ハヤテ君からどうだー?」

ハヤテもやりにい状況ではあつたが、ヒナギクの様子が変だつた為、自分から話すこととした。

「あの、自転車に乗りませんか?」

ヒナギクは自分の耳に入り込んできた言葉が信じられなかつた。

けれどもそれは願つてもないこと。

もしかしたらハヤテ君も私と乗りたいのかも

そんな考えまで持つほど嬉しかつた。

「このまま帰りだけ自転車を使うなんてもつたいないじゃないですか」

そんな考へは崩れ去り、すぐに彼女は現実に呼び戻された。そしてヒナギクをツンツンモードへ突入させる。

「あら、別に私は乗らなくていいのよ、ビツセ家までそんな遠くないんだし」

思つてもいことなのだが、素直になれなくてなぜかこんな言葉

が出てきてしまつ。

「いや、乗りたくないなんてとんでもないですよー。自転車の方が早く着きますし」

「それって私と早く別れたいってこと? 私なんてどうでもいいってわけ?」

気付いてみれば自分はハヤテを追い込んでいた。ハヤテは言葉が返せないらしく、言葉に詰まつている。

何やつてんのかしらあたし、一緒に自転車乗りたいはずなのに・・・

そつ思つていてると自然と言葉が出てきた。

「もお、しようがないわね。ハヤテ君がびうしてもつて言つなら乗つてあげるわよ」

素直になつきつてはいなかつたが、精一杯自分の気持ちを伝えていた。

それを聞くと、ハヤテの顔が明るくなる。きっと自分の怒りがさめたように思つたのだなつ。

そういうことでヒナギクはハヤテの後ろに座る。

ヒナギクは未だかつて二人乗りというものをしたことがない。いくら小さじこり暴れん坊だったといつても一応可憐な少女なのだ。

後ろのあの独特の硬いすわり心地が今は心地よく感じる。

ヒナギクはハヤテがしつかり座ったのを確認すると、ハヤテに抱きついた。

「ちよっと何やってるんですかーー？」

ハヤテが顔を真っ赤にしてこっちを見ている。

「だつて、これ動くんでしょう？つかまつてないと怖いじゃない。ダメかしら・・・・」

納得の理由にハヤテは黙つてペダルをこぎ始める。

「怖いからゆっくり走ってね！」

すっかし上機嫌なヒナギクはそんな条件まで加えてみた。

もちろん、ヒナギクは一人乗りが怖いわけでも、早いのが嫌いなわけでもない。

ハヤテの、より近くに、より長く居たかった為の口実だ。

今の一人の邪魔をする人は誰もない。

ヒナギクはハヤテの背中のぬくもりを感じながら、まるで子猫のように寝中に擦り寄つて幸せを感じる。

ゆっくりと流れる景色、誰もいない道。世界はまさに自分達を中心 に動いている気がした。

「ついで、しばらくの間、といつても時間的には五分くらいだったが、ヒナギクは何年分もの幸せを堪能した。

自転車が止まり、家に着いたことを知らされる。

名残惜しさがあるが、しぶしぶ自転車から降りる。

「わざわざ送ってくれてありがとう。とっても嬉しかったわ」

ちよっぴり桃色に祖また頬をしてハヤテに礼を言ひ。

ハヤテはその美しさに自分も頬が赤くなる。

「いえ、いかがいたしまして申し訳ないで
す」

気がついてみれば空は黒に染まり始めている。長話は出来ない。

「それじゃあね、ハヤテ君。また明日学校で会いましょう。」

ヒナギクは玄関へ向かい、ハヤテは自転車に乗る。

「選挙は明日が本番よーお互い頑張りましょー！」

「お互い、絶対当選しましょうねー！」

こうして二人はそれぞれの家へと向かっていった。

15話（後書き）

さて、久しぶりに舞い戻つてまいりました。
遊んでいたわけではないですよ？

ただ、ひぐりしゃりに出会ってしまったので作風が変わらないこと
を祈るばかりです。

えっと、相変わらず感想は随時募集しています。こんな風にすると
いいんじゃないかな等、ご意見多数お待ちしています！

次の日・・・・

「あ～、なんだか久しぶりに会話をした気がするな、ハヤテ」
ハヤテはナギと教室に向かっている途中だ。

もちろんこれは毎日あったんですけど、描かれることがなかつただけです。

「やつにえ、今日はお前の選挙があるんだろ？」

ナギは今回のことがあまりよく聞いていないが、とりあえずハヤテが出馬することだけ知っていた。

深く突っ込まないところは、彼女の大人の一面といつものだらうか。

「もちろん主としてお前に私の清き一票をくれてやるやん

ナギは恥ずかしがりながらハヤテの手を握る。

そんなナギにハヤテは優しく微笑み返す。

二人の絆は決して揺るぎはしない。たとえ世の中がどんな方向へなびくとも・・・・

そんな、晴れ渡った空のようだ、だれもがご機嫌になるよつた、すがすがしい朝だった。

しかし、それは昇降口につくと、すぐに崩れ去つていった。

そこには1人の少年が待ち構えていた。

「やあ綾崎とその連れ。ここであつたが百年目だな」

東宮だ。

ナギはいい雰囲気をぶち壊されてかなりいらだつている。

「それでだな、俺は綾崎に『だまれこの虫野郎が！さつあと行くぞ
ハヤテ！』

東宮はナギの気迫に押されて何も言えなかつた。

なみだ目になりながら、通り過ぎていく一人をただ見つめる。

ああ、俺は三千院なんかにも勝てないのか・・・

そのとき、東宮の頭の中に、ある誓いを立てたときの事がよみがえつてきた。

いや、俺は勝つんだ！勝たなければいけないんだっ――

「待つてくれ綾崎！」

ナギが早足でハヤテを引っ張つしていくので、大分距離は離れていたが、なんとか声は届いた。

「お前に話があるんだ。聞いてくれないか？」

ハヤテはどうするか悩んだが、東富がいつもよりまじめそうだったこと、ナギが限りなく不機嫌なことを考えてなぎを先に教室に行かせて、話を聞くことにした。

ナギは大分難色を示したが、ハヤテの巧みな話術で先に行つた。

東富は、ハヤテが戻つてくるのを見ると、急にまた元気になつた。

ハヤテは適当に流しながら、早く行きたいので用件を迫る。

「いや、それなんだがな、お前、今日の選挙負けてくれないか？」

予想をはるかに超えて火星くらいまで行つた返答に、ただ呆然となつてしまつた。

東富が言つには、選挙直前にある最後の演説で、自分が推薦する人を勝たせるようこじりこじらしく。

しかし、ハヤテからすれば訳が分からぬ。

第一、ヒナギクと一緒に当選すると約束したのだ。そんな要求飲めるはずもない。

「あの、何の悪ふざけか知りませんが、丁重に断りさせていただきます。」

少々強めに、自分の意思をはつきり伝えるように言った。

それを聞くと、東宮は最後の警笛だったことについて去つていった。

なんだつたんだ、あれは・・・

ナギが待つ教室に着くまで、ずっとそのことで頭が一杯だった。

何かの悪ふざけだったのか、それとも本当に向かするのか・・・

考へても一向に答えは出でこない。

あれこれ考へてこるひびき、気付いたら教室についていた。

教室にはまだいらだつているナギがいる。

教室に入ると、ナギの世話や、三人娘などに絡まれ、ゆっくり考えられる状況ではなくなってしまった。

そんなこんなで気付いたらHRの時間になつていた。

ハヤテはそのときすでにさつきまで考へていたことはすっかり頭から消えていた。

その後、ハヤテはいつも通り学校生活を過ごした。

そして、運命の選挙の時間がやつてきたた・・・

「それじゃあ期待の彗星、綾崎ハヤテ君がひづれー！」

ハヤテは全校生徒の期待のまなざしを一身に受けて、雪路からマイクを渡された。

えへつと、なんで僕はこんなことしてるんだっけ？

雪路は面白半分にほんせんばかりの顔でハヤテを見ている

何をやれどいつのかとこつと、究極の一本勝負、一発芸だ。

だから・・・・・

なんでこいつなるんだ――――――――！

それでは初めから順を追って回想しよう。

学校の6次元目が終わり、次は最後の総合の時間。

ここで選挙が行われることになっている。

「はあ、緊張するな～」

人前に出ることに慣れているとはいってもともとは得意ではない上、今日は大きな目的があるため、ハヤテは結構緊張していた。

そんなハヤテにアドバイスをする三人娘。

「ハヤ太君だつたら大丈夫だつて！私達でも大丈夫だつたんだよ？」

「そうだぞ。我々の公約を聞くがいい」

「その名も白皇大作戦！校内どこでも面白いことができるようにするという画期的なものだつたんだぞ！」

あまりアドバイスになつていない。

けれども、ハヤテにはそんな能天氣さが丁度良かつた。

まあ、公約だけはいただけないが。

緊張も少しほぐれ、ハヤテはみんなと一緒に体育館に向かう。選挙会場はそこだ。

向かう途中、三人娘にこんな話を聞いた。

「(一)の選挙は普通の選挙と一味ちがつんだよ～」

「選挙といつよりはお祭りといった方がいいくらいだな」

ハヤテにはいまいち意味が分からぬ。

「つまり、かなり盛り上がるってことだな」

「去年は花火とかまで上がったんだよ。ヒナちゃんびっくりしてたな～」

考えてみれば、この三人もヒナギクも去年同じように選挙をして、それに当選していたことになる。

この三人がこんなに手間の掛かることをしていたなんて考えずらい。

「えっとね～、それは美希ちゃんがヒ『わわっ！それは言わない約束だろ！…』」

突然美希が焦りだした。顔を真っ赤にして泉の口を強引にふさぐ。

何かあるのがまる分かりだが、そこは触れないで置こう。

「まつ、まあそんなわけでヒナが当選したときは大賑わいだったんだぞ」

少し冷静を取り戻した美希が、当時のことを教えてくれた。

選挙当時、学校中にヒナギクの噂が広まっていた。

もちろんその美貌と性格に惹かれてだ。

それでヒナギクの支持率は圧倒で、ヒナギクの勝利を祝うパーティーのようなものが沸き起こった。

その中には東宮のような裕福そつももちろんいたわけで、一説によ

ると数千万規模のパーティーだったらしい。

ヒナギクは自分のことがわかつていないので、ただ困惑していたといふわけだ。

「それで、今回もそうなるんですか？」

「まあ、今年もヒナは出るわけだし、何かしらあるだらうな。ただ、今回はヒナの人気が前より高まつてゐるからもつとすごいかもしけん」ハヤテはどんなものになるのか考えてみたが、全然想像がつかなかつた。

選挙といつものがひとつやってパーティーに変わるのが、とても楽しみだつた。

そんなことを考へてゐると、会場の体育館前についていた。

ついに今回の最後の戦いがやつてきた。

「じいじ全部が決まる。

今までがんばつてきたもの、ヒナギクとの約束を果たさねばならぬい。

ハヤテは深呼吸すると、大きく会場への一歩を踏み出した。

「白皇のリーダーとなるのは誰なのか。皆張り切つて応援しよう!」

才———つ！……！

会場内は選挙とは思えないほど盛り上がっていた。

迫力に押されて突っ込むことさえ出来ない。

とりあえず、なぜかいる盛り上げ役の司会者と、それに答える生徒達で会場内はまるでお祭りだ。

これは大変な仕事になりそうだな・・・・・

そんなことを思いながら、とりあえず指定された立候補者の集会所へ集まる。

そこにはすでにヒナギクの姿があつた。

「噂には聞いていましたが、こんなにすゞかっただんですね」

ヒナギクは「こうなる理由が分かっていないので、なんでこうなるの

かしらと首をかしげていた。

それにはハヤテも苦笑いするしかない。

参考に、去年の様子を聞いてみたが、こんな状況だったのを流れでやつていたらしい。

それでは参考にならないが、とりあえず自分の進行を予想してみる。

普通にやる 周りとかみ合わない B A D E N D

ハイテンション キャラが違う B A D E N D

ノッてる 周りはヒナギクファン B A D E N D

・・・・・

考へてはダメだといふことが分かつた。

こうなつたらその場で何とかするしかない。そのための人生経験なら嫌になるほどつんできてしまはずだ。

頑張るぞと心の中で気合を入れた。

やつてひいてこるつてこと、指導の先生が来た。雪路だった。

「ハイ皆聞いてね～。見ての通り会場はあんな感じだから適当に私達が進めるから振つたら何とかする感じでよろしく～」

「ちよっとお姉ちゃん！？ 適当つて何よー！ こいつ厳正なもののはもつ

としつかり・・・・

ヒナギクの最後の言葉を聞く前に、雪路はいつも間にか田の前から消えていた。

どうやら同会者の集まりの方へ向かつたらしい。

しかも鼻歌を歌いながらスキップとこう気持ち悪いくらいの上機嫌さだつたらしい。

機嫌が良くなるといつことは、せつと酒か豪華な料理でも振舞われるのだからとその場の全員が予想した。

雪路が勝手にいなくなつたので解散となり、その場に残つたのはヒナギクとハヤテだけとなつた。

「それにしても、とうとう本番がやつてきたんですね」

どうしても選挙会場とは思えない盛り上がり方が気分を複雑にさせるが、今までの努力の結果がもうすぐ出るのは変わりない。

「何言つてゐるよ。ハヤテ君なら大丈夫に決まつてゐるじゃない

ヒナギクは心からうつ思つ。

強いし、やせし。自分にはなくてはならない存在だ。

「ハヤテ君がいなかつたら私・・・・イヤ・・・・・

ハヤテは最後のぼうは声が小さくて聞き取れなかつたが、顔を赤くして小さくなつてゐるヒナギクがただかわいかつた。

ちょうどその時、選挙開始を告げるアナウンスが入つた。

「それじゃあ行きましょつか。僕たちの戦場へ」

ハヤテはヒナギクの手をとり、さらに盛り上がりが増した会場へと向かつていつた。

17話（後書き）

ずいぶんと無駄に長く引っ張った選挙シリーズももうすぐ完結です。しかし、どういうイベントなのか自分でもわかつていなかつたりします。いーラストとの案がある方は感想等からお願いします（汗）

それ以外でも、駄文ゆえの「」意見や、内容等への「」意見がありましたがお気軽に書いてみてください。きっと作者は喜びます。

それではまた次話でお会いしましょうー。

会場ではすでに数人が演説を始めていた。

ただ、演説といつても雰囲気はトークショーよりといった感じのものだ。内容は一応選挙関連なものになつてゐるが、ユーモアもかなり混ざられている。

何も知らない人が来ても選挙だなんて思わないだろうな・・・

文句は言つてみたが、ハヤテにしてみればこちらのほうがやりやすい。

こういう状況のほうが経験が多いからだ。

ハヤテは意氣揚々とヒナギクとともに、候補者がそれぞれ演説することになっているステージへと向かう。

ハヤテとヒナギクは隣同士のステージだった。

ハヤテは得意の話術で観客の心を奪つて行く。

とくに腐女子そからの人気は圧倒的だ。

ヒナギクはもともとの人気で観客のハートをつかんでいく。

ファンクラブ会員数だけでも全校生徒の1／5という圧倒的数だ。

一人の人気は圧倒的なものとなり、選挙はきわめて順調なものとなつていた。

といひがそれに水をさす男が男が現れた。

「はつはつは、ずいぶんと調子に乗つてゐるようだな、綾崎

また東宮だ。

まつたく、今度は何の用だつて言つんだか

「今日はな、お前と勝負をしてきた！」

そんなあからざまに勝負つて言われても、今の時代決闘とかできませんよ？

「心配するな、そんなことはしない・・・選挙で勝負だ！」

いやいやいや、それもないでしょう。

しかし、面白いうな展開に、周りが盛り上がり、断れなくなつてしまつた。

しかし、別に何か害があるわけではない。東宮に負けるくらいならもともと選挙に勝てるはずがない。

まあ、それは別として疑問があつた。

たしか、東宮は選挙に立候補していなかつたはずなのだ。

なのに「やつやつて勝負するところのだらけ。

「それは心配するな。」この俺に代わって我らが愛歌さんが勝負する！」

東宮の後ろにはいつの間にか愛歌がいた。

何を考へているのか、まったく想像を許さない笑顔でその場に君臨している。

ハヤテはその貫禄に息をのむ。

「お手柔らかにね、綾先ハヤテ君」

ハヤテの本能は大乱闘を予感させていた・・・

「勝負は簡単。一対一で選挙をして、投票数が多かつたほうが勝ち。わかりやすいだろ？」

いや、選挙って言つたら後半部分はあたりまえだから。

しかし盛り上がりのあまり、そんなことは気にできぬ状況ではない。

「ルールも簡単。制限時間内に演説っぽいものをするればいい。手段は問わない。妨害あり。以上だ」

それだけ説明すると、東富は用意していたゴングをならした。

なんか始まっちゃったみたいだな

しかし、負けられないのはかわらない。

まずは相手の出方を見てから考えよう

愛歌はというと、演説をするでもなく、適当に一人を選び、耳元で何かをささやいていた。

十数秒だつただろうか。愛歌がささやき終わった後、選ばれた一人は気でも狂つたかのように愛歌の応援を始めた。

えっ、今何話したんだ!!!!

考へてもしようがない。相手は確実に一人ずつ落とすつもりらしい。

それなら得意の話術で大人數を一気に落とせばこちらが有利となる。

しかし、もう一度愛歌のほうを見たハヤテは驚愕した。

なんどついさつきまで一人だけだつた犠牲者が、十人程度にまで増えていた。

何――――――つ――感染するのか、あれ――!

これはまずい、このままでは確實に自分よりも多数を手に入れるだろう。

「ふつ、どうした綾崎。所詮貴様はその程度か？だから警告しておいたの！」

横を見ると、勝ち誇った顔で東富が見ていた。

「まあ、お前は女顔で貧乏で、実年齢小学生にやとわれているへタレだからな。無理はないか。ほつほつほつ！」

カツチーン

切れた。

といつてもハヤテではない。

ヒナギクだ。

「ちょっとそれどうこう意味よ。ハヤテ君のこと悪く言ひのは許さないんだから！」

完全に不機嫌モードに入ったヒナギクからはダークネスなファイールドが展開されている。

ハヤテと愛歌の勝負はいつたん選挙を中止して行われていたので、ヒナギクもそれを見ていたのだ。そして聞いてしまったのだ。

「いや、桂さん。よく見てみてください。その男に向ができます！」

ヒナギクが出てくることは完全に予想外で、少々東富は焦っている。

「何だつてできるわよ！ハヤテ君は天才なんだからー。」

対するヒナギクも怒りでわれを忘れて、勢いでものを言つてゐる。
「じゃあ、これはどうですか？」この場の全員を納得させる一発芸を披
露させてみてくださいこよー！」

東富はもつ思いつきでものを言つ悪い癖が出ててしまつてゐる。
自分で何を言つてこいるのか理解できていない。

「いいわよーハヤテ君やつてー！」

・・・・・

いやー、僕はまったくできるとか言つてないんだけどなー

もはや固まるしかない。

ヒナギクの振りで、なぜか沸いて出でてきた雪路に体育館の真ん中までつれこられた。

そしてそこで　ハイ、注目注目ー！　とか言しながらハヤテにマイクを渡してきた。

回想終了

だから・・・・・

一通り事態を整理したところで納得できない。

そういえば以前、咲夜の誕生日会でも同じ日があつた気がする。

もう、そののりで行くしかない。

は
じやあ行きますか

それは352年前、中國は…

長い戦いが始まった。

1-8話（後書き）

さて、なんか無駄に続いた気がしないでもないですが、選挙編です。

落ちが決まっていないのでどうなるかわかりません。
期待はしておくと作者が喜ぶでしょう。
それではまた！

それでリーはいったのさ。それじゃあ私の娘と同じじゃなかつてね」（キラーン）

オオオオオ――――――――――――――――――――――

五分以上にわたる決戦は幕を下ろした。

どうとか成功をせられたようだ。

「どう、これがハヤテ君の実力よ！」

ヒナギクはハヤテの話が聞けて、かなり上機嫌なようだ。

がんばったのはハヤテなんだけどね。

東宮は、ハヤテがここにまだうまくやるとは思つていなかつたらしく、あせりの表情が見て取れる。

「まだですよ、勝負は選挙が終わるまでわからないんですからー。」

そう、まだ油断はできない。相手はあるの愛歌さんなのだ。

それから、ハヤテのヒナギクはできる限りのこととした。

そして、投票が終わり、運命の開票の時間・・・

投票箱から次々に表が出され、集計されていく。

目の前に見えているだけに、緊張感はかなりのものだ。

そして、発表のとき・・・

「大丈夫よ、ハヤテ君ならできるわ」

ヒナギクがそばで見守ってくれている。

ナレーターのところへ結果が書かれた紙が渡される。

いよいよだ・・・

「開票の結果

霞 愛歌、583票

綾崎 ハヤテ 529票

よって、霞 愛歌の勝利です「

えつ、そんな・・・

今の放送は聞き間違いだろ？か。いや違うだろ？

ただ公然と突きつけられる事実を自分が認められていないだけだ。

しかし、認めたくない。認められない。

「僕は、、、、、僕は・・・・・」

力なくしゃがみこんでしまったハヤテにヒナギクが優しく声をかける。

「仕方のない」とじやない。ハヤテ君はよくやつたわ

しかし、慰めるヒナギク自身もショックだった。こんなに応援していくも負けてしまうといつのは心苦しかった。

そこに、無常にも東富が勝ち誇った表情でやつてきた。

「それじゃあ負けた綾崎にはいつの間にかおもひの言ひ方を聞いてもらおうか

そしてその空氣の読めない口から言ひ渡されたのは、、、、

「「」の選挙を棄権しろ」

ハヤテの中での言葉が何回も「」だまする。

絶望感のようなものが体中に充満し、ヒナギクとの約束を果たせなかつた」とへの悔しさも湧き出していく。

ヒナギクはそんなのひどすぎる」と抵抗してくれているが、負けじ
まつた以上、男として要求は呑まなければならない。

「わかりました、それでは手続きを『ちょっと待って』」

突然、ハヤテの言葉がさえぎられた。

ヒナギクのほうを見てみたが、彼女もきょろきょろしているので違
うようだ。

「そんなことする必要はないわ」

人の山から出てきたのは愛歌だった。

それがわかると、同時に疑問も出てきた。

「どうしてですか？僕は負けたのに」

「やうだ、僕は正式に勝ったんだぞ！」

東宮も黙つてこらふことがわかつていないので、

愛歌は東宮の仲間のはずなのになぜこんなことになるんだろ？・・・

「理由は簡単です。私は副会長で立候補しました。綾崎君は書記で
す」

・・・・・

会場内に長い沈黙が訪れた。

そしてどれくらい経つただろうか。沈黙の要請がいたるところを飛び回りつくしたころ、会場内にようやく失笑が生まれ始めた。

「じゃあ、僕はこのままいてもいいんですね？」

ようやく事態を理解し、その言葉に愛歌も笑いながらうなずく。

しかし、一人だけこれに納得しない人物がいた。

「そんなのありかよ！ だつて、綾崎は仮にも負けたんだぞ！」

まあ、人として正常な反応ではある。

明らかに、自分に過失はあるが。

「仮に、私が書記候補だったとしても、勝手にこんな勝負とかさせないわ。それに、今は書記候補が綾崎君だけだからやめてもらつた

「ひひひあがいるの」

もはや東宮にはむかう余地はない。

「ひひひ、覚えてろよ、この馬鹿野郎……」

半べそをかきながらビンカへ走り去ってしまった。

ひひして波乱に満ちたなぞの決闘は幕を下ろした。

その後、選挙はいたつて順調に進み、無事にハヤテ、ヒナギクともに当選した。

まあ、例によつて壮大なお祝いパーティーが行われたが、それはまたどこかでお伝えすることにしよう。

そして、選挙日の翌日。

翌日から働かされているのも考え方だが、ヒナギクは一期連続といつこともあるてなぜかハヤテもセットでさうそくお仕事をしていた。

「それにしても、本当にうまくつてよかったです」

一時はどつなるかと思つた。

愛歌さんは冗談が本当にきつこ。

後で愛歌から聞いたが、勝負にならないことを知つていて東宮に協力したそうだ。

面白そうとこいつ理由で。

これからハヤテの生活が危ぶまれる。

「まあいいじゃないーどんなことでも一人そろえれば出来ない事なんて何にもないんだから」

他の生徒会員は、初めてでまだ講習中だったり、愛歌のように学校を休んだりで今、生徒会室は完全に一人のものになっている。

おかげでヒナギクの『機嫌度メーター』もうなぎのぼりだ。

今の台詞も、最後にハートマークがつきそうなほどだ。

無駄に立派なテラスから、春の鳥の鳴き声が聞こえる。

いかにものどかな風景で、これ以上ないほど平和だ。これを見てみると、ハヤテなりの理論でヒナギクの機嫌がいいのもわかつてくる。

こんなところにいられるのもヒナギクさんのおかげなんだよな

ヒナギクは鼻歌を歌いながら、座高くらいまでたまつた書類を片付けている。これでも一人で分けているんだが。

考えてみれば、ヒナギクさんが誘つてくれなければ生徒会なんて絶対やらなかつた。

もしも、あのときヒナギクの誘いを断つていたらどうなつていったん

だろ？。

熱くなつたバトルも、マリアさんからもりつた自由な時間も何もかもがなかつたかもしれない。

そつ考えると、自然と言葉が口から出でいた。

「ヒナギクさん、本当にありがとうございました」

ヒナギクはいきなり何を言つのよと、急に顔が赤くなつた。

正直、かわいらしく思える。

「ここまで、いっぴいお世話になつてきました。だから、、、今度は僕があなたを守ります。それでもいいですか？」

ハヤテは手をせしのばす。

ヒナギクは右を向いたり、左を向いたりして困つた顔をしたと思つたら、今度は顔から蒸氣が出そつなほど赤くなつた。

そして、

「お願ひします・・・」

一人の手は重なつた

第一章
完

19話（後書き）

長かったようで短い、第一章完結です。
これは、プロローグ的なものなのでこれから第一章、三章でそういうこと
盛り上がっていきます。

これまで読んで頂いて来た方、本当にありがとうございます。そしてこれからもよろしくお願いします。
それではまた一章でお会いしましょう。

p.s. 近々オリジナルを書く予定です。そちらもよろしくお願い
します。

「お嬢様、おはよーい」ゼーこます

ハヤテはいつもどうりナギを起こしに行つた。

風の冷たさもだいぶ和らぎ、春もいよいよ真っ盛りと言つ感じの4月下旬。

蚊という人類い最大の敵もなく、またすこしやすい気温のこの季節は誰もが心休まる。

しかし、そんな中、すがすがしいと言つ言葉とはまったく正反対の状態の少女が一人いた。

予想通りといつたら怒られそうだが、簡単には起きてはくれそうにないダラケ具合だ。

「昨日は学校いったんだから今日は休ませてくれ・・・」

分厚いドア越しに、ナギの眠そうな声が聞こえてくる。

まあ、この陽気での眠気は理解できなくもない。

本当に眠うなのでハヤテは今日はゆっくり寝かせてあげよつと思つた。

「ダメですよ、ハヤテ君。あんまり甘やかすと後が大変ですよ?」

見破っていたのだろうか。マリアが良すぐれるタイミングで出てきた。

そして、鍵のかかったナギの部屋にマリアにのみ許されたレアアイ
テム「合鍵」で見事進入に成功した。

マリアは嫌がるナギに無理やり着替えをさせているようなので（音
が聞こえるだけ、決して見てないですよー）、ハヤテは朝食
の準備に向かうこととした。

しばらくして、あからさまに不機嫌な顔をしてナギが食堂に現れた。
そんなに学校がいやなのだからか。いまいち理由がわからない。

「家でゲームしているほうがよっぽど楽しいし、それに家で勉強す
るほうが効率がいいからな。あんな無意味なところに行きた

くなるはずがない」

そうですか・・・

でも学校は人間関係も学べるところなんですよとマリアが言つたが、
ナギはふんふんと黙つてスルーした。

「まあ、今日は特別に学校に行つてやるとこなんですが」とマリアが言つたが、
くしな

やつと学校に行く気になつてくれましたか・・・

ハヤテはひとまず安堵する。しかし今までくれば後は楽勝だ。自然とテ
ンションもハイになる。

うん、沖縄か。さすがお嬢様だ。沖縄はいいところですね！

•
•
•
•
•

突然叫びだしたハヤテにマリアとナギの視線が集まる。

何なんだという二人の表情にハヤテは、

「そんなの聞いてないですよ！ いつ行くんですか！？」

ナギは朝からうるさいなと囁つ顔で淡々とハヤテに伝える。

もうすぐGWだろ? そのとき「行くんだよ」

しかしハヤテの冷静さはまだ戻っていない。

いや、だって僕土日とか生徒会の仕事とかありますし、いきなりそんなこと言われても困りますよ！GWって行つたら明日じ

やないですか！」

壁にかけられたカレンダーには4／28と記されていた。

一応ハヤテも生徒会役員になり、きちんと毎日のように残って仕事をの山をヒナギクとともに片付けている。

他の役員もいるけれど、処理能力の違いから書類関係はすべて二人の仕事になっていた。

いや、最近はすべての仕事になってきてているが。

そんなわけで、いきなり沖縄になど行けるはずがなかつた。

しかし、ナギはまったく動搖せず、めんべくそうこ、元

「それなら問題ない。前もってマリアに生徒会へ伝えさせておいた」
マリアは白皇出身で、学校に親しい人もいるのでもちろく学校に顔を出している。

今回も、マリアは直接伝えに行つたのだが、マリアはとある生徒会と名乗つた三人に伝えたらしい。

三人はOKを出してくれたらしいが、とても愉快で明るい人たちだつたと言つ。

まさか、これがとんだ事態を招くことになるとはだれも予想しなかつただろう。

「まつ、そういうわけだから

といつて、ナギは自室へと戻つていった。

「沖縄か？」

ハヤテもかばんを取りに自室に戻っていた。

実は、ハヤテはいろんなところに行つたことがあるのだが（いい思いではほとんどないが）、南のほうへは行つたことがなかつた。

沖縄って何がどれるんだろうとか、北の海での出来事と熙らし合わせながら考えていると、そろそろ学校へ出発する時間になつていた。

ナギを遅刻させるなんて執事としてあつてはならない行為だ。

そして、今日もナギと自転車で学校へ向かった。

学校では、当然周りの人はこれから自分が沖縄に行くなんてことは知らないわけで、みな平然といつも通り暮らしていた。

けれども、わかりやすい性格のハヤテはハイにならずにはいられない。

なんとなく周りと違つ雰囲気をかもし出しながら一日授業を受けていた。

もちろんろくに授業に集中できるわけもなく（一応聞いてはいる）、あつという間に昼休みになり、気づいたら放課後になつていた。

「さつ、帰りまじょうか、お嬢様」

ナギはとこうと、旅行というか、外出は慣れっこなのでまるで普段と変わつていな。

ただ、ハヤテの機嫌がいいのはナギにとつてもうれしことのようだ。

朝までの不機嫌さは、そよ風に乗つてブラジルあたりまで飛んでいつていた。

ハヤテはナギの荷物を持ち、教室を出ようとしたそのとき、後ろから声をかけられた。

聞き覚えのある三人の女子の声だった。

「ハヤ太君、君は私たちに何か言つべきことがあるのではないかな？」

「かな」

美希、泉、理沙だった。

しかし、まあ、ハヤテは考えた。いつたい何をこの三人に伝えなければいけないのだろう。

ひょつとして休み時間とかに何か伝言とかを預かつたのかと、必死に記憶をたどつてみたが、それしきものはない。

いつたいなんなんでしょう。

「我われはだな、世界中に展開している情報組織からある情報を得たのだよ」

これまたえらく大げさなものが出てきた。

ハヤテはうそだと確信して、それはスルーすることにした。

「君は、我われという何にも変えがたい友人をおいて、自分たちだけ沖縄に行こうとしているのではないかな？」

美希がキラーンという効果音が良く似合つ感じで、ハヤテに迫つてくる。

調べるのが得意だからか、今の美希のセリフにはキマッている感があつた。

「何でそれを知っているんですか！」

ハヤテはハヤテで、大げさにリアクションした。

実際、なんでこれを知られているのか不思議だった。べつに大統領がどつかの家に訪問に行くからとかで秘密にしているわけでもないのだが、話してもないので知られているのは気持ちが良いものではない。

もしかして、さつきの情報組織とかいうものは本当なのだろうか。

「これは白皇である。美希や泉も大金持ちだ。そんなものを所有して

いる可能性を否定しきれないところがある。

ハヤテがそんなことを考えて、顔から汗をたらしている中、ナギは全てがわかつたらしく、やつてしまつたといった顔になっていた。

わかつたならハヤテに教えてあげなさいな。

ナギは仕方なさうに解説を始めた。

「多分これであつてゐると思うがな。昨日、マリアが学校に直接、生徒会に沖縄のことを伝えたつて話しただろ? そのときマリアが明るい三人に伝えたつて言ついた。
多分、それはこの三人のことだろ? 違いますか?」

三人娘はさすがといつた感じの表情だ。

しかし、驚いたりしてゐる感じはない。当たられるのは予想済みのようだ。

「それがわかれば話が早い。我われと + @と一緒に沖縄に連れて行くんだ」

はあ、展開的に予想はしていましたけど……。

ハヤテは絶句するしかなかつた。ちやつかりにもほどがある。特にこの三人はラーメンのメンマのように簡単に追加できるものではない。来るからにはラー油のように入れすぎると大変なことになる。そもそもそんなこと自分に決定権があるわけではない。

まあ、その辺は三人娘もわかっているようで、ハヤテではなくナギ

に言つてゐるようだ。

だが、ナギもそんな簡単にOKを出すはずがない。

せつかくのハヤテと一人つきり作戦が台無しになつてしまつ。

しかし、それもまた三人娘には想定済みのようで、ナギを近くの茂みに連れ出し、なにやらひそひそと伝えてゐる。

ハヤテは完全に蚊帳の外だ。

カツプラーーメンが一個出来るかできないか位して、ようやく四人は茂みから出てきた。

何を吹き込んだのか知らないが、ナギはどうやら三人を連れて行く気になつたらしい。

よかつたらナギの手なずけ方を教えてもらいたいハヤテだが、そんなことを聞いている暇もなく、十分な成果を挙げられた三人娘はさつさと撤退してしまつた。

屋敷に着くと、ナギはさつそく旅行の準備を始めた。

まあ、結局はナギが散らかしたものをマリアとハヤテが片付けるといつ無駄骨に終わるわけだが、本人が気づくまでこれは続くだろう。

食事前にり、思い出したようにナギは帰りがけに起つたできじとをマリアに伝えた。

ハヤテは急に人数を増やすなんて無理だと思っていたが、予想に反してマリアは簡単にOKを出した。

マリアによると、飛行機も専用機だし、行く予定のあるところも一通り仕切つてあるので特に問題ないということだった。

まさにやりたい放題といった感じだ。これによつていつたい何人に影響が出てるんだか。

そんなこんなで、波乱の幕開けとなりながらも全員が就寝についた。それぞれ心の中に別々のことと思い浮かべながら舞台は翌日へと移つていった。

「なんだこれ・・・」

舞台は翌日、某国内線最大の空港。ハヤテ一同はロビーの一部をVIP席として貸しきつてたむろつていた。

まあ、これだけでも驚くべきことだが、ハヤテが驚いているのはこのことではない。

ハヤテが見つめる先には大きな窓があり、さらにその先には飛行機のターミナルが広がっている。

さらにもピントでハヤテの視界をお届けすると、待機している飛行機のひとつに”SANZENIN”という文字があった。

さらにその飛行機はつい先ほど、同じく”SANZENIN”とシヤツターにでかでかと、しかしなぜか上品さが漂う感じで書かれている倉庫から出てきていた。

あれ、ここって羽 空港だよな・・・？

毎度のことながら三千院家の財力には限界というのが見えない。

凡人のハヤテの想像し得ないことが当たり前のように行われている。城を持っていたり、練馬の半分くらい所有してたり・・・

ハヤテは今まで見てきたものの値段を計算してみて、その天文学的な額と、自分の一年暮らすのに必要な額の差に驚愕していた。

そんなハヤテを尻目に、続々と集まってきた今回のメンバーがだんだんと騒がしくなってきた。

騒がしくするとこつと三人娘のことを連想する人が多いと思つが、今回ばかりは彼女らだけではない。（結局入つてこるけど）

金髪ツインテールのちびっこのと、桃色完璧超絶美貌少女が、いかにも子供っぽい感じで言い争つている。

「なんでお前がここにいるのだ！」

「あたしだって知らないわよ！ 美希たちに言われてついてきたらいつの間にかここにいたんだから！」

言つまでもないが、ナギとヒナギクだ。

“どうやらなんでここにヒナギクがいるのかでもめているらしい。このままある一人の描寫をしていても解決するまで時間がかかりそうなので私がすることにしよう。

今回の沖縄の旅を三人娘たちがナギに飲ませたとき、契約内容は”我われと+@と一緒に沖縄に連れて行く”だったのだ。

しかし、ナギとしてはできるだけ少ない人数で行き、少しでもハヤテと一緒にいる時間を増やしたい。そもそもそのとき浮かれていて、誰か他に来るといつのは聞こえていなかつた。

さらにヒナギクは、ナギを説得した後、新型新幹線をも越えるかの
ごとく猛烈な勢いで家に押し寄せてきた三人娘から、一緒にどこか
へ行こうと誘われ、（ハヤテが一緒というのが味噌）とりあえず泊
まれるだけの仕度をしてやつてきた次第だ。

当然、ここまでやつて來た以上、やすやすと帰るつもりはない。

そんな感じの理由で、彼女たちは争っていた。一人の性格は前に語
られているように似通っていて、運の悪いことにツンの部分が似て
しまっている。

一度買つてしまつた県下は理由がなくても負けられないみたいなプ
ライドが育つてしまつているのだ。

当然、この一人を手なずけるには相当なスキルが必要となる。しか
し、この場にはそれだけのスキルを持ったスーパー・メイドさんがい
るのだ！

「はいはい、飛行機の席も旅館の部屋も余分にありますから大丈夫
ですよ？」

文章にすると一見何の変哲もない言葉だが、実際に名まで見ると迫
力というものがあり、なぜか逆らうことができなくなる。

顔は笑顔のままだが、中身は夜の歌舞伎町のやべぢつていつたとえ
が一番しつゝり来るよつに思つ。

ナギとヒナギクも、その一言で冷静さを取り戻し、その場はひとま
ず片付いた。

さて、なんだかいろいろあつた気がするが、まだ飛行機にも乗っていない。

一応自家用ジェットといえどもあまり待たせるわけにも行かないの
で、とりあえず飛行機に乘る。

こうして一同7人はぞろぞろと搭乗口へと向かっていった。

「「海だ――――――!」」

見渡す限りの青く、透き通った海は三人娘でなくともはしゃぎたくなるほどきれいだった。

ここは、那覇空港から小型機に乗り継いできた小さな離れ小島だ。

しかし、本島からはそう離れてはなく、しかし海は百倍という数字も大きさではなく思えてくるほど美しい絶好の地理環境だった。

島は丸いと三千院家が買い取り、一部リゾート施設として開放しているところもある。

約一名を省いて、狭苦しい機内から降りて海の景色を楽しんでいる機内で暴醉している人がいた。

想像は難しくないだろう。ヒナギクである。

2時間弱ほどの間、誰とも会話することもなくただひたすらに眠っていた。そうしないと精神的に持たないからだ。

他の人がヒナギクに気づかず外に夢中になっている中、マリアだけが起こしにいった。

着きましたよ、ヒナギクさん

「くっ、もつ着いたの？」

起きてみると周りにはもつ誰もこなくなっていた。

しまった、置いてかれた？

寝起きで頭の周りが遅いのか、マリアがお越しに来てることも忘れて一人で焦っていた。

マリアはかわいいなあと思いながら、ヒナギクを外へつれていった。

南の海を初めて見るハヤテは、ナギの手を引っ張り海ですよ海ですよとわかりきつていてことを連呼するほどかなりテンションが高くなっていた。

ハヤテは今にも水着に着替えて飛び込んでいきそうだったので、マリアがすかさず止めに入る。

「まずは、お屋敷に荷物を置いてからのお話についてお話ししますね」

浮かれきっていたハヤテはそれでようやく気がついた。

よく見てみると両手にはマリアとナギと自分の荷物がこれでもかといつほど釣り下がっている。大事な荷物を海水浴させてしまつわけには行かない。

久々に沸いてきた子供心がまだうずいているが、ここは執事たるもの、己を優先していっては話にならない。

ハヤテを引きつれ、まだ四角だといふのにやけに肌に突き刺さる口差しから逃げるようになり、一同は空港から車で15分ほど屋敷まで

向かっていった。

「じじって、本当に沖縄なのか？」

練馬にある屋敷と外見が90%は同じ屋敷がそこに建っていた。

違いといえば、庭に整然と飾られている置物がシーサー中心になつているくらいだろうか。

マリアによると、伊豆でもそうだが、なぜかデザインのとかいうのがあって、同じデザイナーを起用しているとか。

なんでも同じほうが精神が落ち着くとかだそうだ。体の弱かつたナギの母への心遣いだろうか。

そんな感じでさっそく旅行気分が薄れた中、一同は屋敷の中へと入つていった。

予想はしていたが、やはり中も同じ構造だった。違いといえばエンタランスホールにでかでかと守礼門の絵があることくらいだろう

か。

中は外の景色が田に入りにくい分、余計に練馬にいる気がしてならなかつた。旅行気分が一気に盛り下がる。

そんな気持ちを察したのだろうか、マリアは屋上に集まるようじつて、さつそくお茶の準備へ向かつていつた。

ちなみに屋上は沖縄限定だそうで、練馬にはそんなものはあります。

屋上に上ると、整然と世界を照らし続ける太陽が出迎えてくれた。

まだ暑いとはいえない空氣と中和して、とてもすゞしやすい。潮の香りも、しつかり引きこもつてしまつた気分を再びかきたててくれている。

いつからか始まつた世間話が盛り上がり、すっかりどれくらい経つたか忘れたころ、マリアがお茶とお菓子を持つてきた。

「じゃあ、これからのお予定を話しますね」

一同はマリアも回りに丸くなつて集まる。7人集まると自然とこんなつてしまつるのは人間の本能だろうか。

「今日はこれからレジャー施設で一日つくすことになります。そうですね、一班くらゐに分かれて遊びましょう」

それから付け加えで、二千院家の経営するお店だからお金は気にしないでいいですよと言っていた。

さすがとしか言こようがない。

ちなみにこの島には小さい遊園地、カラオケ、ゲームセンター等、そこに近いあたりのものはほとんどねりつていてる。

普通にぶらぶらしているだけでは到底全て回りきれないのに、いかに効率的に回り、なるべく多く遊ぶかとかにも貧乏症候群な考えにふけっているハヤテをよそに、ナギとヒナギクは再び対立の火花を散らしていた。ただ、今回は肉体的勝負ではない。

自分の望みをかなえるための強い意志が、お互に反発し合い、目に見えないオーラとなつて周囲に漂つていた。

そもそもなぜこの一人が対立するのか。それはさつきのマコアのセリフにある。

一班ぐらじに分かれて遊びましょう

そう、ハヤテと一緒にいられない可能性があるのだ。確立1／2・

彼女たちの目的はほとんどハヤテにあるといつても過言ではないので、これは今日一日の満足度に大きく左右する要素である。

おそらくマリアのことなので、自由に分かることにするだろうが、それではあまりにも不確定要素がおおい。他の誰かがハヤテとくつ

つきたがらないという保証はないのだ。

とくに三人娘あたりは知つていて邪魔する可能性が高い。

ここは勝負で誰かが決める権限を持つようにするのが好ましい。

「とりあえず、何かゲームでもしてチームわけしないか？」

言い出したのはナギである。

他の人たちも別に不都合はないので同意する。

さて、ここまで決まったのはいいが次なる問題がある。どういうゲームをするかである。

スポーツ系であれば、実力さえあれば勝てるが、なければ勝ち目はない。

逆に室内系のゲームならば思考の働きがものをいう。まあ、これも一種の実力だがそれはどうでもいい。

ナギとしては、運動では確実にヒナギクには勝てないのでそれは避けて通りたい。

まあ、そこはフェアな精神のヒナギクなのであっさりと認めてもらえた。かといってヒナギクが不利になるかといふと、そういうこともなく、十二分に頭の切れるヒナギクなので、ナギ同等に戦うだろう。

他の人も、メンバーはほとんど女の子で、運動好きでもないので賛成してくれた。

ところどころで、全員で大富豪をすることになった。

一位の人が班割の決定権を与えられる。

一同は、飽きずに降り注ぎ続ける強烈な日光を受けつつ、マリアが用意してくれた飲み物に癒されながらカードを配り始めた。

さて、ゲームを始める前にルールの説明をしよう。

革命あり、8切りあり、階段あり激縛（1）ありのありありルール。

地方による特別なルールは一切なし。階段革命等もなし。二上り、ジョーカー上がりもなし。ジョーカーはスペードの2に負ける。

本ゲームはこれを基本に行うものとする。

長々と説明しているうちに、ハヤテが慣れた手つきですばやくカードを配ってくれたので、さっそく始めることにする。昔働いていた店の芸だろうか。

ちなみにこれにはマリアとハヤテも参加しているので総勢7人である。

「あつ、私いつちば～ん」

一番手、ダイアの3を持っていたのは泉だった。

順番はそこから時計回りに回る。順番は泉 美希 理沙 ヒナギク マリア ナギ ハヤテとなつた。順番が最後のハヤテは見事な不幸っぷりである。

泉はまず、ノーマルにクローバーの5を捨てる。うん、実に普通だ。これなら革命する気があるとか、手札の強弱とかも読み取られる心配はない。

それを見た後続も、何も仕掛けずに無難に流していった。結局ナギのハートの13で流れた。

そんな感じで進んで進んでいき、時間は後半に入つたところ、勝負は山場を迎えていた。

今のところ、まだ誰も革命はしておらず、消耗戦になつていた。だが、ここに来て弱いカードのなくなつた最強の手札の持ち主となつた人が数人いた。

考え方されたカード選び、パスで、その人たちの手札は7人でやつているとは思えないほどすごい役できていた。いかさまが疑われるが、そんなことをする人たちではないのはわかるだろう。なんという強運だろうか。

まず、見た目でヒナギクとナギが手札が良いのがわかる。あきらかにこれは勝つたという顔をしている。本人は自覚していないのだろう

うが。

見た目で負けそうなのもすぐにわかる。ハヤテ、泉、理沙は苦笑いが染み出している。手札が良くなかったのだろうか。三人とも特別へまはしていなかつたのだが。きっと運のいい人たちに運を吸い取られたに違いない。かわいそうに。

さて、ここにきて表情からまったく何を持っているのかわからない人の一人マリアが勝負を仕掛けてきた。

クローバーの1、2、3のストレートだ。これでマリアの残り枚数は2枚。勝利に大きく近づいた。

しかし、1Jの程度でくたばるほど弱い集まりではない。

ナギは余裕綽々といった感じでスペードの2、3、4のストレートで返した。

なんだかできすぎているくらいにできているが、それはナギの執念がそうさせたのだろう。人間は強い。

ただ、それにも負けない強さを持つた人間がもう一人いた。

「あ、それ流さないでね。はい、ハートの4、5、6のストレート」

ヒナギクだつた。勝ち誇った満面の笑みで、ナギの驚愕する顔を楽しんでいるように見える。

カードが無事流れると、その笑顔は真夏に咲くひまわりのように弾けんばかりのものになつた。

そして、勝利を確信しているのか、そのままの表情でハートのAを出した。決して決め手になるものではないが、十分にかつ確立のできるカードである。

しかし、浮かれてはいけない。次はマリアの番だ。マリアは無表情のまま、少しの間何もせずにいた。

ヒナギクの望みどおり「バス」という言葉が出るのかとその場の全員が思った。しかし、その期待とは裏腹にあるカードが出された。

スペードの2。

ヒナギクの望みははかなく散った。マリアの振り下ろした冷酷な鉄斎によつて粉々に砕け散つた。どうもマリアは勝負事で手を抜くのは止めていいらしい。おもしろしく冷酷で強い。

その場の全員がマリアの勝利を確信した。ナギも2を持つてはいたが、同じ数字では意味がない。ハヤテや泉はそのカードと同等の強さを誇るカードを持つているかさえ危ぶまれる。

あきらめたように、ハヤテがカードを流そうとしたとき、

「私はまだバスとは言つてないぞ

それを制止する人が現れた。その手札はまだ5枚も残つている。いつたいこんな人に何ができるのか。

「これなら、それに勝てるんだろう?」

白いトランプに浮かび上がっている怪しい格好の怪しいポーズの人間が、そのカードを嫌でも識別させる。

その場に出しだされたカードは、どこから見てもジョーカーだった。

美希だ。

さつきまでの無表情から一転して、してやつたとこう表情に変わっていた。

メンバーたちは久しぶりにやるところじで、すっかりジョーカーという存在を忘れていた。そして思いだした。まだ勝つチャンスは自分たちにもあるかも知れない。

ジョーカーはスペードの3に弱い。

思い出すと同時に、メンバーは自分の手札にスペードの3がないか、カードに穴が開くほど探した。手札が重なっていいかカードをこすつてみたりもした。

だが、誰の手札にもなかつた。

そもそものはず、ナギがストレーートを出すときに、役として使つてしまつたのだから。

「つお――――――私はなんてことをしてしまつたんだ――――――

まあ、それは仕方のないことさ。きっと。

結局スペードの3がない今、最強のカードとなつたジョーカーは流されていつた。

そして、美希のターン。出されたカードはAのペア。

「そんなの出せるか―――――っ――!――!――!――!――!――!

まあ、ナギとヒナギクとマリアはカードの枚数上、2を2枚持つていることは絶対にない。持つていたら負けになるからだ。

手札の枚数に余裕のある方々の方は、今度は2なんて強いカードとはどうてい縁のない人たちだった。

そして、それも無抵抗に流される。

次の美希のターン。」のペア。

「じゃあ、これで上がりだな」

あつたりと勝つてしまった。おそらく美希のことだ、後半で一気に上がるようになに作戦を立てたのだろう。大成功だ。

こうして、ハヤテをかけた熱い思いのかかつた戦いは幕を下ろした。

1：通称ゲキシバ。カードをダブルで出すとき、前に出した人が

たとえば「スピード・クローバー」だった場合、自分も「スピード・クローバー」を出せば、次の人は「スピード・クローバー」しか出せなくなるルール。私の地域では一般化しています。

22話（後書き）

さて、沖縄編もいよいよ幕開けです。自分でもどうなるかわからない不安定な作品ですが、面白いになるようじがんばります。

(祝五万HIT感謝読みきり小説) 番外編・三千院ナギの後悔(前書き)

この小説の本家投稿サイトで100000HITを記録したので、記念に書いてみました。

私が見ていて一番人生が変わったなと思つた作品をハヤテ化しました。けつこう原作は感動できます。知つている人は知つていますよね?

とりえず、読んでみてください。

三千院ナギの後悔

「お嬢様～、朝～」はんですよ～

とある日の朝、なかなか着替えるといってから部屋から出てこないナギをハヤテは呼んだ。

外は快晴、すこしやさしい気温の日なのだが、ナギは眠そうに起きる。すると部屋から出てきた。2度寝でもしていたのだろうか。

なにはともあれ、早く食べてもらわないとせっかく作つた朝食が冷めてしまつので、とりあえず食べてもらひ。

今日は、いつもと違つて和食で、ご飯、味噌汁、魚の煮物などが美しくテーブルを飾つてゐる。

いつから定着したのかわからないが、朝食担当はハヤテなので、これもハヤテお手製だ。だからなのかナギは前よりもちゃんと食べるようになった。なんかマリアがかわいそうな気もするが、ナギが食べるようになつただけで満足だという。さすがメイド。

ところに」と、ナギは今日も「飯を食べる。残さず食べる。

どにに入るのか、朝にしてはやや大皿のボリュームだったご飯を全て食べきってしまった。

まあ、量に関しては本当は朝に一番食べるのが体に良いこと」とでそれに配慮した結果なのだが。

そんなことよりも、前は昼間で寝て朝食は食べないのが田舎茶飯事だったのに、これは驚くべき進歩だ。

ナギもそれを自覚しているらしく、ビックリか誇らしげな顔をしている。もつと他に威張ることはないのだらうか。

しかし、満足げに自室へ帰りつつあるナギに声がかかった。

「お嬢様、お茶碗にご飯粒が残っていますよ?」

見てみると確かに2・3粒お茶碗にくいついている。しかし、それがどうしたのだろう。そんなのあたりまえだろ?

「ご飯は最後の一粒まで食べなくてはダメです。お口メ一粒一粒には農家の苦労が沢山詰まっているんですよ」

だからなんなのだ?

「お米の気持ちを考えてみてください。苦労して作つてもうつて、やつと売れて炊いて、さあもうすぐ食べてもうえると思つたら自分だけ食べてもうなくて残飯行きなんです。理不尽でかわいそうだとおもいませんか?」

いや、思つけどね・・・

お米に感情なんて存在するほど複雑な神経組織があるわけないし、そんなこと考えてやる義理もないだろう。

といふことで、ナギは適当に聞き流してスルーすることにした。

ハヤテはやけに必死そうに説得していたが、ナギが自室へ帰りだしたところであきらめて食器の片付けに移った。

そんなこともありながら、今日は平日なので学校へ行つた。

毎度のことながら、ハヤテの愛用、お買い物自転車で一人乗り（違法です）で学校へと向かつた。

宇宙人が学校を占領したり、ヤギが校舎内を駆け回つたり特別なこともなく、初めの一ヶ月で飽きたいつも通りの時間割を着々とこなし、今日も暇だつたなーと思つていたら放課後になつていた。

今日は特別にやることもなかつたのでナギとハヤテは一緒に屋敷へ帰つた。

今日という日は本当に何もすることがなく、某情報フレア創出女なら水色男を召喚する勢いであった。

ナギにはそのような特殊能力はないので、ハツ当たりといつか暇つぶしといった感じでハヤテとゲームをして、気づいてみれば日が暮れているという感じで3／4が終わつた。

そんな感じで夜になり、三千院家は就寝の時間になった。

「おやすみ、ハヤテ

眠い目をこすりながら、ナギは部屋の扉を閉めながらいつも決まり文句を言つ。ハヤテもそれに答えて、それを機に、三千院家は静寂に包まれていった。

夜空を見れば、東京だというのに、練馬の半分以上を所有した上、領土の半分以上を森林化しているため、星たちの姿は都会という場所を忘れるくらいきれいに見える。

あれは何座だろ?などと考えさせる暇もなく、星たちに淡い光は屋敷の主人を深い眠りへといざなつた。

「ん? ビーだーーは?」

ナギの前には、一面の田んぼと、トコトコトコトコトに点在する古ぼけた民家が広がっていた。

青々とした空は、高い建物こじらへられたこと無くビームでも続いている。悪くない景色だ。

しかし、いつたいなぜ自分はこんなところにいるのだらう。

とつあえず、ここがどこなのか確かめようと、今たつている田んぼから出ようとしてみた。

しかし、体が動かない。

動かないのは体全体だが、とつあえず動くのに最低限必要な足に視線を向けてみた。

しかし、それを見ておもわずナギは絶句した。

「田んぼから生えてるのって、稻だよな

自分の足があるはずのところには稻が生えていた。それだけではない。手のある場所には葉っぱが、体は茎になっていた。

何度見てもそれは変わらない。

「私、稻になつた？」

なぜか、今の自分の状況を納得して受け入れることができた。

多分、ここが現実世界でないことを無意識に直覚しているからだろう。

とつあえず、ナギは動くことができないので、周りを観察していることにした。というか、それ以外にすることがない。

しばらくすると、時間がめまぐるしく過ぎていいくような感覚にござりました。

あつという間に夏になり、夜になり、気がつくと季節が変わり始めました。

初めは小さかつた自分（稻）も、すくすくと成長していった。

しかし、何の努力も無く勝手に育つたのではなかった。

田んぼに生えた雑草を農家の人々が毎日欠かさずに取ってくれていた。そのおかげで隣の稻と十分なスペースが確保され、居心地が良かつた。

また、梅雨に入ると、どこからか勝手に出てきた害虫を農家の人々が農薬を使わず、手で取つたりいろいろ対策をしてくれた。

この二つは文字にすると簡単のようだが、実際はすごく大変なことだった。ナギは稻となつてそれをずっと見守り続けた。

「そんなにがんばらなくても良いものを・・・」

7月になり、いよいよ本格的に夏になつた。

降り注ぐ日光を浴びて、稻は今まで以上にすくすくと育つ。

同じようにすくすくと育つてしまつた害虫たちを、農家の人々は一生懸命退治してくれていた。

見たところ、社会人なら定年していそうな方々だった。前傾姿勢で腰の負担は軽くはないだろう、「一つ一つ丁寧に世話をしてくれる。

ナギには親も同じ存在に感じだ。

8月になると、ある事件がおきた。

台風の上陸だ。ようやくここまでやだつた稻たちを暴風雨が襲つた。

「うわああつ……」

ナギも例外なしに襲われる。しかし、沢山日光を浴びてそだつた茎はそんなに柔ではなく、なんとか持ちこたえていた。

しかし、ナギの隣の稻から悲鳴が聞こえてきた。

「もうダメ……おじさん、おばさん、じめんなさい……」

ナギの隣の稻は周りと比べると少しだけ細く、纖細な子だった。

細い茎は強風でしなって、もう二つ折れてもおかしくない状況だ。

「何弱音を吐いてるー！」で絶えなくてはいままでの努力が無駄になつてしまふんだぞ！ あともう少しだけがんばれ！－！」

ナギは動けないので支えてあげることができなかつた。そのかわりにありつたけのエネルギーで応援した。

それこそ今まで経験したことも無いほどの体力を使った。声がかかるほどに。それしかできなかつたから。

しかし、そんな努力も自然のパワーの前では通用しなかつた。

「「めんね、私の分まで、おいしく食べてもらってね……やよい
なら……」

その子は最後に微笑を浮かべると根元から力なく倒れてしまった。

その顔は申し訳なさそうに、静かに目を閉じていた。

「おい・・・・・・しつかりしり——つ——！」

ナギの投げかけもむなしく、その子から一度と返事が帰ってくることも無かった。

そのときナギは誓った。この子の分も自分はだれかにおいしく食べてもらつて幸せにする。

翌日、台風一過で温かく、とてもすこしやすい日だった。

しかし、昨日の今日でとても晴れやかな気分にはなれない。

今日も農家のおばさんが草を狩りに来てくれた。しかし、いつも見えていたおじさん姿が見えない。

近所の稻に聞いてみると、必ずや刈り畠の畠風の中、心配になつて田んぼまで来てくれていたらしい。

それで風邪を引いてしまつたといつたのだ。

「どうして・・・みんなそこまで・・・」

ナギちゃんのとおせんは嘆息した。三分は三分ひとつドドドきついわけだなここと。

農家のおじさんおばさんたちももちろん、昨日のあの子の分まで自分には詰まつてこらるのだ。

「お米一粒一粒には、大切なものがいっぱい詰まつてこらるんだな」

そんなことを考えてこると、収穫の時期がやつてきていた。

結局、田植えのときの苗の8割くらいが無事に収穫された。

残りの一割の苗は、台風や虫や病気にやられてしまつていて。

あの「とおせん」となつた人がそんなにこらると思ひと胸が苦しくなる。

「私は、みんなのためにおこしくなるー」

ナギの決意は固いものになつていた。

自分にかされた責任は、果てしなく重い・・・

気がつくと、お釜に入れられる作業に入っていた。

その作業をしているのはハヤテだということに、今のナギは気づけなかつた。無理も無い。ナギには大きな目的があるのであるのだから。

みんな・・・私はこれからみんなへの誓いを果たす・・・

スイッチが入り、どんどん自分が水分を吸つて大きくなるのがわかる。

やつと食べてもらえる

そう思つとっても立つてもいられない気持ちだ。

そして、いよいよお茶碗へと移される。

他の米粒たちも、今のナギにはとても輝かしく見える。一つ一つにあるそれぞれのエピソード・・・

それはお米だからとか、そういう理屈では計り知れないものだ。

ハヤテによって盛り付けられたお米たちは、とてもおいしそうになつている。

お米たちはうれしそうだ。

そして、味噌汁や煮魚と一緒に食卓へと出された。

「いただきま～す」

いまから自分を食べてくれる主人はすいぶんやる気の無い声だった。
どこかで聞いたことのある声だったが気にしないことにした。

ナギは、お茶碗の下のほうにいたため、いよいよ最後の一 口とこつ
とこつとひりひりやく姿を現した。

そして、箸にすべられた。

そうだ、そのまま口に運んでくれ

そして心から思うがいい　ああ、おいしかったな　と

しかし、こよいよ口に入らうとしたとき、悲劇が起こってしまった。

ナギのお米が箸から零れ落ちてしまったのだ。しかし、下に落ちる
ことは無く、お茶碗の中に無事着地した。

「はーーーー、本氣で危な」とこりだつた。まあいい。早く私を食
べてくれ!」

しかし、主人は箸を置いて水を飲み席を立とうとしていた。

おい、何を考えているんだ!なぜ私を食べないんだ!私はここにいる
んだぞ!

「ここまで来て、みんなの分まで食べてもられないなんてあつてたまるか！」

そんな思いがナギの中を駆け巡る。

そんなナギの気持ちが伝わったのか、もう一人の『飯を作った人が主人を呼び止めた。

熱心に『飯を残さず食べる』ように説得してくれている。

しかし、主人は食べる』ことなく去ってしまった……。

ナギは、その恩知らずを睨みつけた。なぜ食べないのかわからない。こんなにもみんなの努力が結晶して、すばらしいお米に慣れただうのに。

そして、その矛先にいる人物に気づいて絶句した。

「あれって……朝の私じゃないか……」

ナギは今気が着いた。朝、自分が何をしていたのかを。

丹精込めて作られたお米を残してなんとも思わずに出で行つてしまつたことを。

私はなんてことを・・・・・

主人に食べられるこの無くなつた食器は、そのまま流しへ持つて
いかれた。

私はこんなことをしているわけにはいかないんだ！

あのこのためにも、絶対につ！――！――！――！――！

しかし、願いは届かぬまま残飯入れに落ちていった・・・

「うわああああ――――――――――――――――――

田を開けると、こつも365日見てくる自分の部屋の天井が田の前に広がっていた。

「あれ、じいは……？」

いつまでもなり続ける田覚ましを止め、ようやく動くよつになつた体を確かめるように動かしながら周囲の状況を確認する。

窓に田をやると、柔らかな口差しと小鳥のさえずりが朝だとこつじとを知らせていた。

「夢……だったのか？」

ようやく頭の中の整理がついてきた。今までの世界は自分の作り出した幻……

しかし、全てを幻と決めるのはできなかつた。今まで見えてき

たものはおそらく本当にあるじただらつ。特別にあつえない要素など得に無かつた。

そして、また自分の侵してしまった罪を思い出した。

私はなんてことをしてしまったんだ・・・

身をもつて知つたお米の大切さ。その偉大さがわかる今だからこそ、犯してしまつた罪の重さもわかる。

もつやつてしまつたことの取り返しができない。過去に戻つてやり直せるほど世界は甘くは無い。

「なりば」

ナギは決意に満ちた目で、どうでも透き通る青空を見上げた。

「おはようござります、お嬢様」

いつもは迎えに来るまで部屋にいるもつてこないので、自分から来たことに驚いていたようだつた。

朝食のメニューを見ると、今日も昨日と同じ和食だった。

三千院家のメニューは一週間ほど同じタイプのメニューが出るのでこれは予想済みだ。

和食に欠かせない白米も、きちんと煮魚の隣にあった。

ナギはその姿を見ると、すこしうつとした。

朝食を食べている間、ナギは一言も話さず、黙々と食べた。

その雰囲気は、明らかに普段と違つもので、マリアとハヤテは少し困惑した様子だった。

ナギは、そんなこと御構い無しに、丁寧に、味わつて完食した。

ナギが席を立つのを見ると、すかさずハヤテがお茶碗やお皿を下げにきた。

そして、お茶碗の中身を見て驚いた。

「お嬢様! 今日ばかり飯を残さず食べてくれたんですね!」

そう、米粒ひとつ残さず食べきっていた。

ナギはああだけ言ひて、それから歩いていつてしまつたが。

しかし、ナギの表情は硬い誓いにあふれていた。

もつ、どの子（お米）も残はしないさ

三千院ナギの後悔

（完）

(祝五万HIT感謝読みきり小説) 番外編・三千院ナギの後悔(後書き)

どうだったでしょうか?

感想等がありましたらいただけると幸いです。

「何なのだ――――――」

とりあえずナギとヒナギクはそう言つておくことしかできなかつた。こんなに大事な勝負だと言つてゐるのに、こんなにあっさり負けるのは納得ができない。納得するものかどうかは気にしている場合ではない。それなりに頑張つたはずだ。

しかし、騒いだからといって事実が覆るわけではない。実際に美希は不敵な笑みを浮かべて一人を眺めたままだし、それは彼女たちも良くわかっている。

ところと、さわと氣持ちを切り替えて現実に効果のあることをしよう。いつもに人生の勝敗が決まるといっても過言ではない。

さて、今一番やらなくてはいけないことは何だらう。

多分それはマリアを根回しして無理やり勝つとか、ハヤテに直接頼むとかではないだらう。

少女たちの頭の中に浮かんでいるのはただひとつ。

美希を落とすこと

ハヤテに悟られたくない、という乙女心が作用している中では、これ以外に良い選択儀が見つからなかつた。見つかったなら教えてあ

げて欲しい。

かなり難航することが予想されるが、一人はこの作戦に移ることにした。

さて、決まつたはいいが、作戦らしい作戦が決まらないのはヒナギクであった。

美希は、性格上弱みを握られるとあとで悪用することは田に見えている。今弱みを見せるとあとでどんなハンディを背負うか想像しながらわかる。

かといって、ハヤテと一緒に班にして欲しいという意思を伝えないわけにも行かない。葛藤だ。

こんなとき、ハヤテを見てみると、のんきといつか、気ままに泉たちと世間話で盛り上がっていた。

こいつがこんなにがんばっていること言いたいところだが、それがいえないのは前記の通り。ここはがまんしてじっくり考えよう。

しかし、そんなヒナギクを尻目にナギが先に行動に出た。

「あの、花菱先輩。班分けの件なんですけど……」

ナギの提案はこうだった。

沖縄は四月末期といえども日差しも強く温かい。いや暑いところ
ベルでもあるだろう。

普段、日差しを浴びないナギはあまりこうした環境は得意ではない。
といふことで付き添いの使用人が一緒の班にいて欲しいといふもの
だ。

それを横で聞いていたヒナギクは焦った。そんな手があつたなんて
ことは予想も出来なかつたし、さらにその作戦に穴が見つからない。

これはまずいわ！

さうに深く考え込むヒナギク。

美希はそんなヒナギクを、一般人には見たかどうかわからなくらい
微かに視線を送り、それからナギに返答した。

「いいだろう」

ガガガガーン・・・・・

まさしくそんな効果音がぴつたりな感じのショックがヒナギクを襲
つた。もはやリアクションなどしている余裕は無く、シュンとして
俯いてしまつた。

しかし、美希はまだしゃべり終わつてない。

「じゃあ、ナギりんはマコアさんと同じ班で

・・・・・

え？

ナギとヒナギクは同時に同じ言葉を放った。

ただし表情はまったく正反対となっていた。ナギは愕然と、ヒナギクは喜び混じりの驚きの表情だった。

「あの、ちょっとそれ、どういふことですか？」

納得できないのはナギだ。だって、ハヤテと一緒に班になるような言い方を・・・・・

あつーーーー

ナギは気づいた。

「だつて、使用者と一緒にがいいつていつてたじやないか。だから優秀なマリアさんと一緒にいいんだろ？」

そう、使用者はこの場に一人いたのだ。あまりにも熱中しすぎていて、冷静に物事を見れていないかったようだ。それには例外なくヒナギクも含まれる。

ということで、こういわれてしまつては完全にナギは太刀打ちできない。作戦ミスだね。

これで、残る有権者はヒナギクのみとなつた。このチャンスを生かすも殺すもヒナギクしだいだ。

しかし、

「じゃあちょっと集まってくれ。班割を決定する」

とこう美希の一声で、ヒナギクも考えてこういつに「タイムリミットを過ぎてしまった。

美希の指令に従い、一同は丸く集まって、静かに班割の発表を聞くことになつた。

23話（後書き）

さて、時間が無いので今回は短めです（今まで基準だと普通？）

めずらしく後を引く感じで終わってますが特に意味はありません（笑）

といえず、次回も読んでください。

「はい、じゃあ良く私の話を聞くよ！」

美希は、一度わざとらしく咳払いをし、よくあるえらそうな口調でそういった。家系がそうだからかわからないが、なんだかそんな態度が美希らしいような気がした。

しかしそれ、よく総理大臣の娘がこんな子に育つたものだ。いつたいどんな教育をされたのだろうか。小さいころにヒナギクにでも影響されたのだろうか、想像を許さない性格である。

そんな」とはさておき、美希はさつさと発表を始めた。

「一組に分かれてもうつかり一組は……」

発表された班分けは二つだった。

一班：ナギ、マリア、理沙、泉

二班：美希、ヒナギク、ハヤテ

うーん、実に納得のいく組み合わせだ。仲のいいところを引き裂くわけでもなく、かといってくつつけすぎているわけでもない。ナギの要求がある中では最適な組み合わせだわ。作者的には。

しかし、誰からも文句が出なかつたところを見ると、どうやらみんな

なも同じ意見のようだ。ナギもしぶしぶ頭を縦に振っている。

「よし、じゃあ早速出発だ！」

それを見て、だれも余計なことを言い出さないつけこ、美希はささつと歩いていった。

マリアが提案したレジャー施設というのは、擬似本家屋敷から車で雑談がちょうど一区切りつくくらいだった。具体的な数値を希望される方は、島が小さいという情報から推測するしかないでしょう。

高級車ではあるが、桁外れな値段の車ではない車から降り、一堂は施設の入り口に降り立つた。

「おお〜、これは遊び概があるな〜」

遊びにシビアな理沙や泉がうなるほど、入り口からは大きな観覧車や建物の屋根が見えている。

話から予想はしていたが、やはり実際に見てみると凄みを感じる。というか、こんなにでかくて遊びきれるのかという不安が生まれる。まあ、そんなマイナス思考なやつはハヤテしかいないんですけど。

気がつくと、うなつっていた理沙や泉は我慢できずに入り口に駆け込んでいた。相変わらずだな、あの一人は。まるで小学生が田舎に帰つてセミでも捕まえに行くみたいな勢いだ。

さて、一応班行動なのである一人を見失うわけには行かない。とい

「」とで他の人たちも足早に入り口へと入っていった。

このときはまだ誰も気づかなかつた……

美希があの一人に混じつてはしゃいでいることに……

その態度が示すことに気がつくのはまだ先のことだが……

三千院グループの施設ということで、入場料を払わずにゲートを通過した後、一同は広場で一度集まつた。

「じゃあ、とりあえず6時にここに集合つて」と

結構な広さを誇る施設なので、帰りたくなつてもなかなか全員そろわないという事態は容易に想像でき、尚且つなるべく早くハヤテと再開したいナギはとりぜず時間を設定した。

ただいまの時刻は1：30。作者が書くことは無かつたが一応昼食は屋敷で済ませている。ということで4時間半を存分に使って遊びまわれるわけだ。

さすがにこれだけあれば大体の施設は回れるだろう。ひそかにそれに喜びを感じるハヤテを尻目に、一同は班ごとに分かれてそれぞれ都合よく左右に分かれている道を反対方向へと進んでいった。

「うわあ～、これ結構おもしろそうじゃないですか？」

ハヤテは黒い建物の前で入りたくてうずうずしていますといつオーラをこれでもかといつほど出していた。

「うん。いいんじゃないかな？」

美希も首を縦に振つて大いに賛同している。しかし、一人だけはどうしても納得できないでいる。

「なんでそんなのが面白いのよー第一なんで一番最初がお化け屋敷なの！」

班のメンバー的には彼女しか残つていないが反応的にも彼女である。いつもは強そうにしているがこつこつのは普通の女の子並み、いやそれ以上に苦手なのだ。

ちなみに本当はメリーゴーランドが一番のはずだった（地理的に）が、美希がいろいろ話術を駆使してここに連れてきた。ここに何があるかは知られていなかつたのでヒナギクが文句を言つのは筋違いでではない。

「ヒナギクさんがそうこうなら、僕は別にいいですが……」

嫌がるヒナギクを見てハヤテはかなり残念ですと無言で伝えながら次はどこへ行きましょうかと美希に聞く。

その落ち込みようは見るに耐え難いもので、見ているところまでも不幸な気がしてくる。極限の不幸を体験したもののみ放てるオーラ

がにじみ出ている。できれば一生手に入れたくないオーラだ。

ヒナギクは、ハヤテをみてはっとした。自分のわがままのせいではヤテを傷つけている。そこまで深刻なものでもないような気がするし、本当に自分はそんなものに入りたくは無いが、ここはハヤテのために誘いに乗ってあげなければいけない気がする…今までの経験から！

「わかったわよ、ちょっとだけだからね！近くにいないとダメなんだからね！」

お化け屋敷にちょっともさつちもあつたものではないが、恥ずかしさを自分なりに隠してなんとか自分の意思を伝えられた。いつもここで失敗するのだ。今回の成功はきっと大きな成長だと確信するヒナギクであった。

ところことで、その一言で劇的に明るくなつたハヤテと一緒に三人はお化け屋敷へと入つていつた。

「うわあ…………なんなのよ、これ……」

ヒナギクは弓を引いたりとばかりの力でハヤテの腕を引っ張つて逃げ出そうとする。

ハヤテは必死に落ち着かせようとここで、美希はそれをにやけ顔で見ている。

とりあえず、これが進入30秒後の光景だ。

客観的に見るに明らかに美希の作戦が予定通りに進行しているが、該当者たちはそんなことを気にしている余裕はないそうだ。

おもしろいからなのでこのまま観察する」といふ。

「ちょっとヒナギクさん、そんなにひっぱつたら危ないですよ~!」

見た目以上に力の強いヒナギクに袖を引っ張られ、そろそろ纖維の強度の限界が見えてきた。そもそも離してもらわないと真剣にちぎん切れる。

「だつて、こんなに怖いなんて思わなかつたんだもん! 何とかしてよ、ハヤテ君!」

何とかしてといわれても困る。やうこじとは係員か運営者に言つ

てもらわないと設備の変更は出来かねる。

といふか、そんなに怖いなら入らなかつたら良かつたのに。とりあえず言いながらさらりに強く引っ張らないで欲しい。

「怖いんだつたらまだ入り口も近いですし、戻つてもいいですよ？」

空気の読めない男の代名詞ハヤテなので、こんな発言も出でてきたしまつた。

もちろんヒナギクはそんなことが出来るはずも無い。30秒間の怖さに耐えた精神力が無駄になつてしまつ。

でも、それ以上に一緒にいたいし……

「そんなこと言つたつて、入り口まで一人じゃ怖いじゃない！それに……」

その後の言葉は誰にも聞くことはできなかつた。もしかしたら口に出していいかもしない。

けれど、後の言葉は創造するにたやすいですよね？

ヒナギクはそういうと、これでもかといつほど引っ張つていた袖を離し、今度は優しくハヤテの手をとつた。

「怖いから出るまで離さないでね・・／＼／＼

まるで、少しでも力を加えたら割れてしまつガラス工芸品を扱つて、すこし怖がつてゐるような感じがヒナギクからは漂つていて、きっと、今の幸せが続かないかもしけないと心のビックで思つていいのだ。

そんな彼女だからこそ、今を楽しもうとまだ恥ずかしげりながらも元気に出した。

ハヤテはやつぱりなんだか納得のいかない展開のようだが、悪い雰囲気ではないので触らずにそのままにしておいた。

こんな、どこからどう見てもカップルにしか見えない二人組みを、よつにやけどが増した顔の美希が後ろから眺めていた。

「ここまで作戦通りだな」

お気づきの方が多いだろうが、どうやらこれは美希のトライップであるらしい。いつたい何を考えているのや。

ところが、ヒナギクがいちゃこちやしてこるとひを見逃していい

のか？小さいころからの大好物じゃなかつたのか？

「ふん、私は一応健康な女子高生なのでな。あいにく同性愛者ではないらしい」

そうだった。ごめん、君を何か勘違いしていたみたいだ。

と、こんな感じで話していると、美希もハヤテたちの後を追つて屋敷の中心部へつながる闇へと消えていた。

「そういうえば、なんでヒナギクさんってこんなに怖いものが苦手なんですか？」

近づくと反応する原始的なお化けを2・3体通り抜けたところで、ハヤテはふとヒナギクに聞いてみた。

普段は完璧人間に見えるヒナギクがこうも分かりやすい弱点を持っているのが納得できなかつたのだ。

しかし、この質問はヒナギクには不満なようだ。

「何よそれ、私だって普通の女の子なんだからお化けとかそういうのとか怖くて何が悪いのよ」

その普通の女の子に入らなかつたからハヤテは聞いてみたのだが、それは言つてはいけないと本能（作者）が告げていたので心の中にとどめておいた。

もつとも、小さこいのがき退治は普通の女の子のすることではないし、完璧な生活も一般的なことは違つた生活だう。本人が気づいていないだけで。

そんなことを思つていたら、ヒナギクはまだ不機嫌そうな顔をしていたのでフォローを入れておくことにする。

「いえいえ、なんでそのたまたま苦手なものがお化けのかなと思つただけですよ」

ハヤテの言つたことは、誰にでも怖いものとか苦手なものがあるて、なんでそれがヒナギクはお化けなのかと思つたという意味だ。紛らわしい情報伝達の齟齬がおきそうなことば使いはやめてもらいたい。

ヒナギクは、ハヤテの適当な返事に満足したよつで、ふうんと言つながらまた周りを注意深く詮索し始めた。

先に仕掛けを見つけておけば怖くは無いといつ戦法である。

しかし、まあ、お化け屋敷側もそんな簡単に見破られる安っこい仕掛けでは今の時代は生き残つていけないのでそう簡単には見つからない。

見つけてもやっぱり怖いものは怖くて毎回ブルブルしていた。

そんな感じでゆっくり、入場料分はきつちり堪能して、二人はお化け屋敷から出てきた。

「はあー、怖かった～」

ヒナギクは早くも疲労困憊（精神的に）で、すぐそばにおいてあるベンチに倒れるように座る。

苦手なものに囲まれているのはかなり精神力を消耗する模様である。ハヤテは、ヒナギクが休んでいる間に飲み物を買ってきて、ヒナギクに差し入れた。

二人で一緒に冷たいジュースを飲みながら、人気の少ない施設を見渡して、次の行き先を考えることにした。

ねずみの王国のように乗り物に乗るのに待つ必要はまったく無いので（人がいないから）、とりあえず近くのものから制覇していくことにする。

偶然にも、すぐ近くに案内板（地図が書いてあるやつ）があるので、それをみて決めることにした。

「うーん、こんなにいっぱいあるとさすがに迷うわねー」

地図によると、お化け屋敷の周りにはボーリング、カート、お土産屋（休憩所、売店込み）、水を使ったコーススターなどがある。

ヒナギク的には、説明のところに本格的勝負が可能と書かれている

カートに惹かれたが、さすがにこれはいいお年頃の女の子を選ぶものではない。残念でしおうがないけど、ここは選択からはずす。

ボーリングはどうだね？

いや、ボーリング場がある建物は地図によると泉たちのいる班が進んだ道ともつながっている。あの子達の性格を考えるとぱったり鉢合わせとか言うことにもなりかねない。そうしたらせっかくの班分けの意味がなくなってしまう。これも選択からはずすのがベターだね？

お土産屋はどうだね？

いや、行くタイミングが早すぎる。じつことは最後に取つておかなくては盛り上がれない。きっとハヤテもその気持ちは同じはずだ。
とこうじとせ・・・

コースターが消去法で導き出された。

都合のいいことにハヤテもそれに乗りたそうにしている。なんだか自分にものすごく合わない氣もするがとりあえず他に選択儀は無い。といふのだ！

ヒナギクはハヤテの手を引っ張り、乗り場へと走っていった。

「やつたー ストライク！」

ちなみにいま泉のいるナギ班はボーリング場。ヒナギクの感はあたつていました。

今回、あまりこの方たちの出番が無いので少し同じで様子を見てみることにしてみましょう。

泉と理沙の勝手な先導で四人が入ってきたのはボーリング場だった。

はじめてみると、意外とみんな投げられるようだった。

ある人を省いて。

「ヴヴ・・・重い・・・・・」

おいてあるもので最軽量の6ポンでもろくに投げられなかつた。

さて、時間が無いので一気にスキップして最後の結果発表と行きましょう。

一位：マリアさん 280

一位：泉 181

三位：理沙 178
四位：ナギ 20

マリアさんの万能っぷりはもはや突っ込むといひではないでしょう。
さすが自称17歳。

さて、ナギはボールを投げたは良いけど、勢いが弱すぎてピンまで
ボールが届かないトラブルが連発。結果こうなりました。まあ、最
後まで飽きずにやつたので大きな成長でしょう。

さて、切りも良いので今回はここまで。

25話（後書き）

悪靈さんからやつやく挿絵をいただきました！

とっても上手でびっくりです。皆さんも見てくださいね！

http://img2.blogs.yahoo.co.jp/yobi/1/d1/c3/hbdj8810/folder/919042/i mg_919042_11978729_0?123
6592204

「これに乗るわよ！」

怒涛の100mダッシュを決めて、ハーフ1分も経過せずにウォーターコースターの乗り場にたどり着いた。

ハヤテは、なんとか鍛え上げた体を使いこけずに着いてきたが、やや息が上がり気味である。人間の力の80%は使つてるんじゃないかと思うほどの（通称火事場の馬鹿力。人間は普段20%の力しか出せないが、それを超えて力を出すこと）体力だ。

ハヤテは着いた施設を見上げてみた。これから自分がどんなものに乗るとかは確認しておかなくてはならない。

（ぬれたくない人は乗っちゃダメ！みんなで楽しめる爽快アトラクション！その名もビショングランダー3号！）

・・・・・。

ハヤテの視界に真っ先に飛び込んできたのは、入り口にある大きいゲートに書かれてあるこの文字だった。

ハヤテはあまりの突つ込みどころの多さに絶句してしまった。

「これに乗るわよ！」

怒涛の100mダッシュを決めて、ハーフ1分も経過せずにウォータースタートの乗り場にたどり着いた。

ハヤテは、なんとか鍛え上げた体を使いこけずに着いてきたが、やや息が上がり気味である。人間の力の80%は使ってるんじゃないかと思うほどの（通称火事場の馬鹿力。人間は普段20%の力しか出せないが、それを超えて力を出すこと）体力だ。

ハヤテは着いた施設を見上げてみた。これから自分がどんなものに乗るとかは確認しておかなくてはならない。

（ねれたくない人は乗っちゃダメ！みんなで楽しめる爽快アトラクション！その名もビションドー3号！）

・・・・。

ハヤテの視界に真っ先に飛び込んできたのは、入り口にある大きいゲートに書かれてあるこの文字だった。

ハヤテはあまりの突つ込みどころの多さに絶句してしまった。

しかし、すこしすると頭が回ってきた。

待てよ、初めにねれたくない人は乗るなっていつてるのに、なんでみんなで楽しめるんだ！！！…どちらを信用すればいいんだ――！――！

一応ヒナギクの前なので心の中叫んでみた。モノローグつてやつですね。

いや、待てよ。よく考えれば最後のネーミングから想像が出来る。ビションとかいう気持ち悪い擬態語を使っていふことを考えると、前者のパターンが確率が高いのか。

つていうか、そのネーミングはなんだよー。二号つて前にも一号と二号がいたのか！？なんか不具合とかあって修正当てられたのか！？

考え始めるときりがない。とりあえずこの謎に満ちたアトラクションは避けるに越したことはなさそうだ。

そう思つて、ヒナギクに視線を向けてみると、ちょうど前に乗り込んだ人たちの乗ったコースターが水に向かつて落ち始めるところを熱心に見つめていた。

これはちよつどいい。これでこれがどんな感じのものか下見が出来るし、ヒナギクも何も言わずに他のものに変えてくれるに違いない。ハヤテが言つただけではきつとすぐには意見を聞き入れてはくれないだろうし、これは最善の選択かもしれない。

ところがアトラクションの敷地と外を隔てる柵越しに観察する

」としました。

ここからはハヤテの実況中継をお聞きいただきたいと思つ。

ガラガラガラガラ

人を乗せたコースターはチヨーンで引っ掛けられて位置エネルギーをためられるだけためています。

あつ、頂上まで上りきりました。

そのまま数メートル平らなところを走ります。ちなみにコースターには水よけのバイザ―が360度全方位に人の高さくらいまであって、見た感じでは水の浸入はなさそつな感じです。

おつと、コースターが落ち始めました。

これは、普通のジェットコースターの最後が水になっている形のもので、最初はジャットコースターとなんら変わりはありません。

グルグル無駄に回しながら「よいよ最後のウォータージェットが迫つてきました。

結構高いところ（10mくらい）から落ちていきます。

高いだけあつて結構なスピードで落ちてます。これは結構な水しぶきが出そうですね。これなら上から水が入ってくるかもしれません。

あつ、ついに鼻先が水に到達しました！

すこい水しぶきです。ヨロイリコはあがっていますよーこれは濡れますね。

そしてそのままコースターはどんどん落ちていきます・・・・?

あれ、・・・?

コースターが消えました・・・

なんかあがつた水しぶきと水中からの気泡しか見えないんですけど

・・・・

あつ・・・・行方不明のコースターが帰ってきました・・・

水中から・・・

・・・・

実況終了。

とつあえず、今起じつたことをおれらこしてみよ。

普通のジュットゴースターとして走る 水に突つ込む 水の中まで
突つ込む 浮いてくる

・・・

ありえねえ――――――――――――

今までの突つ込みの中でもっともきついをお見舞いしてやつた。
誰について？そんなのジョンにでも聞いてくれ。

つていうか、これは乗るのは決定的にまずい。これほどあからさま
に危険を感じるのは久しぶりな気がする！

いや、でも良く考えてみると大丈夫な気がする。ここまであからさま
な危険なら、ヒナギクも危ないと感じてくれるかもしれない。と
いうか感じるだろ。常識的に。

そう思つて、”どこか違うところにこきましょうか”とでも苦笑い
しながら言つてくれることを期待しつつヒナギクに声をかけた。

「あの、ヒナギクさん・・・」

「ちよつと、これは……」

予想通りの反応だ。“じじまで”は……

ハヤテは勝手に自分の都合の良いように次の言葉を予想し、さっさとこの行き過ぎたマシーンから離れようと来たほうへと歩き出した。しかし、それはヒナギクの一言ですぐに止めなくてはならなくなつた。

「とつても面白やつじゃない!」

ヒナギクはそのままながらハヤテの手を力強く引き止める。

ハヤテはそれにおもわず苦笑いする。

「えつと、これに乗るんですか?」

ハヤテはまつたくもつてヒナギクの言つていることが信じられない。ただ、なぜか分からないが怒りに近いオーラを感じるので安易に反論することが出来ない。

とにかく、ハヤテは怒りのオーラを感じているようだが、実際は結構近いのだがヒナギクから出しているものは少し違うものだった。どちらかというと固すぎる決意という感じのものだ。

なぜかと云ふと、いわすもがな原因はコースターとハヤテである。

「の『スターを諦めれば、他に行けそなもの』の周辺にはない。少し歩けばあるが、なんとなくそれは止めておきたい気分だ。

とこうことで、これでのうなればいけないとこうじもある。

もうひとつは、『』まで嫌いな高こうを意地悪しているとしか思えないスピードや動きで回るものに乗る決意をしたところに、それを簡単に壊したくないということだ。

せっかく自分の苦手なものを克服するところに、やっぱり止めたところはナギクの性格上許されない。生徒会長の名が廃ってしまうのだ。

ところことで、田の前で起った悲劇を田の前たちにしながりも、あまり氣にならずに、というか気にせずに乗ろうとしたところに、ハヤテが感じたオーラはこの決意にある。

ところことで、ハヤテは相変わらずしゃべりだせずにいるのだが、ヒナギクはハヤテを強引に入場口へと連れて行く。

「大人一人お願いします！」

ヒナギクが、係員のおばさんに声をかけたとき、ようやくハヤテは金縛りっぽいものに開放された。

と、同時にやつやくの場からの離脱を試みる。

「ちょっとヒナギクさん！さっきの人たちを見なかつたんですか！？涙とかそういうレベルではないですよ！？」

ハヤテの必死の説得にヒナギクが返事をしようとしたとき、横から良くなじむガラガラ声が聞こえてきた。

「それなら大丈夫だよ、彼氏君」

係員のおばさんだ。

つていうか、どこが大丈夫なんだ？

「だつて、ねえ？」

おばさんはわかつてゐるよひにヒナギクに田線を送る。ヒナギクはそうですねえと言つた感じでハヤテに田線を送る。

「だつて、カツパ持つてきてるもん」

ウワーオ。

カツパとか水に突っ込んだら意味ないし。つていうかなんでおばさんがそんなこと知つてるんだか。

つていかうか、ヒナギクさんがかばんから出したカツパは一着しかないんですけど・・・

僕はずぶぬれ覚悟ですか・・・

ハヤテがどこから突っ込もうかと0・5秒ほど考えていると、いつの間にか係員のおばさんヒナギクと一緒にコースターの座席に座らされていた。

ハヤテは最後の抵抗にそこからの脱出を試みてみる。

しかし、横で見ていたおばさんに気持ちのこもった言葉を送られた。

「逃げたら・・・殺しますよ?」

ウワーオ。

なんか脅されちゃつてますよ、僕。

ただならぬおばさんの殺氣で結局離脱作戦は失敗し、一人だけを乗せたコースターはゆっくりと発車していった。

ガガガガガガ

一人を乗せたコースターは、不気味な振動と共にゆっくりと上へと体を持ち上げていく。

その無駄に遅いスピードの性で、これから自分に降りかかる惨劇を余計に考えてしまつ。

あー、僕はこれからあんな不衛生なところに飛び込まなきゃいけないのか・・・

考へても仕方が無い。脱出できることも無いが、今ここから逃げ出すのは現実的ではないだろ? 一般的には。

そんなことより今考えるべきことはヒナギクのことだ。

となりでなんだか意氣揚々とカツパをかぶつて座っているが、このままいくとヒナギクもただではすまないだろ? 何しろカツパだから。

なんとかヒナギクだけでも逃げさせたいが、なんといつてもヒナギク自身が乗りたがっているのがどうしようもない縛りになつて、ハヤテにはどうしようもなくなつてしまつてしまつている。

いつたいどうしたらいいんだ・・・

しかし、考えてくるついでコースターは頂上まで上つれる。

あ～、もひびうしたら良いいんだ――――――！

ハヤテが決死の心理戦（自分だけの）を繰り広げる中、コースターは下降体制に差し掛かる。しかし、初めはまだ普通のジェットコースターなので焦るけど焦る必要は無い。

何もアナウンスされていないが、一応このアトラクションも高さが30mもあり、結構なスリルがある。下手な遊園地よりハイレベルなほどだ。

とにかくことで、スリル十一分満点なコースをコースターが下りだす。ハヤテは上記の通り決死の死闘を繰り広げているので、もはやコースターがどんな様に動いているかなどもはや関係ない。

が、関係ある人が一人いる。

「ううううう・・・・・キヤ――――――！」

ヒナギクさんですね。

一応、固い決意によつて頂上まで上るとこまでは平氣だったのだが、さらに恐怖をあおる回転やらGやらでついに緊張の糸が切れた。目の前の景色の流れについていけず、ただただハヤテの腕を抱きしめる（無意識に）だけである。

あーあ、だからハヤテがとめてくれたのにねえ。余計な猪突猛進は

後悔と絶望を呼び寄せるだけだったことを少し学習しただろつか。

まあ、幸いにしてコースターが動いている時間はそれほど長くは無い。普通に考えたら損をした気がするが、今のヒナギクには大助かりだ。

泣き叫びまくっていたら、あつという間に最後のウォータージェットが視界に入ってきた。

やつた！これで地面に足が着くわ！

これからどんなことが起こるかなんて関係ない。テストが早く終わるなら全部空欄でもいい気がするように、次の結果なんてものは端から考えていないのだ。

唯一、考えていいそうなハヤテは、考えすぎて結局何も出来ずにコースターの動きに身を任せるのである。

こんな感じで、コースターは水の中へと勢い良く飛び込んでいった。

「はあー、遊園地には絶対あつて欲しくないです」

無事に（！？）完走して全身しつとりになつたハヤテとヒナギクは絶対的に重くなつた体をいやいや動かしながら、同じ施設内の休憩所へと向かつている。

「ちよつとここれは予想外だつたわ」

そういうヒナギク的には予想以上のしつとりだつたようだ。一応、水につけたタオルくらい飽和してゐるんだけど。

今のセリフから分かるように、やはりヒナギクはコースターの悲劇を考えていなかつたようだ。しかも乗る前から、猛進するもの良いところである。

しかし、まあ、濡れてしまつたものはしようがない。考えていれば乾くというものでもない。

それよりも、早く着替えないと風邪を引いてしまいそうだ。一応温かいとはいへ、女の子の体は冷やしてはいけないものだ。

どこかに服はないかと考えながら、ようやく歩きついた休憩所の中に入ると、目の前には値札の着いた洋服が沢山置いてあつた。

（1）乗車になつた方限定！全品10%OFF！

入り口にはでかでかとこんなことが書かれている。

あれ、これってねれた人から洋服台をぼったくるっていう計画的犯行……？

ハヤテの考えどおり、あきらかに巻き上げようとしているが、今は服がないとヒナギクが風邪を引いてしまうかもしれない。仕方が無いのでヒナギクに適当に服を選んでもらう。ついでとこりては何だが自分のも選ぶ。

状態が状態なのでさすと選び、会計に持つて行った。

レジのおばさんバー「コードレーザー光つぽいもの」と、レジのモニターに値段が表示された。

「一着で￥35000になります」

やられた――――

ヒナギクは自分の分は出すといつているが、乗るのをとめられなかつた自分のせいで買うので自分が出すと言つて押し切つた。

ハヤテにこんな高額が出せるのか?と思つた方もいるだろう。実は今はマリアから預かつたクレジットカードがあるのである。もしものとき意外は使うなといわれているものだが。しかしあ、マリアには何といつてこの出費を説明するか、今から考えておかなければならぬ。事実をそのまま言つて信じてくれるほどマリアは馬鹿ではないからだ。

そんな感じで洋服を無事に買い、一人はようやく一息ついた。だつてあとは着るだけなのだから。

「じゃあ、这儿で適当なところ着替えましょうか」

ヒナギクはとりあえず休憩所の中を見回してみた。しかし、着替えられたようなトイレやスペースはありそうに無い。洋服の試着室も無い。

「这儿ではダメみたいですね」

仕方が無いので、あまつやりたくは無いがどこか少しはなれたところまで探しに行くことにする。

服まで買つたところの近くのせもじかじい。

足早にとつあえずこの「一スター」の施設内を一回つじてみた。ところが、着替えられそうなところが、トイレひとつ見つからない。なんて設備の悪いところだらう。

仕方が無いので今度はさうに離れたところまで探しに行く。

「くわりょんっ」

後ろを歩いていたヒナギクもそろそろ寒さにしてきた。かれこれ15分は経ったから無理も無い。早く着替えさせてあげなければならぬ。

「おっ、あれはいい感じじゃないですか」

来た道と反対側へ進んだところ、小さな集会所を見つけた。いまは使われている気配はなく、みたところ鍵もかかっていない。ここで着替えると言わんばかりのしるものだ。

さつそく一人は中にはいつて着替えられそうなどころを探す。なぜ建物の中でさらに探すかと言つと、着替える人は一人いるからである。同時に同じじところでは着替えられないですよね？

とにかくことで、せまい8畳ほどの部屋をくまなく探してみたが、他には部屋ひとつ何も無かった。トイレすらない。

「もー、なんでここにトライアも一台もないのよー。経営者おかしいんじゃないのー？」

ヒナギクが起らるのも無理は無い。ハヤテは、次に来るときはお手洗いは先に済ませておいたほうがいいとみんなに言つことを決めつ、今自分がどうするべきか考えてみた。

とりあえず、ヒナギクは先に着替えてもらわなければなれない。自分は別に後でもたいしてかわらない。

とにかくことは、ここは自分が外に出てヒナギクに先に着替えてもらうべきだろ。ハヤテにはこれ以上最善の手が思いつかない。作者も同じだ。

とにかくことで、この意向をヒナギクに伝える。

しかし、ヒナギクの反応は予想外のものだった。

「何言つてるのよー。ハヤテ君だつて早く着替えないと風引いちやうわよー。自分だけ特別扱いなのはごめんだわ！ 着替えるならハヤテ君からでいいわよ」

あくまで生徒会長のヒナギクである。考え方が民主的だ。けど、紳士なハヤテはそれを簡単に受け入れるわけにもいかない。

「何言つてるんですか！さっきまで寒そうにしていたんですから早く着替えちゃってください！」

そんな感じで言い合いになつてきた。

このままでは意地の張り合いでうちが明かないのにヒナギクが究極の和解策を提案してきた。

「だつたら一人で着替えればいいじゃない」

それにハヤテは思わず赤面する。何か不健康なことを想像したに違いない。ちなみにヒナギクは肝心にのりでいつたので自分の言ったことの重大さに気づいていない。なんだか最近この傾向が多いぞ。こんなこといつたら一帯何人の男子が飛びつくことやら。まあ、相手がハヤテだから言つているのかもしれないけどね。

「なななななっ、何を言つてるんですかヒナギクさん！？そんなのダメに決まつているじゃないですか！？」

ハヤテは赤くなつた顔を隠すように、早く着替えちゃつてくださいねとだけ言い残して部屋を出て行つてしまつた。かわいい反応するじゃないの、ハヤテ君。これから君はもてるんだよ。

「まったく、ハヤテ君も子供よね。それがかわいいんだけど」

そんなこといつてないで早く着替えてあげるのがハヤテのためだと思いますよ。外で待つてゐるんだから。

そんなかんじで、ようやく自体は収まつた・・・。ついに思えた。

しかし、本当の事件はこれからだつた・・・。

ヒナギクの着替えは、なんと云ふこともなく順調に進んだ。まあ、
いじじでいじするよりなら日常生活などやつていけないだろ？

しかし、事件は起つてしまつた。ちょうどヒナギクが新しい服を
着ようとした時のことだった。

ガタガタガタガタ・・・・

誰もが一度は経験のした事のある振動がヒナギクを襲い始めた。地
面はその広さを無視して振動し、建物や物を容赦なく揺らす。

俗に言う地震といつやつだ。

ガタガタですんでいるときは良かった。しかし、初めのガタガタは
P派だつた。P派とは初めに来る弱い振動のことで初期微動とも言
われる。伝わるのが早いが揺れは弱いというのが特徴だ。

通常、P派の後にS派がやってくる。今回も例外ではなかつた。S
派とは伝わるのが遅く揺れが大きいというのが特徴だ。

ガタンガタンガタン！

S派の襲来と共に、部屋の中にあるあらゆるものがヒナギクのいる

ところが、めがけて飛んできた。震度は5以上は軽くありそうだ。

「ちょっと、何なのよ、これ！」

「冗談ではなく危険な状態だつた。初めは振つてくるものを手で払いのけていたが、だんだん立つているのも困難なくらい揺れが激しくなってきた。

今、すぐ横にある棚が振つてきたら確実に下敷きになるだろう。

「ハヤテ君……助けて……」

ヒナギクが心の中で助けを求めるのとほとんど同時に、ドアを開く音が聞こえた。

「大丈夫ですか！ヒナギクさん！？」

ヒナギクの思いが通いたのか、ハヤテが急いでヒナギクの元へ駆け寄ってきた。ハヤテは、すでに立つていられなくなっているヒナギクを支え、自ら盾となつてヒナギクを守つた。

そのまま何秒くらいそうしていただろうか。絶対的にはそんなに長い時間ではなかつたが、ヒナギクはハヤテに守られているという実感で、時間が止まつているように感じた。そのまま目を閉じてハヤテの優しさに浸つていたからだろうか、ハヤテに声をかけられるまで地震が去つたことに気がつかなかつた。

「もう大丈夫ですよ」

あれからどれくらい経つたのだろうか。地震はすっかり收まり、部

屋の中はすっかり静まり返っていた。

田を開けると、田の前にハヤテが優しく微笑んでいた。

ハヤテはやそじくヒナギクに手を差し伸べている。

ヒナギクは、手をとつて立ち上がる。お礼を言つてから部屋の中を見回してみると、さつきまで整然とならんでいた棚や本が部屋中に撒き散らかっていた。

はつとなつて部屋の中を見渡すと、地震の激しさを今もつて知る。

ハヤテが守つていくれなかつたらたぶん本とかに頭を打たれて怪我をしていたかもしれない。実際、足元には沢山の本が落ちている。そばにある本棚のせいだ。

「ありがとう・・・、ハヤテ君」

ヒナギクは、感謝の気持ちを込めてお礼を言った。

しかし、ハヤテは自分の姿を見ると、急に後ろを向いてしまった。

なぜだかまったく理由が分からない。

頭に？マークを浮かべながら、今の自分の状況を整理してみた。

服がぬれたので着替えた　途中で地震が来た　ハヤテに助けてもらつた　今に至る

・・・・・。

気づいた方もいらっしゃるだろう。今のヒナギクの状況に。

ヒナギクの左手にはまだ来ていない新品のTシャツがある。いつでも着れるような万全の状態だ。そして足元には濡れた服が落ちている。これは家から着てきた一番おしゃれな服だ。

સાહિત્ય અનુભૂતિ

卷之三

声にならない叫びとなつてこみ上げる羞恥心。ヒナギクは全力でハヤテから見えなさそうな一番遠いところへと逃げる。しかし、残念なことにこの部屋は正四角形な上に狭くて、どこにいても全てを見渡せてしまう。つまりそんな行為はまったくの無駄なわけだが、精神的にそうでもしないと生きていけない。

「大丈夫ですよ・・・僕は何も見てませんから・・・」

ハヤテはそういう残して、決して後ろは見ませんといつ覚悟をかもし出しながら、さうなく部屋を出て行つた。

「もう私・・・お嫁にいけない・・・」

きつと君はハヤテにもらわれるから大丈夫だよとか、そういう言葉をかけられないほどヒナギクは落ち込んでいた。いや、正確に言うと恥ずかしがっていた。

当然、それはハヤテも同じことで、表でぶつぶつと念仏のようにある言葉を唱えていた。

「僕は何も見ていない。僕は何も見ていない。僕は何も見ていない。
僕は何も見ていない・・・」

ちやつかりマリアさんフラグありまくるくせに、今回はやけに対応
が大げさだ。

というか、いろいろとばれただ。それは心中にしまっておくん
だぞ！他人に言つたら殺されるどころじゃないからな！

そういうじてこらへんうちに、時刻は3時を回つた。

あれから、一人を川を極力合わせないように行動したため、ハヤテ
が着替え終わるまでずいぶん時間がかかった。

お互い、離れると永遠に合流できる気がしないので離れはしこうが、
くつつきもしないみたいな微妙な位置関係を保つていて。お互いの
姿を見るとまだ顔が赤くなるので仕方が無いのだ。

一番心理的ダメージの大きいヒナギクはハヤテを見ないよう先頭
を歩いている。ハヤテはぎりぎりお互いの足音が聞こえるくらいの
距離を保ちながら着いていく。

はあ～。何かまたヒナギクさんに嫌われちゃったな～。前にもこん
なことがあつた気がするし・・・

考えてみれば、前にも同じく地震でヒナギクとは事件があつた。良

く考えれば今よりも重大な事件だったのかもしれない。

あの時・・・僕はヒナギクさんと・・・キスを・・・

考えると重大な事件だ。きっと人生で数えられるくらいの大事件や
イベントをあの時行ってしまったのだ。

でも・・・あの時はそんなに恥ずかしいとか今より思わなかつた
のにな・・・

なぜだらう、たかがとはいえないがこれくらいでこんなに恥ずかし
いのは・・・

もしかして、僕は前よりヒナギクさんのこと・・・

・・・

「ハヤ太君。お久しぶりじゃないか」

次の言葉は、話しかけてきた女子の言葉によつてすばり記憶から消え去つた。

聞きなれているけれど、そういうれば最近聞いていないような気がする水色カチューシャが特徴の顔が頭に浮かんできた。

「ヒナとのトークは楽しんだかい？」

若干からからかい気味のしゃべり方で話していく。

しかし、今はそんな小さいことを気にしている余裕はハヤテには無かつた。

「あれ・・・今までどこに行つていったんですか！？」

そういえばといつまでも結構は美希のことを見失っていた。
読者さんの中でも結構いるのではないか？

「ひどいな〜、ハヤ太君。私だって結構登場回数多いほうなんだけどな〜」

皮肉をたっぷり混ぜて言つ。

「私がどこにいたかだつて?ふふふふ。それはね・・・・・

次回に続く!

28話（後書き）

いかがだったでしょうか。

今回は自分にしてはめずらしく、あからさまに後を引く終わり方になりました。

特に意図はなく、気分です（笑）

最近、執筆の調子が悪くなつてきたので感想とか感想とか待つてます！

「私がどこにいたかだつて？ふふふふ。それはね・・・・・・」

不敵な笑みを浮かべながら美希は続けた。

「それはね・・・・・・

「教えない」

・・・・・。

え――――――――――――!

ハヤテは絶句した後、世界の中心で叫んだ。

「それだけ振ってためておいてそれってどうこいつですかー?」

無駄としか思えない展開に、ハヤテはただただ突つ込む」としか出来なかつた。

しかし、それは美希の思惑通りの行動だつた。

「いやー、ハヤ太君なら絶対そういうと思つたよ。ありがとう」
ハヤテのリアクションはまさに美希の想像したものと同じものだつた。逆に美希がハヤテに心を読まれたかと思つてびっくりしたくらいた。

「とまあ、これは冗談で・・・

とりあえず自分は満足したので本題に入ることにした。自分の冗談発言にまたハヤテが何かリアクションしているが、もうお腹いっぱいだから大して興味はわかんない。とつとと話を始めることにする。

「君たちのことだからね、目の前からいなくなればすぐに私のことなんか頭からなくなるのは分かりきつていた。万が一のことを考えて一応暗くて分かりにくいお化け屋敷のときに君たちを一人にしてみたんだ。まあ、ばれたときのプランもあつたんだがな」

たんたんと語つていてハヤテが思つに間違いはなさそうだつた。なぜかというと、思い返してみれば最後に美希を見たのはお化け屋敷に入場してすぐのときで、それからまったく姿を見ていなからだ。そこで分かれたとしても何の不思議も無い。さらに考えてみると、なぜ美希がお化け屋敷に連れてきたのか、その理由も分かつた。

しかし、それを納得してもなお残る疑問がある。

「なんでそんなことをしたんですか？」

「ればっかりはハヤテの頭ではまつたく想像できなかつた。考えてみるとハヤテの頭は想像できない」とばかりだが、それが仕様なので仕方が無いのかもしね。

シャーロック・ホームズもびつくりな難題に困つてゐるハヤテに、美希はまつたくばかだなあといろいろ言つてからこう言つた。

「理由なんて簡単さ。だつて、一人つきりにしたら面白いことしてくれそうだったから」

美希は最後にこれだけはヒナギクに内緒にしておいてくれ、絶対フルボッコされるからとだけ付け加えた。

まあ、ハヤテはこんなこといわれても何が面白いのかといろいろわからぬことばかりで、逆になぞが増えただけだったが、大体の読者様には分かつていただけたでしょうか。

ちなみにハヤテ君は考え中なので突つ込みはなしの方向で行きます。

「まあ、他にも理由はあるんだがな・・・」

ハヤテが悩んでいる間に、美希はひつそりとそうつぶやいた。が、声が小さかったのと一番聞く可能性が高いハヤテが聞く体制でなかつたので誰もそれを耳にすることは無かつた・・・ように思えた。

そんな感じで、ハヤテとヒナギクの間に仲介役が加わった。

これによって、一人も少しずつこつもどおりに話せるようになつてきていた。

まあ、きこちない一人を見て美希の鋭い洞察力が働き、いろいろいじられたのは言つまでも無いことだ。でも、それを必死に一人で反論しているうちにまた普通に戻れたことも事実だった。

三人でそうやって騒いでいると、時計に目を向けると時刻は4時を回っていた。

「あと、2時間しかないのね」

気がつけば集合まであと2時間。さすがにこもつ全てを回るといつのは無理な話になった。それ以前に地震の影響で全ての施設が動いているというわけでもなくなつている。

残り時間はゆつたりと適当にすごすのがベターだろう。

「だったら、あれに乗らないか？」

美希が指差す先にあるものは、空高く聳え立つ円形の「コンドラ回転装置。通称観覧車。耐震性は抜群で、点検もすぐに終わりすでに運転が始まっている。

落ちかけた太陽の光を横から受けて、地面に動く円の影を描いている。

これまた孤島に似合わぬ大きさで、高さは80mはあるようだ。影

の髪でも相当なものだ。

美希は、これに乗る同意を求めヒナギクとハヤテの顔をのぞいた。

ハヤテはいいですよといった顔をしている。これは美希の予想通りだ。もともと特別な理由でもない限り多少の不都合があつても他人に合わせる性格なので（美希の手帳を参照）こうなることは分かりきっている。

しかし、ここで美希の予定を狂わすものがいた。

「いいんじゃない？ 観覧車」

風になびく桃色の髪を手で押さえる少女H・K。美希のデータによると高いところは苦手なはずだ。こんなものに乗りたがるはずも無い。

「ヒナ……お前いつから平気になつたんだ？」

自分が知らない間にヒナギクが進化していたことに美希は愕然とした。ヒナギクのことだけは全て知り尽くしていると思つていたのに。

そのとき気づいた……

自分の気持ちの矛盾に……

美希は、力なくヒナギクの手に引かれ、観覧車の乗り口までつれてこられた。

29話（後書き）

さて、実はこの後の展開はかなり気合が入つていたりします。
まだまだ沖縄初日ですがイベントいっぱいです。これから展開に
ご期待ください。

感想どうがあればいいつでも気軽に書いてくださいね！
とっても作者の励みと参考になります。

「大人一人でお願いします」

ヒナギクは、入り口へ着くと、すぐにチケットを販売員のおばさん
のところへと買いに行つた。なんだかコースターのところにいたお
ばさんとそっくりな気がしたが、きっとそれは錯覚だらう。

しかし、ヒナギクが買って帰つてきたチケットは手元に一枚だけで
ある。ポケットとか一枚重なつていなかとも調べたがそれはな
かつた。本当に一枚しか買っていないようだ。

ハヤ太君と二人で乗るのか？

さつきの精神的ショックをいつもの無表情フェイスに切り替えなん
と隠しつつ、美希はそんなことも考えたが、その予想はまったく
のはずれだった。

「美希、一人でこれに乗りましょ」

ヒナギクは美希に手を差し伸べて一緒にこつと誘う。

横で、ハヤテがわけも分からずにひたすら自分が省かれた理由を考
えていたが、ヒナギクが耳元でささやくと納得したように首を縦に
振つた。

私にはわけが分からぬ……

美希はいまだにわからないヒナギクの考えを想像しながらも、ヒナ

ギクの誘いを受け入れた。

ハヤテがなぜ納得したのか、ハヤテも納得できることなのかななど納得できないことも多いが、ヒナギクが苦手な高いところに一緒に行こうと叫んだ。きっとわけ

があつてそれなりの重さのあることがあるんだり。

そつやつて自分を強引に納得させ、さつきから地味にショックだった予想のはずれも忘れたことにした。

そんなことと一緒に、これから起るであろう、いろんなパターンのイベントを想像しつつ、係員の指示に従ってゴンドラの中へと乗り込んだ。

係員は一人が無事に乗り込んだのを確認すると、ガチャッと手馴れた手つきで扉をしめ、この空間を完全なる密室にしてまた次のゴンドラに人を誘導していった。

閉ざされたこの狭い空間には、今まさに一人だけしかいない。

静かにゴンドラは夕日が輝く空へと引き上げられ、徐々に島の全景が窓から見えるようになってきた。

それは、言うまでもなく美しいもので、しばらくの間何もしゃべらずに見入ってしまったほどものだつた。

しばらくの間、そして沈黙が続いていたが、半分くらいの高さまであがつたところで、ヒナギクが口を開いた。

美希はついに来たのかと柄にもなく緊張していた。こんな緊張感は生徒会選挙の演説を全校生徒の前でしたくらいた。今ならどんなに小さい声でも聞き逃さないと

いつほど神経をヒナギクに集中する。

しかし、ヒナギクから出た言葉は意外すぎるものだった。

「た、たたた高いところへ一度行つても慣れないものね・・・」

ヒナギクは恐怖のあまり声が強張つてまでいる。

美希は、ヒナギクのことだから本題から来るかと思っていたら、出鼻をくじかれて座っているのにいつも癖でこけそつになつた。

たまに思うが、ヒナギクって結構先を読めない人間だ。

「なんだ、誘つてくるくらいだからもう克服したのかと思っていたのにな」

いつものおどおどしたヒナギクを見ていると、せつとの緊張はどこへ跳んで行つてしまつた。そのあどけなさは心を癒してくれ、見ていると和んでくる。

前に違う人と乗つたときはそうでもなかつたのになとか言つていたが、ヒナギクのことだからきっと子供だましでだまされたんだろうと思った。

「でも、どうして観覧車なんだ?」

ハハハと笑いながら、なんとなく聞いてみた。

乗る前からの最大の疑問点だ。高いところが苦手なのに乗る理由がどこにあるんだろう。まあ、一人つきひとつといつで何かありますのは分かるんだが。

このままではヒナギクがかわいそなので、少しでも高いところにいることを忘れられるように話のネタを振った意味もこれにはじつはあつたりもする。

ところが、話しかけてもヒナギクはすでに失神しそうなレベルに達していて、まったく聞いていなかつた。いや、この場合聞けなかつたといったほうが正しいだろ

う。弱点もここまで来ると欠点だ。同じかもしれないが。

まつたくしようがないな・・・

美希はとうあえず、せつせつからどんどんひどくなつていくヒナギクをなんとかすることにした。まあ、それ以外に選択肢など無かつたが。

ふう、と軽く深呼吸してからヒナギクの目をじつと見つめて話す。

「ヒナ、これから私の質問することに答えてくれ。好きな食べ物は？」

実は得意だったりする精神論の活用で、ヒナギクに話を聞かせている。

「・・・ハンバーグ」

もはや意識外でヒナギクは答える。

「好きな動物は？」

「・・・・ネ！」

それじゃあと、美希は少し笑いながら言ひへ。

「好きな人は？」

「・・・・・ハヤ・・・・・・つて！――何言わせるのよ――――――！――――――！」

元気になつた。

まったく、本当に分かりやすいやつだな

美希の言うとおりだ。人間とは簡単に出来ているものだ。そこら辺のケータイの取り扱い説明書よりずっと分かりやすいんじゃないだろうか。

しかし、なんだか元気になりすぎてしまったようだ。怒り狂ったヒナギクはダークなオーラを発しながら美希に攻め寄ってきた。美希は思わず焦りながら必死の弁明に入る。

「いや、だってな、あまりにもヒナが元気なかつたから搾り出してやううと思って・・・」

へえ・・・だから?と、さつきまで静けさせじくいたのやう、
有り余るパワーを放出しまくつて美希を威圧している。美希の弁明
に聞く耳は端から無いよつだ。

しかし、そんな美希にも反撃の手が無いわけでもない。

「そついえば、さつき好きな人つてハヤ『ちょっと待つてっ!!!』
……』」

最強のスットップパーだ。さすが美希といつた感じで、さつきの発言
から見事に弱みを見つけ出し、適所で使つている。

これは効果絶大で、ヒナギクは頭から蒸氣を出す勢いで赤くなり、
しょぼしょぼと小さくなつて自分のいた席へ座つた。

やつぱり弱みは握つておくものだな

こつなれば美希の勝ちだ。とりあえず、こんなことしているうちに
観覧車は頂上まで来てしまつたので降りなくてはならなくなる前に
話をしなくてはならない。

わひと、と美希はわざとらしく聞か。

「それで、本当の話つているのはなんなんだ?」

本当の話し合には今始まる・・・

30話（後書き）

えつと、実は気合を入れる宣言をしたのはこの次の話からです・・・
・これは書き溜めてあつたので。

とりあえず、次回に続くのでそれまでお待ちください。ぐだぐだで
したが楽しんでいただけたら幸いです。

「本当の理由が知りたかったのよ」

ヒナギクは真剣な目つきで美希を見据えている。

でも、美希には言っている意味がまだつかめていなかつた。もちろん、そういうわれて思い当たる節はいくつかあるが、これだというのが思い当たらない。ひじろからいろいろし過ぎていてる罰だらうか。

「どうしてハヤテ君と一人つきりにしたのかつてことよ」

ちょっと言葉が足りなかつたことに気がつき、後から言った。

美希も、的確に的を捉えた付け足しのおかげでヒナギクの言いたいことがつかめた。

「それならさつときも言つたじゃないか。面白くなりそうだからつて『嘘でしょ』」

突然ヒナギクに話をさえぎられて美希は思わず「えつ」という声をもらしてしまつた。いつもの冗談交じりの言葉とは迫力が違つていたからだ。

「聞こえたのよ。他に理由があるって。それに見ていてそれくらい分かるわ」

美希は驚きを超えて驚愕していた。といつのも全て図星だからだ。誰にも言つた覚えはないのにヒナギクには気づかれている……。

「いつからバレたのかな……」

「このことはヒナギクには隠し通せないことは経験から学んだ。ここまで勘付かれていてはもうじりばっくれる」とも出来ないだろう。

できればずっと心のうちで秘めてこようと思つたが、やはりとこうべきかヒナギクにはそれは無理だつたようだ。潔く白状するしかない。

「单刀直入に言つと、私はヒナを応援したいんだ」

そつ。これが美希の本当の気持ち。今回のひとつの全ての理由はここにある。

ヒナギクをハヤテと一人つきりにしたのも、何か進展があるかもと、いつも心遣いからだし、そもそも班分けの段階からこのメンバーにすることで一人だけになれるように配慮している。

今までヒナギクに迷惑をかけていた分、少しでも恩返しが出来たらなと思ったのだ。

ただ、純粋にそう思つてると自分も思つていた。でも、実際はそうではなかつた。

ヒナギクが”観覧車に乗る”と言つたとき、自分の知らない間にヒナギクが変わつてゐることに気づいた。そして、同時に言葉に出来ない感覚に襲われた。

それはとても嫌な感覚で、自分のおもちゃがどこかへ行つてしまつたような、そんな感じだつた。

ヒナは自分のもの・・・

きつとそんな風に思つてゐる一面があるのだひつ。

正直な話、今いつしてゐる間もひつこの感情は消えていない。

けれども、ヒナギクに幸せになつてもうしたいところの気持ちのまゝが、ずっと大きく強いものなのだ。

誰でも素直には生きれないけれども、素直になれることができるから、精一杯自分の出来ることをするのだ。

だから、ヒナに幸せになつてもひつ

そう決められたのだ。

「まつたく、もつと素直にやつてくれたらよかつたの」「

ヒナギクは、初めて美希の本当の気持ちを聞いて、やつと心の底から話ができるようになった気がした。

本当は優しい子だといつて、なんとなくじやなく正確に知ることが出来た。

ちょっと、やり方はひねくれているところもあるけれど、ここまでしてくれるなんて優しいとしか言ひづが無い。感謝の気持ちでいっぱいだ。

だから、ヒナギクも腹を割つて話すことになった。

「でも、私あなたにハヤテ君のこと言つてないわよ」

ヒナギクは、確信も無いのになんでここまでしてくれるのか、それも疑問だった。今まで意地でも隠し通してきたから、それがばれているはずはないんだが・・・

その質問に、美希は自信ありげに堂々と答えた。

「私がヒナの気持ちに気づかないと思つたのか?」

その言葉に、ヒナギクは睡然としている。

まったく、何年間親友やつてていると思つていてるんだ。

そんなこと、ヒナギクを見ていれば分からぬはずなんて無いんだ。だって、初めて私がハヤ太君と会つたとき、その隣にいたヒナは今までとはまるで別人になつていたんだから。あんなに幸せそつなヒナは初めて見たんだ。

他の人は気づかなかつたかもしれない。けど私はこれでも小学校時

代からの付き合いなんだ。お互この考えていろ」とへりこ簡抜けな
のや。

「こつも世話をかけさせたるお礼なんだよ。ヒナは幸せにならな
きやいけないんだ」

観覧車からま、遠のいていた地上の景色がせつときつと見えるようにな
なっていた。もひ、降りる時間は近いらしい。

「だから、今日はがんばってみてくれ。私からのお願いだ」

窓から係員の顔が見えた。

そろそろ降りる時間だ。

「わかった。がんばってみる」

ヒナギクも、力強く”うん”と首を縦に振った。

二人は、ゴンドラから降りると、ヒナギクはハヤテのほうへ、美希は近くのベンチのほうへそれぞれ反対に進んでいった。

がんばれよ、ヒナ・・・

夕焼けに染まる空の下、美希はただそれを願い続けた。

「もう、用事は済みましたか？」

ハヤテはヒナギクの言いつけを守つて、勢いで乗り込んだ観覧車の入り口の近くの分かれたところで一人で待つていた。

相変わらずの忠誠心で、他人の言いつけは絶対のように守り抜く。人一倍のやせしさと人一倍の強さがないことだ。

でも、そんなことは微塵も感じさせない普通の笑顔で、ヒナギクに話しかける。

ちなみに、ヒナギクが何を言ってハヤテを待たせたかは秘密だ。

「ええ、でね、ちょっと話があるから海のほうに行かない？」

いつもとは違う、真剣なまなざしのヒナギクにハヤテは断るはずもなく黙つとうなずきヒナギクの後をついていった。

一応小島なので、少し歩けばすぐに海辺に出れっこが出来る。

ヒナギクたちがいるところは海に近かったこともあり、ものの数分で着くことが出来た。

「きれいな海ですね」

砂浜に出ると、ちょうど太陽が水平線に沈みかけていたところだつた。

オレンジ色に輝く太陽は、沈みかけてもなお、ハヤテたちを明るく照らし続ける。その光は海に反射し、神秘的なほど美しい景色を作り上げていた。

もともとこの島に人が少ないといつることもあり、誰もこの雰囲気を壊すものはいなかつた。今、まさに一人つきりだ。

ヒナギクも、その海を見つめながら話を始めた。

「人つて、自分ひとりじゃ何もしていけないと思うの。いつも誰かがそばにいて、お互に手伝いあわなきやいけないと思うの」

ハヤテもすこへ思つ。

小さい頃、親がいなくてどんなに辛かったのか体にしみこんでいる。

「やうやつて、誰かと一緒にいるとずっとその人といたくないつたりあることはない？」

もちろんハヤテにだつてある。学校に行けば優しく自分と接してくれる人がいた。

疲れきった心の唯一休まる瞬間だつた。ずっとそうしていきたいと何度も思ったことか。

「ハヤテ君は、どういう人といると楽しい？」

そんなの全員とに決まつてゐる。白皇にきて、みんなが優しく接してくれたから自分はここまでくることができたのだから。

だれも僕を遠ざけたりする人なんかいない。そんなみんなといて楽しいはずが無い。

ちょっと気が強かつたりひきこもつたりしてゐるけど、命を救つてくれたお嬢様。

根は優しいけどちょっと笑えない冗談がよくマリアさん。

いたずらが過ぎるけど明るい三人娘たち。

頼りになつて、沢山お世話になつてゐるヒナギクさん。

みんな良い友達だ。

「わうじやないのよー！」

ハヤテの言つていることは間違つてはいけない。

けど、ヒナギクの言いたいことはそうじやない。

すくなく微妙なことだけど、樂しこつてわうじつ意味じやない。

もつと、奥のほうで何かが違う。

「たとえば……一緒にいてくれるとわしくなるような、そんな女の子とかいなかつた……？」

何もだれかいなかつたか探していはるわけではない。

しばらくの間、沈黙が続いた。

「・・・・・」

重い口を、ハヤテは開いた。

「確かに、僕にもそんな人がいました”した”。その子とはいつも一緒にいました。その子も僕と一緒にしてくれました。

“いつからかわからないけど、その子と一緒にいるのが僕の楽しみになっていました。

“いろんなことをして遊んだし、いろいろ教え込まれたりもしました。そのときは本当に楽しかったです。

「でも、それも全て過去の話です

話はまだ続く。

「でも、その子はある日僕の元から去ってしまいました……」

理由なんてわかりません。

ただ、彼女を怒らせてしまったことだけはわかります

だから・・・

「苦手なんですよ、女の子は・・・」

ヒナギクは、話をしている間、ずっとハヤテが悲しい顔をしていたのがわかった。

それは、今まで見せたどんな表情よりも見ていて辛いものだった。

どれだけハヤテを傷つけているか想像するのもたやすかつた。

「ヒナギクさんは、僕が西沢さんに告白されたのは聞いていますよね。

その時、一瞬だけお付き合いしてもいいかなって思つたんです。一緒にクラスになつてから仲が良かつたし、とってもいい人ですし。ちょっと幸せになれるかな

なつて思つたんです。

でも、すぐに昔のこと思い出したんです。大事な人を失う辛さを。

もちろん、他にも借金のある身ですし、お嬢様のお世話だけで精一杯なのもあります。

でも、やっぱりダメなんです。失う怖さを知つてしまつたから・・

・・

僕つてダメな男ですねってハヤテは言つてきた。

でも、そんなことない。

私だつて大切な人をなくす怖さを知つている。

私だつてそれが怖くて人を好きになれなかつた。大切な人ほど失う大きさが大きいから。

でも、それつてすごく苦しかつた。

自分の気持ちを無理やり押さえつけていた、そんな感じだった。

でも、それからハヤテ君は抜け出させてくれたんだよ？

そのおかげで私は自由になれたんだよ？

だからね・・・

「確かに、私もそう思つたことがあるの。

でもね、ある人のおかげでそれを超えることが出来たの。それは
とってもすばらしいことだった。

今まで生きてきた世界がまるで別物になったの。いつもの生活の中
で幸せを見つけることができたの」

ヒナギクはハヤテをまっすぐに見つめた。

「それを、ハヤテ君にも教えてあげたいの。

・

私がね
・
・
・
・

ヒナギクもそりだつたよひて、すべでわぬじやないかもしれない。

教えてあざらぬものじやないかもしれな。

けれど、それのヒントを二つも出してあざる」とは出来ぬ。

いつもわざにこい、すつとすつと一緒にこればきっと分かつてくれるかもしぬな。

それを、ハヤテも分かってくれたのだろうが、一いつとわらつて返事をしてくれた。

それから、二人は輝きだしてきた星を見たり、透き通った海を見たりしていた。

特に話はしていない。

そんなことをしなくても伝わるものがあったから。

そんなこんなしていて時計を見ると、時刻はすでに5時半を回ったところ。

そろそろ集合場所に向かう時間あいだ。

「そろそろ、帰りましょ」

二人は、いつもと変わらぬ調子でまずは美希の待つところと向かっていった。

結局、告白することはできなかつた。

けれど、きっと一人の仲で何かが変わつたに違ひない。

ハヤテは変われるのだろうか・・・

To
Be
Con
tin
ued
•
•
•

32話（後書き）

さて、シリアルシリーズでした。

個人的に力を入れたつもりでしたが、読んでみるとそうでもなかつたですかね（汗）

書くときは気合を入れてみたのですが・・・

シリアルが苦手な作者ですので、アドバイスや感想等がありましたらいただけたら幸いです。

おまけ

新作の作成始めました。そこそこ長くなる予定です。公表するかはわかりませんが、編集して短編で発表するかもしれません。
まあ、頭の片隅に置いとくか通り抜かしても問題ないですね。
以上、最新情報でした♪

「朝(あさ)はんが出来ましたよ～」

マリアの声を聞いて、ぞろぞろとみんな食堂へと集まってきた。

ヒナギクや理沙はすでに準備万端といった感じで皿室からしてきたが、残りのメンバーはいかにも寝起きですといわんばかりの顔でだらだらと出てきた。

ヒナギクはともかく、理沙は家柄上早起きは必須なので実は得意だつたりする。

一緒にトランプをして遊んでいた美希や泉は眠そうなのにたいしたものだ。

こんな感じで始まった4月30日、沖縄一田田。

さすがにハイな娘たちも夜中のはしゃぎ声でおとなしく朝食は始まつた。

ちなみに、昨晩はヒナギクと美希は美希の説教で、そのほかのメンバーは夜通しひゲームなりトランプなりで過ごした。

罰ゲーム制で、いろいろハプニングがあつたが、またそれは別の機会に語ることにしよう。

「今日は何をしようかな~」

泉は何か楽しこと無いかなといった顔で考える。

でも、他のメンバーは何を言つてゐるのといった顔で泉を見る。

「沖縄つて行つたらね・・・」

泉以外、アイコンタクトで通じ合つてゐるようだ。みんなで泉をいやいやしながら見つめる。

ほえつ、といつてゐるあたりから、まだ寝起きで頭が働いていないのかもしない。

沖縄にきたら、やつぱつあれしかないでじょつ・・・・

「海だ――――――」

はいはい、皆さん、ちゃんと準備運動をしてから海に入りましょうね～。足をつたりしたら危険ですからね～。

とこづわけで、海にきました。

マリア、ヒナギク、ナギ、美希はパラソルの下で観察、ハヤテと三人娘は元気に海ではしゃぎまわっていた。

ハヤテは、海で遊ぶのが初めてということもあり、いつもよりもハイテンションだった。三人娘と遊んでいる姿を想像していただけば、だいたいは想像が付くでしょう。

「まつたく、ハヤテは元気だな～」

ナギは、かんかんと照りつける太陽の光などなんのその、パラソルの下でP Pをやりながらつぶやく。

「ナギも、せっかくなんですから遊んだり遊びですか？」

マリアは、ここまで来ても引きこもり思考のナギに苦笑いしながら、慣れは怖いものでナギのグータラも気にしないでのんびり景色を眺めている。どうやら自分が楽しむことのほうが優先事項になつているらしい。

若い人なら遊びたいところだが、さすがマリアさん、大人の趣味です。

「え？ それってどういう意味ですか作者さん？ 私、17歳のピッチピチなんですけど、どこが大人っぽいんですか？」

い、いいいいいや、ちょっととそう思つただけで……

あつ、せつこえぱヒナギクさんもなんと一緒に遊ばないんですか！？

（逃げましたね、作者さん……）

そういえばといつては何だが、いつも元気なヒナギクはおとなしくマリアと一緒に座つている。らしくないといえる。

「なんだか疲れちゃいました。ちょっとだけ休憩しようかなと思つて」

顔には少しだけ不安の情を感じることが出来る。マリアはそれを見逃さなかつた。

けれど、それをダイレクトに聞くほど考慮の無い人間ではない。

「何かあつたときには、思いつきり遊ぶのもいいですよ」

あえてヒナギクの目を見ずに、海を見ながら言つてみた。余計なことはせずに聞いていることを示す為だ。

一瞬、ヒナギクは話すかどうか悩んだが、自分の中に潜む不安に耐え切れず、オブラーートに包みながら少しだけ相談に乗つてもらおうと思つた。

「とある人と話をしたんですよ。とっても大事な話です。けど、その人には大きい壁があつて近くまで入れてもらえないんです・・・」

ちょっとぼかしすぎたかもしれない。何の話だかマリアに分かつてもらえてないかもしない。けど、分かつてもらつても困る。微妙な乙女心なのだ。

しかし、マリアはなんとなく分かつたようで、柔和な表情で答えてくれた。

「人つて言うものは不思議なもので、ずっとそばにいてくれる人はいつの間にか心を許しているものなんですよ。

だから、ずっとその人のそばにいてあげてください。そうすれば、きっと変わりますよ」

マリアは、そういうと立ち上がってヒナギクに手を差し伸べた。

「さつ、遊びましょうか！」

二人は、いつの間にか海から上がつてビーチバレーを始めていたハ

ヤテたちと思いつき遊ぶことにした。

「さあ、行くぞハヤ太君！……」

チームに分かれてビーチバレー勝負になった。ハヤテ、ヒナギク、ナギチームと、泉、美希、理沙、マリアチームに分かれた。なぜ三人娘のいるほうが人数が多いかというと、ハヤテとヒナギクの運動神経は常人の域を脱してるのでハンデとしてナギを入れる+人数を少なくするということになつたのだ。

多分、ナギを入れるのはそうとうなハンディになつてているだろう。狙われたら返せるかどうかわからない。

しかし、そんな心配はよそに、初めはいたつて普通にナギばかり狙われることなく進んだ。ただ、ヒナギク、ハヤテの弾丸アタックで

「う、うわあああああ――――――」

とか、

「ひいえええ、怖いよお――――――」

とか、そういうことにはなつていた。得点的には大差は無いのだが、精神的ダメージのさは大きく開いている。いや、肉体的ダメージも結構ある。

一人にはちょっと手加減するとかそういう精神は無いのだろうか。

「手加減しているつもりなんですかけどねー？」

ハヤテとヒナギクは顔を見合わせる。どうやら一人ともそのつもりだつたらしい。力がありすぎてセーブしてもまだ大きすぎるといった感じだ。

「仕方ない。こうなつたら、アレを使うしかないな……」

美希は、泉と理沙を呼び寄せて作戦を話し始めた。彼女らの性格上負けっぱなしは気分が悪い。少々卑怯でも勝たなければ面白くないのだ。

「ふふふ・・・、じゃあそういうことでいいな」

三人ともにやけ顔になつている。

ハヤテは不気味な予感をそれに感じながらも試合はまた始まった。

皆さんお久しぶりです

さぼつていたわけではないんですよ。ちょっと風邪で一週間ほどぶつ倒れていきました（汗）

一応まだ学校には行けてないです・・・
いやー、久しぶりに風邪にかかると耐性が薄れているのかずいぶんひどくなりました。

まあ、そんなことはともかくとりあえず更新です。どうでもいい伏線もなにもない回ですが楽しんでいただけるようがんばります。

それではー

「僕の負けです・・・」

試合は惨敗に終わった。もちろん、ハヤテ側のである。

「あんなの卑怯よー／＼／＼／＼

ヒナギクはやや顔を赤くしながら抗議する。どんなことがあったかはそこから判断してください。とにかく、死闘が行われたようです。

「ふふ。勝負の世界は甘くは無いのだよ、ヒナ。どんなことをしても勝つ。漫画でもお決まりのルールだろ？」

そんなことヒナギクの知ったことではない。漫画なんて読まないし、それにフェア精神がそんなこと許すはずも無い。ヒナギクは正等進化の主人公柄なのだから。

まあ、美希はそれを承知の上で言っているのは当たり前で、なんともいっやらじいことだ。

「僕は・・・どうやって生きていけばいいんだ・・・」

一方被害者1のハヤテは力尽きていた。三人娘による徹底的な利用が行われたようだ。使えるものは徹底的に使う。そんな感じで使われたようだ。

砂浜に手を着き、一向に立ち上がる気配の無いところを見るとダメージは相当なものようだ。

「わ、私、もうお嫁にいけないです・・・」

被害者2。マリアさんも味方にかかわらず犠牲になつたようだ。三人娘の計画ではそれほどではなかつたようだが、乙女なマリアさんにはダメージは大きかつたようだ。

何はともあれ、これで試合は幕を閉じた。じりじりと肌を焼く太陽もそろそろ邪魔に感じてきた。

時計を見るともつすぐ毎時だった。熱中していたせいで時間をすっかり忘れていた。

「『』飯をつくってきますね

そういうことなので、マリアとハヤテは屋敷へと帰つていった。さすがに使用人ということですぐにダメージのことはどこかへ行き、

仕事スイッチに切り替わった。こじら辺は一般人とは違つといひだる。

泉たちとしては帰つて欲しくなかつたが、さすがに仕事といつてでは仕方なかつた。自分たちの「飯もかかつてゐるわけだし。

ところ」と残りは5人になつた。ちょっと何かするに多すぎか少なすぎかという中途半端な人数だ。

「何しようか~」

初めはそんな話をしていたが、結局やることが見つかれば自然と各自やりたいことをおくまにするという感じになつた。

まとまりがないとよくなる典型的パターンだ。

リーダーの代名詞ヒナギクはどうしていたのかといつて、まだダメージから立ち直つていなかつた。いろいろと上の空状態だった。

「あ、～もう、なんなのよ!~／＼／＼／＼

こんな感じです。

そんな感じで、三人娘はまた海遊び、ヒナギクはそれどころじゃないので休憩、ナギは暑いのがいやなので木陰で涼んでいた。

「まったく、紫外線を浴びて肌年齢を上げて何が楽しいのだ」

そんな曲がった考え方で何が楽しいのかこっちもわからないが、とりあえずナギはSO-Yのノートパソコンのクリアブラック液晶を楽しむことにしていた。

「香霖堂の裏の桜が異常に白くなっているぜ。あれの方が危険な異変の様な気がするんだ」

液晶のなかのショーティングゲームのキャラクターはそんなことをしゃべっている。ちなみにボイスは無い。なつかしいインベーダー式だ。

ナギは相当やりこんでいるようで、敵の弾幕をいともたやすく潜り抜け、確実にダメージを与えていく。ゲームパットなしで出来る極

限レベルを獲得していた。

その技は思わず見とれてしまふほどもので、ちよつと気晴らしに移動途中に偶然見つけたので見に来たヒナギクも同じく画面に釘付けになっていた。

「よーし、クリアした！」

はアー、つとナギが大きく安堵の息を漏らすと、つられてヒナギクもはアーっと息を吐いた。

「どうだヒナギク、私の腕は！」

何回か失敗したステージだつたからクリアできたのがよほど嬉しかつたのだろう、柄にもなく声を張り上げて自分の腕を自慢している。

「すごいわね、でもそれの努力をもう少し勉強に向けられたら良いのにね」

正論である。しかし、その現実的な台詞がナギを我に帰らした。

「つぬおおおおー・ヒナギク！…いつからそこにいたのだ…！」

パソコンなんてほっぽりだし、後ろに飛んでいった。集中していた証拠だろうが、まったくヒナギクの存在が脳に伝わっていなかつた。戦場だつたら死んでいるところだつた。

ナギは液晶が割れて無残な姿になつたノーパソ姿なんかはまったく気になどせず、なんでそこにいるのかとか、そんなことをヒナギクに言いつけているがヒナギクはまったく聞いていない。

作者的にはそのノーパソに何をしてくれたんだと叫びたい心情だが、金銭感覚の違いを理解しているつもりなのでそこは我慢しておきます。

でも、やっぱりお金持ちなのかヒナギクもノーパソには触れずに話は進んでいった。

期待を裏切つてみました

さて、今回はなかなか更新できなかつたので長めに書いてみます。これを書く暇があるなら本編を進めるとかいうシンデレな突つ込みはなしにしてください（笑）

まあ、更新が遅れた言い訳をしますと、まだ引いた風邪が治らなくて夜執筆できないことが最大の原因ですね。他にもあるのですが書くときりが無いので興味のある方は個別にお答えします（笑）

とりあえず、時間と暇と体力が無いのでなんだかこんな話になりましたが、これから実は作者も忘れていたイベントがある予定です。多分作者が忘れなかつたらそのうちおきます。それまでは軽く読み

流しちゃってください。

それでは、発作が起きる前に寝てしまつのでまた今度！

「これからずっとそういうことになるつもりなの？」

ナギの暴走なんてヒナギクには関係ない。猫が喧嘩してくるようなものだ。

ナギの必死の抵抗もいつも通りの態度でそつなく話していく。

しかし、それはナギには不愉快だった。なんだか馬鹿にされている、といふか見下されている気がするのだ。周りから見たら見下されていると断言できるのだが、そこは自分のことなので今のナギには理解できないということにしてもらいたい。

実際、年のもずいぶん離れているので高校生が小学生を見る目になつても致し方ない気もするが、微妙なお年頃ゆえ、些細なことも気になる。そこは理解してあげよう。

「もー、ううさいなあ。私はいま忙しいんだ」

抵抗が無駄だと分かったので、どこから出でてきたのか新しいノーパソを抱えてどこかへ行くこととした。

これ以上負けっぱなしでいるのはつらい性にあわない。いろいろするのでいつこうときは某巨大掲示板サイトでうどりを馬鹿にするに限る。

そもそもヒーパソは手に歩き出すと、ヒナギクに手をつかまれて止められた。

「せっかく沖縄に来たっていつに何かしないともつたいないわよ？」

ヒナギクはどこまでも純粹な心の持ち主だ。せっかく遠くまで来たんだから楽しまなかつたらもつたひない、そんな一般人の考え方がいい。

しかし、その言葉はヒーパソには不快だったりじへ、

「私が屋敷からこんなに離れたところに来たんだ！ 何もしないで帰るわけが無いだらう！ …！」

と、不機嫌に怒鳴りつけた。

しかし、ヒナギクはそんな状況においても今の言葉に令込まれるキーワードを聞き逃さなかった。

「じゃあ、いったい何をするつもりなの？」

それを聞いてナギは我に返った。

沖縄に来て何をするのか・・・それは自分でひつやつとではあるが、ずっと前から考えていたことだった。沖縄とこう条件 자체は最近ぱっと思つたことだが、これからやうつとしてこることはずつと前からこいつかしなくてはとずつと考えていたことなのだ。

それはとっても重要なことで、ヒナギクがマコアにすり話していな。自分でだけの秘密だつた。

それがなんとこい! とだらつ・・・・・いつも簡単に口が滑ってしまつとは! ! !

「こやつ、別に大したことじやないんだ。そんなことよつ・・・

とつあえず必死に話をそらすとしたが手遅れなのは自分でも分かつている。必死さがあだに出て焦つていてるのがバレバレだ。いついうときこそ冷静にいなければならぬ。

いつなつたら後はない。ヒナギクも興味を持ったらしく引いてくれやつに無い。むしろどんどん押していく。

いつこでナギは簡単に追い詰められた。

「やつ、白状なさい」

なんてドウなやつなんだ・・・

ナギはそんなことを考えたが、それで状況がどうなるわけでもない。

仕方がない。こつなつたら少しだけ適当なこと言つてこの場を切り抜けるか・・・

「本當はマリアとハヤテとだけで来るつもりだつたんだが・・・まあ、それはいいか。

実はな、ちょっとハヤテに話があつたんだ。ちょっと重要なことだからふたりつきりになれそつなとこに行へることにして、それでいま沖縄にいる」

このとき、ナギはヒナギクの様子の変化を見逃さなかつた。

”ふたりつきり”とこつワードを聞いたとき、わずかだが動搖したよつな感じだつた。

ナギにとつてこれはチャンス以外の何者でもない。

「今だ！」

その一瞬の隙を突いてナギはこの場から逃げ出した。ベン・ヨンソンもびっくりする速さで逃げ出した。

「あつ、こらつ！待ちなさい！――！」

しかし、油断していたせいで、ヒナギクが追いかけようと思つたときにはすでにナギの姿はなかつた。この逃げ足に使つてゐる体力を普段使えるようにしたらきっと常人以上の体力はあるだろうに、どうしてこんな無駄なことにしか使わないんだろう。

そんなことも考えながら、良く考えれば追いかける理由も特に無いことに気づいた。

「まったく・・・あんなに必死に逃げることもないのに・・・」

本人は気づいていないが、ダークフォースをメラメラ出しながら攻められたら誰でも逃げたくなる。気づいていないところがさすがドS（ナギ談）。

なんとなく悲しくなったヒナギクは、とりあえず、座つて木によりかかった。

日陰の外では、かんかん照りの太陽が砂浜を焼くように照らしている。しかし、意外にもこの場所は日陰で風通しが良いせいか快適だった。

「案外こうこう生活も快適ねー。こうこうのも幸せかも・・・」
つて、何を言つてるの私!?!? しつかりしなさい!?

「いつ、いつも世界が平和で快適だと甘い考えに浸りそうになる。これが世の中の怖いところである。これに打ち勝てなければ……。

待っているのは死のみである。

「危ない」というだつたわ……。

「なんどいりでナギは何を考えているのかしり」

平和な世界では、時間はほととぎ自由に使える。しかし、いつこう状況下では何もすることが無い、俗に言つて、『暇な時間』が出来ることが多い。

そういう時は、人は何か考えること以外にはやることはない。

ヒナギクもそれで危ない思想に走りそつになつたわけだが、ナギは学校に行つていないときのこうこう時間はどういうことを考えているのだろうとヒナギクは思つた

のである。

「そういえば、ハヤテ君に何か話があるとか……。

ナギがハヤテにしそうな話……いくつか例を上げてみた

1：新作のゲームの話

2：自分の漫画の話

3：同人誌の話

4：アニメ関係の話

・・・・

・・・・

「大事な話・・・じゃないわね」

こんなことしか思いつかない自分に愕然としていると、頭に何かぶつかってきた。良く見るとビーチボールのようだ。

「あ～、ヒナちゃん、こめんこめん！ボールとつて～」

三人娘たちのものだつた。

といふか、さつき頭にぶつかつたときやけに強く当たつてきた。痛くは無かつたけどきつとあの三人の誰かが狙つてぶつけたに違ひない。

そう確信するとなんだかいらだつてきた。

「あんたたち！ わざと狙つてぶつけたでしょー！」

そつ言いながら走つて向かうと二人は逃げ出した。これはもう事実で間違いないようだ！

「待ちなさいー！」

こうして四人で仲良く（？）遊んでいるうちに、時間は夕暮れ時になつていた。

35話（後書き）

お久しぶりです。本当に久しぶりです。

えっと、今回の言い訳はと、前回と同じく風邪です。しかも

全快の風邪をまだ引きずっとました。

とりあえず、それも治り、テストも終了したのでまた執筆を開始します。個人的に待たせている方もいるので早く書きます。できるだけ。もうダッシュで。

だからそんなに物を投げないで下さい……

怒らないで……

・・・

なんて、皆さんがそんな野蛮な方だとは思つてませんがwww。それではまた！

See you

「うーん…今日も楽しかったねーーー！」

みんなで夕食を食おわり、とりあえずリビングに集まつてゐる。屋敷はとてつもなく広いので部屋はいくつもあるのだが、なぜか分からぬがリビングに集まると

いつのが習慣となりかけていた。

「そして、今からもつと樂しくするのだーー！」

田の家の中にこもりがちなお嬢様方三人娘は、慣れない直射日光で焼けた肌の痛みなんかすっかり忘れて次なる遊びに取り掛かる。相変わらずハイテンションだ。

当然のことく、ナギは田向にいなかつたので焼けていないが、なぜかヒナギクも平然としているのは誰も気がつかなかつた。

三人娘は各自持つてきた鞄からおもちゃを取り出し、どれにするか決めている。ちなみに鞄の中身の80%は遊び関係だった。ところのお嬢様方にはもつと他のもの

もあるかと思うが、彼女らの娯楽への執着心は並ではない。比喩で表現するならばその大きさは北極星にもなづ。

まあ、そんなことはどうでもいい。こついう時だけ機敏な動きをする三人娘によりもうゲーム大会開催が宣言された。

「さあ みんなのものー今夜も遊びつくせうぞーー。」

「・・・・・」

右は・・・・誰もいないな

左は・・・・いないな

上は・・・・いかんいかん、この前メタ ア4やりすぎたせいか
そんなことまで考えてしまうとは。バーチャルとリアルは区別せん
とな。

皆には・・・・気づかれてないな。

金髪の小さな少女は忍び足で、誰にも気づかれず、その場から消え
ていった。

いや・・・・

一人だけ気づいていた。ヒナギクはその扱一した能力のおかげで気
づいてはいた。だが、

「おこヒナ、よや覗かぬなよ。黙審飛ばすぞ~」

すぐに注意が他に行き、そのままそれを思い出すことはなかった。

「今日も畠さん楽しそうでしたね」

変わつてここは調理場。ハヤテとマリアはここで後片付けをしている。いつもはハヤテ一人でやるところだが今日は人数が多いので二人で手分けして作業している。

ちなみに、三千院家が出すような料理は無駄に皿を使うので皿洗いは一般人には意外と大変だつたりする。

しかし、そこは三千院家使用人。一般人なんていないのだ。一人とも慣れた手つきで目にも止まらぬ速さ・・・は言いすぎだがさくさくと進めていく。

「お皿洗いはいくら手馴れていても時間を短くはできないんですよ。汚れは時間をかけてしつかり落とさないと一流の使用人とは・・・」

「誰に言つてるんですか、マリアさん・・・」

マリアは慌ててまた作業を始めた。人のしゃべつてる途中に勝手に入つてくるからですよ。

「ほら、そんなことするるからハヤテ君に気味悪がられますよ。

「そういえば、家の中で普通にメイド服を着ていられるのは心をやつてしまつてないと出来ない（ ）とか・・・」

ハヤテ君・・・そんなこと思つてたんですか（怒）・・・・・

その瞬間、確かにハヤテは不気味な音を聞いたという。プチッといふ何かが切れる音を。

「ハ～ヤ～テ～く～ん？」

「ガ～ガ～ガ～ガ～」

そんな音なつているはずはないのに変な音が聞こえる。

あるはずがないのにマリアさんの背後にダークフォースが見える。

「あら、ハヤテ君も何言つてるんですか？ そんなものあるわけないじゃないですか。ハヤテ君、心が病んで『し、失礼しました！』！」

「

ハヤテはマリアの攻撃に耐え切れず逃げ出してしまった。とにかく

全力で、マリアから遠ざかった。

まあ、迫力もすごかつたし致し方ないだろう。

「あつ、まだお片づけ終わっていなideすわ・・・逃げるタイミングが悪くないですか・・・」

マリアは後からそんなことに気づいたが、もうハヤテがどこに行ってしまったかなんてわかりっこない。きっとマリアの視界に入らなければどこか遠くに避難しただろう

。

「仕方がないですね・・・一人でやりますか・・・」

自業自得だといふことは一切認めず、一人さびしくまた作業の続きを始めた。

「まったく、一人は何をしているのだ？」

ナギがこいつそり一人をのぞくと、なにやらハヤテがマリアにいじめられていた。

これ自体はハヤテのことなのでまた地雷踏んだなと納得できたのだが、そのあと田にも止まらぬスピードでどこかに走つていったのだ。あまりの速さだったので隠れ

損ねて鉢合わせしたのだが、ハヤテはそうとう必死だったようではナギに気づかずにそのままどこかへ走り去ってしまったのだ。

ハヤテに用があつてきたのに、肝心のハヤテがいなくなつてしまふ

うがない。

「まつたく、仕事中に遊んでるなんてたるんでもるなー・東京に帰った
らまた一から教育しなおさねば」

そんなことをつぶやきながら、ナギもハヤテの後を追つて屋敷のどこかへ消えていった。

【リックス16巻参照のこと】

36話（後書き）

いい加減更新しなくてはとは思つていても意外とかけてない隣のマニアです。

レコードティングでPCを使つていて意外と書く時間が取れないこのじうじです。

それでは！

37 話（前書き）

最近コードギアスにはまっています

News

新作投稿しました！

URL : <http://nocode.syosetu.com/n>

7236e /

「はあ、また人を怒らせてしまった・・・」

全力でマリアから逃げてきてたどりついた場所、もつともマリアから遠く天に近い場所。分かりやすく言つと屋上にいる。

優しくもさびしくもあるつべの光に照らされて、ハヤテは遠くを見つめながら反省する。

「いつもいつも怒らせてばかり・・・ヒナギクさんもお嬢様も、絶対に迷惑をおかけしてんだろうな」

ハヤテだって能天気に毎日生きているわけじゃない。反省をして、次はこうならないようにがんばろうと思つ。けれどもなぜかいつも怒らせてばかり。

そもそも、なぜ怒ったのかわからない場合が多い。それに気づけない自分が悔しかった。

「僕つて、鈍感なのかな・・・」

深くため息をつくと、突然後ろから声が聞こえた。

「まったくその通りだよ」

後ろを振り向くと、汗だくなつたナギがいた。まったくいつからいたのか分からなかつたが、それよりもなんでそんなに汗だくなのかが気になつた。

「ハヤテがあんなに急いで走るから、その後をついて走つたらこれだよ。屋敷の中だつて広いんだから私のペースを考えて走るべきだろ」

なんで走つて今までこんなところへ来たんだらう。

また新しい謎問が生まれた。さつきまで畠と一緒に遊んでいたはずなのになぜここにいるのか。そして何をするのか。

考えたところであつたく分からぬ。いつもの地雷パターンといつしょだ。

「それだからハヤテは鈍感だつて言つんだよ」

ナギは海が見えるほうへと歩き出した。ハヤテもそれについていく。

「女の子って言つのは、とても纖細で、男の子が思つてゐる以上に

いろんなことを考えているんだ。わかるか？」

それはわかっている、わかっているつもりだ。昔は、それができなくて、大事な人を傷つけて、怒らせて……

もうこれ以上なにも失わない

そう決めたのに

「だ・か・ら、それだから鈍感だつて言つてるんだよ」

何を言つているんだろう。さつぱり意味が分からぬ。

「がんばつて他の人を考えているのは誰から見てもわかるさ。でも、そうやって必死になつて逆にお前は表面しか見えていないんだ」

表面だけ・・・・・

そうなのかもしない。いや、さつとそういうなんだろう。本当の気持ちは表情じゃなくて心にあるんだ。

今まで心の奥底でつつかかっていたものが取れた気がした。いままでどうしても気づけなかつたことによつやく気づいた気がしたのだ。

「まあ、それって難しいことなんだけどな。ハヤテは特にそれが苦手だからさ」

「じゃあ練習問題だとこいつハナギは言った。

「私のハヤテへの気持ちは分かるか？」

これは練習にしてはちょっと難しい問題だ。ハヤテからしてみればいつも突然怒り出したり女装させられたりまったくわけの分からないうことをナギはしてきているの

だ。もちろんそのときのナギの考えていることなんて分かったことがない。今でも良く分からない。

それでも大体は予想できなくもなかつた。

一緒に初日のお出を見に行かせてもらつたり、自宅の遊園地にも行つた。ゲームだつて最近はお相手をさせてもらえるレベルになつた。

まだまだ至らない事だらけだけど、いつかは”家族”のような存在になれたらいいなと思っていた。

「まだまだだけど、家族……みたいな感じに受け取つてもうれていれば光栄です……」

それを聞くと、まるで分かっていたかのようにやつぱりなとナギは
言った。

「まだまだだな・・・私はな・・・お前が・・・・・・」

そのとき、確かにナギは何か言つていた

聞けたはずなのに、それはできなかつた

下の階でトランプをしていたはずの皆が突然現れたから

「――ヤ――――!――美希ちゃん――未成年が見てる
この小説でそれはまずいつてばああ――!――!――!――」

屋上へと続いている扉を力ずくで押し開け、壯絶な叫びと共にまず三人娘が現れた。

どうやらトランプで負けた罰ゲームで泉がいじめられているらしい。とってもはしたない格好になりかけた泉が助けを求めてやつてきた。泉の左右に取り付いた美希と理沙が思いつく限りのいたずらを泉にしてかしている。

けつこうやばめの格好の泉は最後の見方、ハヤテにしがみついて一人を追い払つてもらつた。

「おおい…お前ら…なんでここにいるのだ！」

この予想外の展開にナギは大慌てだつた。誰にも聞かれていないことなんて大前提で話していたからだ。しかも、せつかく考えていた雰囲気が台無しだ。

しかし、ナギのそんな思いなんて微塵も知らず、世の中は無常にも

勝手に回っていく。

「さあハヤ太君、泉をこっちに渡してもらおうか」

ゲーム大会をやっていたこともあり、皆いつもよりテンションが上がりしている。もうナギなんて視界に入っていないし、面白そうな展開が始まった今、美希と理沙の

やるべき」とは決まっていた。

ハヤテはもちろんダメですよといったが、そんなことはとっくに予想済みだ。

「それとも、やつぱり嫁は私たちになん渡せないか?」

んつ ¥ () / ひや！？ / / / / /

理沙の鋭すぎる攻撃にハヤテは対応し切れなかつた。言葉にならない叫びが台地を伝わつていつた。

ハヤテとしては、泉は守つてあげたいけれども、そうすると理沙にいじられること間違いないし、でも泉を一人に渡すのは人として許せないし・・・

ハヤテが頭の中で葛藤しているとき、階段からマリアとヒナギクが現れた。急に皆飛び出していったのでついてきたといったところだ

れい。

このとき、ハヤテは名案を思いついた。

(マコアさんに頼りついー。)

しかし、それはバッジエンドフラグ発生ポイントだった。

マリアさんが視界に入ると、すぐにハヤテは駆け寄つて助けを求めた。経験が豊富なマリアさんほど頼りになる存在はない。しかし、返ってきた答えは冷酷なものだった。

「ハヤテ君がメイド服を着ればいいんじゃないですか？」

「・・・マコアさん、お酒入ります?」

普段のマリアからは想像も出来ない答えが返ってきたので、思わず思ったことがダイレクトに口からアウトプットしてしまった。

今のマリアさんはトランプ大会で優勝してとってもハイなのだ。顔には出ないが心は躍っているのだ。ハヤテはそこまで読みきれなかつた。

プチっ

確かに、ハヤテはこの田一一度田のこの音を聞いたといつ。

「誰がお酒が入ってるですって、ハヤテ君？私、17歳なんですよ？未成年なんですよ？」

いつもの癖でまた大人っぽいとこいつことをしてこいつもこいつの発想がいけなかつた。もう完全に怒り狂ひて閉まつたようだ。いつもこのパターンになると必ずハヤテ

ではどうあることもできなくなつてゐる。

今回も例に漏れず、マリアは不気味な笑みと共に、何か名案を思いついたようだつた。

そしてすぐにはじめにあるものを手配させて、それを手に持ちハヤテを捕まえて皆に高々と宣言した。

「せへ、皆さん。ハヤテ君にこれを着せますよ～」

せつゝより冷酷になつたマリアさんスマイルだけがハヤテの視界に入つた。マリアの手の先にある服は怖くて直視できなかつた。

「せへ、ナギちゃんも手伝つよ

黙つて見ているしか出来なかつたナギも、いつの間にか着替えを手

伝わされていた。

「キヤー…………」

ハヤテの悲痛な叫びは、深夜まで続いたといふ。

37 話（後書き）

マーティア Select bad end 1

「ハヤテ、お前が好きだ」

とこつのはまだ早い

「はあ、昨夜は疲れた・・・」

あれから、ずっとお着替えの人の人形役をさせられていたハヤテだが、今回はいつも以上にバリエーションが豊富で、ゴスロリ、巫女、和服、コスプレなどよくもまあ、こんな集めたなといつまどじだつた。

深夜遅くまでにぎやかに進んだわけだが、いつの間にか皆寝ていて、仕方なく笛を運んであげたわけで、当然一番遅くに寝たわけで、当然執事が寝坊するわけもなく、当然一番寝不足なわけだ。

無理やり着替えさせられた服などがまだ散乱しているので、まだ皆が寝ている横で片付ける。

服を見ているだけで昨日の様子を思い出すので素早く済ますことにする。なかなか悲惨でおもしろいことになっていたのでハヤテと読者さんの許しがあればすぐにでも載せたい。

「もお、何変なことこいつてるんですか!」

怒られてしまった。でも面白かったのになあ。

まあ、そんなことはどうでもいい。ハヤテが大声を出すから皆があきらめになつてこる。

おっとい、美希が何か言つてゐる。

「さあハヤ太君、最後はこれを着てみようか」

美希の手に握られていたのは・・・・・・もはや服ではなかつた。
・・・隠すべき最小限しか覆われない、服といつばや詞が当てはまらないものだつた。

「い、ゝゝゝ嫌だ――――――」

ハヤテはそれを見ると真つ先に逃げ出した。まあ、しょうがないだろつ。

だが、

「ん～、逃げたら駄目だ・・ん～、むにゃむにゃ・・・・・・」

美希はまた寝息を立てていた。要するに、さつきの寝言だったのだ。迷惑な寝言である。そうだと知らず、ハヤテは全力で逃げていつてしまつた。本当にビームでも不幸な少年だ。

こんな感じで、沖縄最終日の朝は始まった。

この日は、東京に帰るのがあまり遅くなるわけには行かないの日が暮れる前にはここを出発することになつていて。ただ、最終日だけあつて完全にフリーにしてある。予定があまり機能していなかつたのでフリーはいつもと同じかもしだれないが。

海は昨日実際はそうではないが嫌になるほど遊んだし、また遊園地に行くのも微妙である。だから、今日は自分たちで何かをして遊ぶ日といつことなのだ。

と、いうことで、朝ご飯を食べ終わつたところで皆で作戦会議が始まった。

ところが、遊びのプロフュッショナル三人娘も今日はいいアイディアが思いつかないところまさかの事態が起じた。台風でも来るんじゃないだろうか。

「我々もこつも遊んでいるわけじゃないからな

「私たちの本性がでてしまつたな」

なんて嘘を言ひてゐるが、ねたが尽きてゐるのは本當らしかつた。なので、美希はとりあえずナギにでも振つてみた。別にいい答えが来るとか期待したのではなくなんとなく振つてみたのだ。

そうしたら、予想外の好回答が帰つて來た。

「コイの話でも・・・する?」

えつーーとこづかわめきが部屋に響いた。それもそつだらけ。まさかナギからこんな修学旅行で普通の女の子が言つたような言葉が出てくるなんて誰が予想していよ。あのマリアさんですら開いてしまつた口を手で押さえている。

でも、これは結構いいかも思つた。もともと何もねたがない上、外で思いつきり遊ぶほど時間もない。朝っぱらから話すこともない気がするが、きっと盛り上がることだろう。

とこうじで、反対ゼロでコイバナ大会が開催されたことになった。

「さあ、ついにやつてまいりました、三千院家主催、第一回コイバナ選手権が開催されます！」

「偶然居合わせた七人のアスリートたちによって激しいバトルが繰り広げられます！」

「解説は私、朝風理沙と」

「花菱美希でお送りいたします」

つながつはないけど一応本物のマイクで実況が始まった。雰囲気を盛り上げているわけだが、その一人も選手なので油断は出来ない。むしろ、一人は大会から逃れるために実況をやつしていると思われるが、このメンバーではそれは通用しない。この二人の選択が今後どう出るか、どうにもならないのか、今後に期待がかかる。

一応大会なのでルールがあるので説明する。いたつて簡単なので読者の皆さんも覚えてお友達やご家族、兄弟姉妹でやってみるといいでしょう。その先の結果は責任を負いかねますが。

最初に各選手をいこるを二回回し、出た目の一番小さい選手から時計回りに回していく。

初めの選手は、自由にどんな話からでも切り出してよく、ある一定（ある程度恋話が局面に達するところ）のところでのところで、次の選手にパスする。パスするタイミングは自分で決めてかまわないが、回りの空気を考えて行うこと。

次の選手は、自分の前の選手の話の最後から連想されるところから話を始める。こちらもパスするタイミングは自由。

これを繰り返し行い、ねたが尽きた人が外れていき、最後まで残つた選手が優勝となる。

今この場で考えられたルールなので多少の無理はあるかもしけないが、とりあえず今回はこれが適応される。

とことことで、さっそくルールに則つて、

『ダイス ルール!』

皆で仲良くサイコロを振った。用意された台の上をコトコトと小気味良い音を立てながら次第に回転を弱めていく。まさしく運試しというふざわしく、逆らいようのない何かによつて数字が決められていった。

さて、一番数字が小さかったのは・・・・・

「あれ、これってなんて読むんだ」

美希だった。彼女の手には”1”を示したサイコロがあつた。『愁傷様です。美希の額には今までに見たことがないくらいの冷や汗が浮かび上がつていた。そうとう焦つているだろう。

「これ（一）つで、7だよな。一番大きい数だよな？」

しかし、いいえ違いますとこいつ田が皆から向けられた。もつ逃げ場はないようだ。

「さあ、さあわあわあー。」

追い詰められた美希の明日はびつちだー？

お久しぶりです、皆さん。

ここでひとつお知らせがあります！

なんと、この小説も先日1,000,000HITを達成いたしました。
現在は1,020,000HITほどです！

これもひとえに皆様が読んでくださっているからです！ありがとうございます。

ということで、10万ヒット記念に以前からプロットだけあった未発表作品

「ハヤテのなく頃に」（ひぐらしのなく頃にクロス）
を記念に一部期間限定公開することにしました！

ひぐらしを知らない方でも楽しめるものにしてあります。前半部分
のみの公開ですが、是非楽しんでいただけたらと思います。

次回投稿時に掲載予定です！

それではまた！

ありがとう20万ヒート！特別読みきり ハヤテのなく頃に プロローグ（前書き）

この物語は「初恋物語」とはまたく関係ありません。
全く別の物語です。

ありがとう20万ヒート！特別読みきり ハヤテのなく頃に プロローグ

ハヤテのなく頃にの掲載は終了いたしました。
感想等がありましたら、感想または作者メッセージから送つていた
だけると嬉しいです。

せっかくですので、この話を書こうと思つた経緯を書こうと思いま
す。

漫画版、ひぐらしのなく頃にシリーズは全巻そろえているのですが、
もともとアニメをみていたのですが、アニメで省略されていたところ
が書いてあり、またヒグランシという作品のすばらしさを体感しま
した。

原作ももっていますが、残念ながらプレイしている時間がまだ十分
に取れていません。

そんなわけで、とても奥深い話に深い感動を覚え、この感動を私の
作品でも再現できないかと思い、書いてみたのがこのハヤテのなく
頃にです。

今回投稿したのはプロローグ部分のみですが、アバウトにですが最
終回までできています。ただ、原作並みの完成度を出せているかと
いうと、否です。

もっと煮詰めて、もっと奥深く出来れば、連載するに足りると思い
ますが、現時点では時期尚早だと判断したのでお蔵入りしていたの
ですが、せっかくの20万ヒートということで、書き直しながら
投稿させていただきました。

プロローグだけでは、これから展開等がわからないので、正直な話よくわからないかもしだれませんが、オリジナルの展開を含んだ形となっています。

作者自身は、この話をとても気に入っているので、フルにいつかは掲載したいなと思っています。

そんなこんなでしたが、いつまでもプロローグを掲載していても仕方がないし、そもそも初恋物語とはまったく関係がないので、期間限定とさせていただきました。

しばらくは、初恋物語を完成させるほうを優先して、もっと頻繁に更新できるようにがんばっていきます。
これからもよろしくお願いしますね！

「ハハハ……」

めずらしく本当に困っている美希がそこにはいた。もちろんそんな滅多にない光景を二人娘のメンバーたちが見逃すはずがない。きっと執事あたりから手配されたであろうカメラをパシャパシャと容赦なく光らせる。

しかしまあ、困った姿の美希もなかなかかわいいものがあつて、さらにはカメラのシャッターを押すスピードを加速させる材料となっていた。じやつかん頬を赤らめているところがまたいい。

「あれー、美希ちゃん？ もしかして恋の話、ないのかなー？」

いつもと違う美希を前にして若干テンションがあがっているらしい泉が、いつもよりも強めに美希に仕掛けてくる。その姿はなんだかリミッターが外れた子供のようなんだか怖い。

(くそつ、何で私がこんなめにーいや、待て。今は冷静になるんだ私。今はどうやってこの場を切り抜けるのが重要だ。泉の挑発に乗つて変なことでもしゃべつたらそれこそあっちの思つ壺だ！ 考えるんだ私！)

「あれー、変なことでもしゃべつたらって、しゃべれること、あつ

たつて」とー？」

やってしまった。モノローグのつもりが声に出でてしまった。何でこういうときに限ってドジが出るのか。自分を恨んでも恨みきれない。つていうか、なんで自分がこんなことになつてているのだろう。今までそんな罰を受けるようなことを私はしたのか、いや、してないだろう！（しますよ）だいだいいつも私はみんなの笑いの為にどれだけ自分を犠牲にしていることが皆分かっていないんだ！（楽しんでるだけです）私がうづうづじしてた理由なんて何もないじゃないか！

「あー、あるともー私も健康な一女子高校生だ、体をもてあります事だつてあるわー！」

キラーン

待つていましたといわんばかりに泉と理沙の目が光った。いや、実際には光つていないが、何か視線から殺氣というか、それに近いものを第六感で感じ、視覚が具現化したとつたところだろうか。

話がそれだが、二人はこの瞬間を待ちわびていたのだ。美希がぼろを出すそのときを。じつと地道なつみあげを繰り返して。その達成感と喜びに満りつつ、新たな展開を想像して二人の表情はさらににやけていく。

反対に、美希はというと顔が青ざめていた。たとえるならラーメン屋の店長が客にラーメンと間違えてそばを出してそれに気づいた瞬間くらい青ざめていた。もつと分かりやすく例えるなら、外で働かなくても儲けられるじゃんとかいつて下調べなしで始めた株取引が、最終的に200万の赤字になつた二トくらいだ。

「ハヤテ、ああやつて熱くなりすぎて人生に失敗するやつって結構いるって聞いたが、あながち嘘じやないのかもな」

「うるさいわ！」

あまりにも痛いところをナギに突かれ、柄にもなく声を張り上げることくらいしか思いつかなかつた。っていうか、本当にそういう失敗をしないようにと心中で誓つたくらい本人はさつきのことを反省している。

さて、こんな感じでナギと戯れたりして時間を稼いで見たが、どうやらそろそろ限界らしい。ついに壁に隅に追い詰められてしまつた。

「さあ、さあさあさあ！」

こうなつたら話すしかないのか・・・
あれを・・・

「分かった話そつ」

重い口を開いた。

「あれはずつと、ずつと前のことだ。ふつ、私もまだそのころは未熟でな、不覚にも男子に揚げ足を取られたりする場面があつたんだ。ふつ、未熟な私はまだ反撃するすべを身につけていなかつた・・・いや、身につけていてもそれを実行できるほどのスキルを得ていなかつたんだ。

そんな時だった。そいつはどこからともなく見ず知らずの私をかばつてくれた。それどころか圧倒的に人数の多い敵をけちのめしてしまつた。そのときだった・・・私が始めて人というものを意識したのは・・・」

おーという声が上がつた。しかし全員からではない。テンションが上がりまくつて頭が回つていない泉とともにあまりじちらには詳しくないマリアやナギからだつた。

「美希ちゃんす」ーー！それでそれでーー？」

それについても泉がハイテンションだ。こいつテーマだから乙女としてやはりモチベーションが上がるのだろうか。そんな泉を押されて、

「もうこれで終わりでいいだろ？ 私としては結構しゃべつたんだ。交代してくれ」

事情を知っている方ならばこれがこの場にいる誰かを指していることにお気づきだろうが、わかっていない泉には真新しい情報が入つ

てきてるも同然だ。とついで満足したとついで交代OK
ということになつた。

「うふと美希、じうことなのよ」

やつと開放されて、美希が騒ぎの中心から帰つてみると、ピンク色の美しい髪の少女が話しかけてきた。

「いいじゃないか、なんかそれっぽくなつたし。泉もなんか妄想を繰り広げて信じ込んだし。まあ、嘘じゃないだろ?」

「まあ、それはそうだけど・・・」

今となつては遠い昔のことだが、そのころから二人はとても仲が良かつた。今もそうだが、なんとなく歯車がかみ合う存在なのだ。それを少しでも意識しているからなのか、一人の顔は少し赤くなつていたという。

まだまだ続きます」のシリーズ。
次に犠牲になるのは・・・・（笑）

1 / 2 6

なんだかなかなか更新できていないのでちょっとと思いつきで書いた
短編をひとつ書きます。くだらないので飛ばしてしまってもOKな
感じです（笑）
暇つぶしこじうぎ。

短編：マジック

「ハヤテー、ちょっとセレーノ取ってくれ~」

三千院家はただいま調べ学習の真っ最中。自分の気になることを調べてみんなの前で発表する例のあれだ。

なぜ学校嫌いの凪がそんな面倒くさいことをやっているかといふと、

「このひょうの発表はね、意外と授業態度に響くの。今度の発表に出ないといへりテストが良くても授業態度の欄、Aから下げるわよ」

と成績を人質に取られたのだ。負けず嫌いの凪なので、すべてAでないとヒナギクに敗北したことになるらしい。ということはただいま全力投球中。こういう無駄な努力をもつと普通に使えていればもつところの子は偉くなるに違いない。

「ホレ凪、そこ書き漏らしがあるで」

ちなみに、偶然遊びに来た昨夜さんもお手伝いの中。とこりても「こんな様に指示をなんとなく出すだけだが。

「あー、疲れるなー。こいつのことをすべてデジタル化してパワーイントド・・」

「そんな事言つてなごで早くせりてしまわないとダメですよ、お嬢様」

珍しく凪が精を出しているが、あまやかしてばかりでは一流の執事にはなれない。きちんと注意もしなければ。

そんな感じののどかな田。室内には窓の近くの木に止まつた鳥の声が響き渡る。

「あ、字がかくれてきた」

もくもくと作業を続けていたところ、ビツヤーハジックペンのインクがなくなってきたらじしく字がかくれてしまつた。

「おー、凪ががんばった証やな」

田に見える努力の成果があつてうれしいのか、めずらしく昨夜の言葉で満面の笑みを浮かべた。
さて、それじゃあ新しいペンでも見つけてまた書き始めよつかと近くに散らばっていたマジックをあわる。

「あれ、黒がないじゃないか」

「ひつやうり偶然黒を切り出してみたんだ。」
と、そこへひょいといい具合にハヤテがお茶を持ってやつてきた。
「これでペンを頼まずにどうして執事が必要だらうか。いや、ハヤテ
の主であらうか。

「ペンが出なくなるほどの努力をした気分のよが残つていて、とて
も済んだ気持ちで高らかに言つた。

「ハヤテ、マジック！」

「・・・耳が痛くなつたやつた」

・・・・・

とあるのどかな一日だった。

どうでしたか？久々にやつちゃつた作品でした（笑
ちなみに、実際にこれをやつた人がここにいます（それでこの小説
を書く気になりました

「で、次の人は……」

美希による熱もさめてきたところであらそろゲームの続きを再開する。なんだかわいせつの様子はゲームをやつていてるような状況ではなく、半分いじめが入つていてる氣もあるが気づかなかつたことにしよう。

ゲームのルールでは、時計回りに回つていくことになつていて。指名にすると悲惨な事態に陥る可能性があるからだ。それで、美希の右側には誰がいるかといつと……

「あら、私ですか？」

マリアさんだつた。

「なんですよーー!？」

マリア当たつたとわかつた瞬間、ほぼ全員の顔に焦りの影が見えた。なぜかつて?マリアさんに恋の話などできるはずがないからだ!17歳にしてメイドをするというありえない生活がら、恋愛など一一の次だつたのだ。もちろん、それは周りの人間は誰もが気づくことなわけだ。

なんだか悪口を言われていくよつだとマリアは気づいたが、まあ、

自分で自覚しているらしく、口に出して反抗するのはやめたようだ。
ところが、今更ながら、ここにいる全員が恋話などあるのかどうか
疑問に全員がぶちあたつた。この企画は間違いだったのではないか。
・・・

しかし、今からやめるというのも何か乗り切らない。やるしかない
か。それに、意外とマリアは平然とした顔つきをしている。もしか
したら取つて置きのねたがあるのかもしない・・・などと思わせ
てくれる。

「それではマリアさん・・・・お願いします」

わざわざまどは打つて変わって、話を一聲たりとも聞き逃さないよ
うにするような緊張感の中に始まった。

今までシークレットとされてきたマリアの過去。だんだんと学校で
の成績や振る舞いが明かされてきたが、いまだなぞに包まれたところ
が多い。少しでも情報が手に入るだけでも興奮のなのに、さら
に恋愛について知れるなら・・・鼻血ものだらけ。ちなみに鼻血を
たらしてこるのは今のところは作者だけであることを忘れておこう。

(なんだかまことになつてしまいましたねえ)・・・これつ
てどうするべきなんでしょうか。冷静に大人の対応をしてみたん
ですけど、なんだか逆効果だったような気がしてきましたね・・・
どうするべきなんでしょう、教えてゴッズー)

今日せひこの一(ゴッズの声)

当然ゴッズは教える気があつても耳に届けてはくれないので自力で何とかするしかない。

(「いつなつたら」) リックス18巻のネタを使つしかありませんわね・

・・)

まさかの最新刊情報だが、マリアにそれ以外の経験がないので許していただきたい（執筆時1／18）

「あれは、とある人の用事に付き合つて町に出たときなんですが、その・・・男の方と一緒にショッピングとかしながら徘徊したことがあるんです。」

ギャラリーからはお~という声が上る。若干1名顔が赤くなっているのがいたり思考中の顔になつているのがいるが、今は気にしない。

「正直な話・・・結構恥ずかしかったんですけど・・私が高校生の時も何度も勢いに乗せられて一瞬仲良くなつた人がいたんですが、そういう人たちともまた違う気分になつたというか・・・いや、あのっ、決して変な意味ではないんですよ! 本当ですよ!」

余計なことまでしゃべってしまった。本人も激しく後悔しているほどに。どうやら、こうした場面は口をやわらかくする効果もあるら

しき。いや、本当のことと言つとこの状況ではこうこうことを言わざるを得ないのだが、なぜか言わなくてはいけない気分ではなく、言いたい気分でいつた気がしたのだ。それがまた最高に恥ずかしくて……。

今のは聞いて、さつきまで顔が赤かつた少年はさらに赤くなり、それでも済まないのか咳き込んでいる。

唯一少年の変化に気づいた少女も、なんだか自分がかかわつていて、自分のミスを今更になつて気づいたような表情をしているのだった。思案顔だった桃色の方は、何かひらめいたあと、急に難しい顔になつた。まるでもしかしたら戦う相手が増えた、しかも強敵であるかもしれないといった感じの顔だ。

しかし、そんなような顔をしてるのは4人だけで、ほかのメンバーは始めて聞く話にはしゃぎまくの妄想しまくり。まだ冒頭部分なのに話はあつという間に結末の予想まで飛んでいった。

年頃の少女たち特有の行き過ぎたまつたくの事実無根の妄想は收まるところを知らない。

「まつ、まさか！あのマリアさんが……」

ときどきそんな声が聞こえてくる。マリアにしてみれば、いつたい自分のことがどんな様に言われているのか非常に気になるところだが、よけなく口をはさむと厄介な自体を招きかねない。ここは大人の17歳の我慢。

しかしながら、健康な少年少女が読む小説ではかけないようなことまで妄想は広まってしまったようだ。

「なにー！？ハヤ太君とベッドに『ちょっとなに言つてるんですか

ああーーー。『

もひいじゅじゅぢゅだ。

ハヤテが加わったことによりよりカオスフィールドが広がつたので、
もはや私に描写でいる状況ではない。といふことでこの場は割愛。

「なんだか助かつたようですね。別な意味では負けている気がしますが」

そんな感じでマリアが平静を取り戻してどこかへ消えていき、戻つ
てきた時には昼食の時間だつたといふ。といふぜんマリアは昼食を持
つてきて戻ってきた。
しかし、

「もひいい加減にしてください———！」

一番の被害者はハヤテになつていたといふ。

完

「ニセニセ、まだ終わつませんか、終われませんよ———...」

40話（後書き）

さてさて、コイバナ編も終了です。やたら時間がかかってしまいました。作者の経験が少ないこともあるんでしょうが、だいぶこれでも考えて書いたんですが、何も思いつかなかつたのであえて何も書かなかつた次第です。うーん。愛つて難しい。

ということで、もう少しで本土に帰還ですね。なんだか疲れてしましがもっと面白い展開を期待してくださいっ！

長かった戦闘は終わった。

何も戦闘ということはなかつただらうといつ方もいるかもしけないが、今のこの有様を見てくれば納得してくれるだろひ。

「あ、ー、やつてらんねー」（美希）

「もう、いいです」（理沙）

「一ノードになつてやるひか」（なぎわ）

悲惨だ。状況的にも人間的にも悲惨なことになつてゐる。

なぜこんなことになつたのかといつと、先ほどのコイバナ大会で燃焼したからなのだが、完全燃焼ではなく若干の不完全燃焼が混じつているからまた面倒くさいことになつてゐる。

やたらと盛り上がりは良いものの、あとから冷静に考えてみると自分たちが勝手に盛り上がりてしまつただけで、肝心なおいしい部分を聞き出せていることに気づいてしまつたのだ。

特に、普段からU路線を走つてゐる彼女らは今回の失敗は特に許せなかつた。普段の自分だったらもつと弱みを握れたのにと考えると悔やんでも悔やみきれない。

（まつたく、そんなことばっかり考へてゐるからわしは助けんのじやよ。まつ、いい子でも助けんがな！まつまつほー）ゴシードの声

そんな雰囲気の中、どうしようとした感じで昼食をとり終わり、ナギの
言ったよつない一ートっぽい疲れきった感じでだらだらソファーに座
つている。

(「いかん、なんだか皆さんお疲れ気味だ・・・」) は僕が何とか一
発芸で!)

「こりん事はしなくて良いからな、ハヤテ」

まるで心を読み取られたような感じでとめられ、ハヤテは言葉が出
ない。ナギを見てみると田を開じて寝ているようだった。心眼でも
開いたのだろうか。

「あらあら、皆さんお疲れみたいですね」

マリアさんがお茶を飲みながら言つ。なぜか彼女から勝利のオーラ
が出でているような気がするが、氣のせいだろう。別にせつきまで散
々にじつてくれてありがとうございましたねとかいやみつたらしく
心の中で言つていたりはない。きっと。

ハヤテは意氣込みが頭から碎かれてしょぼしょぼとビームがくへ行って
しまつた。おそらくキッチンかどこかだわ。

「ハヤ太君はどうしたんだ？」

突然元気をなくして出て行つたのを見て美紀がナギに聞く。まあ、外から見たら何が起こつたかわからないのも無理は無い。

「いや、なんか余計なことをしてくれそうな予感がしたから止めただけですけど」

簡単に言うと”勘”というやつだ。身近な例で言うと、視線を感じるときなどはおそらくこれに分類されるだろつ。人には聴覚でも視覚でもない第六感というものがあるといわれている。普段から咲夜に教育されているせいか、ナギはこの手の勘はわりと研ぎ澄まされている。

しかし、せつかくこの墮落した雰囲気を変えるチャンスであったのだが、つぶしてしまつた。後悔はしていないが。

「そろそろ・・・帰るか・・・」

暇なのでナギがつぶやいてみた。実際、もうそろそろ沖縄を出ないと夕方までに関東につけない。

そんな何気ない一言から、また新たな乙女の戦いが始まつとは、作者でさえわからなかつた。

To
Be
Con
tin
ued

41話（後書き）

終わるといふを知らない乙女の熱い戦い。
その行方は作者ですらよそう不可能です（笑）
明日はどうなんでしょう

「よし！決めた！」

ナギが威勢良く立ち上がった。先ほどまでの墜落した雰囲気はあるでそこにはない。

背後からは”じゃじゃーん”という字幕が出そうなほど勢いで、もはやナギなど氣にもしていない女子メンバーを見渡す。その希薄は、窓のそばにある木にとまっていた鳥が驚いて逃げ出すほどだ。

(ちよ、こきなりなんなんだあの ももこーは) 鳥の声

さてさて、今度は何をやらかしてくれるんだか。

部屋一帯がそんな空氣に満たされている。だがナギはそんなことを

気にも留めず（むしろ~~気がついていない~~）、高らかに声を張り上げる。

「飛行機の座席争奪戦の開催だ！」

修学旅行を経験した方ならば誰もが知っているはず、隣の人は誰になるのか決めるあれである。

三千院家専用ジェットで行くんだからそんなの関係ないんじやないかと思う方もいるかもしれないが、帰りは直接三千院宅まで行くので割と小型で、座席はエコノミーほどではないが割りと接近している。

そして、ナギはハヤテの隣に座りたい。これで競わないで何が恋だ

というのがナギの言い分だ。

冷静な方の、こつそり隣に座ればいいジャンとか言つ意見は受け付けてはいない。それに、行動派の誰かが席を横取りしないとも限らない。正式に決めておくにこしたことはないだらうという考えだ。

「ひーーー」

ナギと同じ考え方をしている人がいた。泉である。

特に彼女は、メンバーの一人が気まぐれで余計なことをしでかしてくれるのによく知つてるので、ナギ以上に横取りに警戒している。何も横取りに限つた話ではないが。

「ふむふむ・・・・・」

二人のやる氣（どちらかといふと裏のほうの）を捉えた美紀がなにやらおいしい話題をかぎつけたようだ。一人の行動の理由を順をたどつて原点へとさかのぼつていく。

そこから得られた答えに納得したように、美紀はさつきまでの重苦しい身振りなど嘘だつたかのようにノリノリで立ち上がった。それにつられて、理沙も自体はわかっていないようだつたがとりあえずのつてきた。

「さあ、いつたい何で勝負する氣かな、三千院君。モン　ン、ポケンなんでもOKだぞ？」

「ふ、何回 ボタンをつぶしたかわからないほどやつこんだ私たちに勝てるかな」

理沙、美紀は例のゲーム機を構えてナギを誘ってきた。彼女たちからは、ゲーム機を持つているとなぜかしつくりくるほどやりこんでますオーラが出まくっている。もちろん、それはナギにもいえることだが。

しかし、ナギは別の案を思いついたようで、余裕顔でその案を否定して見せた。

なんでもお互い、やりこんでいる同士でやっても醜い戦いがあるだけで、素人が明らかに不利で、そんなアンフェアな戦いでは満足できないのでそうだ。事実、参加するであろう、ハヤテ、マリアは苦戦を強いられることが予想できる。ただ、一人とも適応力が高いので問題ないかもしれないが。

そんなわけでナギが提示した案は、あまりにもハヤテにはつらいものだった。もっとも、実力差はほぼないに等しい公平なゲームではある。

その名も・・・

「落ちるまで 口説いてみよう ハヤテ編」

この場にいなかつたハヤテにこれが伝えられたのは、キッチンでひつそりと心を癒すように料理をしていたところを無理やりつれてこられたときだつた。

42話（後書き）

名前が5・7・5調になつてているのは偶然ではありません（笑
実はこひういう話を書くのは得意ではないのに、なぜか無駄に引っ張
つてしまつのはなぜなんでしょう。疑問です。

ちなみに、期間限定公開としていたハヤテのなくことには42話投
稿時点で公開終了とさせていただきます。

何かご意見等がありましたら、感想欄かメッセージからどうぞ。

「つ・・・なんなんですかつ、その破廉恥なルールはつ

あえてマリアさんの本音じゃないから恥ずかしくない台詞から入つてみました。

ということで、マリアさん驚きのルールを持つ、ハヤテ落としがー

ムが始まったのでした。

「それではルールを説明しよう」

いつの間にか実権を握っている美紀が、また無駄に知恵を搾り出し

て立派なルールを作ってくれた。この頑張りを勉強にまわせたらなんて、言つ側の口が疲れるほど言つているので誰も口にしない。

いつの間にかセットというのがデフォルトと化している各種装備品を手に、美紀がルール説明を始めた。

そのまま書くとわかりにくくなってしまいそうなので（やたらとわかりにくく言つてくれている）、わかりやすくまとめてみた。

- ・ルールは簡単、ハヤテを落とす（ここ）で言つ落とすは、氣絶の類ではなく、恋愛やそれに準じるような感情にさせることである（こど）。

- ・方法は問わない。ただし、年齢にスラッシュが入るような行為は×。ぎりぎりを狙うもよし。正規路線で行くもよし。

- ・じやんけんで順番を決める。一巡回ったときに、誰か一人だけ落としたらその人の勝ち。複数落としたら勝ち残りでもう一巡。誰も落とせなかつた、もしくは全員が落とした場合はもう一巡。

- ・女として今までの人生で培つたものをすべて使うべし。手加減をして勝てる相手^{ハヤテ}ではない。

その他にも、

「現在の競争弱者脱落型社会で生き残つていいくには、女とても人間としても日々逆境に立ち向かい、困難を打ち負かす力をつけなければならぬ。そのためにはたとえどんな手段でも使う決断力や、冷静な判断力など・・・・・・・・。世の中には例1のような突つ込みどころ満載の話もある。しかし甘やかされてはいけない。たとえどんな満たされた環境でも・・・・・・。」

あまりにも長いので省略したが、そんな感じの話もあつた。

まあ、関係ないので飛ばしますが。

「とにかくで、早速いつてみよ!」

掛け声とともに、散り散りになつていた参加メンバーが集まつてきた。ちなみに中心にはいすに縛り付けられたハヤテがいる。逃げ出さないように特殊強化型の繩で縛り付けられたのだ。

「ちよっとーいつたいなんだつていうんですかー」

（こんなことをされる心当たりがないハヤテは、必死にもがいてみるがまったく体が動かない。）

（これはっ！ ただの繩かと思っていたら何か特殊なものが織り込んである・・・これは厄介だ。力でちぎりうかと思つていたがそれは無理そうか・・・）

つい状景反射でそんなことを思つてしまつが別に命の危機に瀕しているわけではない。あくまで癖だ。

ハヤテが勝手に命の危機に瀕している状況を仮定して必死に脱出手段を考えているうちに、ゲームは始まった。

「せーのー最初は！」

「グー！」（泉）（マリア）

「チョキ！」（理沙）（美希）

「パー！」（ナギ）

なぜかはもるはずの最初の一言で「いこ」になった。

「さつ！先読みしすぎたー！」

美希と理沙のチョキはいわずもがな、あれである。

読み間違えは、いい子にグーを出す人がいることである。まあ、ずるしようと考えるからいけないんだけどね。

じやんけんで勝つた人から順番を決めていくといふことに今なったので、最終的に勝つたナギから決めていくて、最終的に次のようになった。

美希 泉 理沙 ナギ マリア

ナギが最後ではないのは、ナギいわく「最後は最後でねたが出尽くして不利だからなのだ」だそうだ。もちろん、最初なんて恥ずかしうぎてやってられない。

実際、このゲームは順番というのが勝利に大きくかかる要素ではある。ハヤテという”人”が対象なので、気持ちというものがかかる。おそらく、はじめのほうは慣れないでの恥ずかしがつわってくる。おそらく、はじめのほうは慣れないでの恥ずかしがつ

て落ちる可能性が大きいだろうが、みんなに見られるというダメージが自分に重くのしかかってくる。自分が倒れるようでは勝負に勝てるはずがない。

「それじゃあ、いつちよ始めますか！」

複雑に絡み合つた（！？）乙女たちの戦いは始まつた。

例
1

振り込め詐欺撲滅のために戦う謎のヒーロー軍団がいる。東京都・葛飾警察署に所属する「防犯戦隊フリコマン」だ。構成員は、コスプレが趣味の巡査「本田あやめ」、特技は「口座凍結」という隊長「フリコマン」など5人いるらしい。

同署のサイトによると、防犯戦隊は防犯啓発イベントなどに登場するキャラクター。昨年11月結成し、「笑いをとる」「犯罪者と闘わずに勝利する」などを理念に掲げ、年中無休で働いている。

フリコマンは、額部分に「ふ」と書かれたマスクをかぶり、金色のマントにグレーのスーツを合わせたちぐはぐな格好をしている。長所は「ポーカーフェース」、特技は「口座凍結」だ。

本田あやめ巡査は緑色の瞳でネクタイを締め、制服を着ている。「大阪府出身で22歳くらい、身長は160センチメートルくらい」というアバウトな設定で、ライバルは「もちろん両津さん」だ。2次元キャラだったが「隊長にスカウトされ、無理やり3次元の世界に引っ張り出された」という経緯があるらしい。

同署のサイトによると、防犯戦隊には2人のほかに「ゼネラル・スタッフ」や「チーフ」「プロデューサー」がいるが、詳細は不明。結成当初は、女性隊員「手渡さないーヌ」がいたが、一時帰休中といつ。謎は深まるばかりだ……。

「ハヤタ君……………？」

スク水を着た美希がそこにいた。小中学生のプールの授業のときに着るあれだ。ご丁寧に名前を書いた布まで刺繡してある。しかし、今のハヤテにそれはどこから持ってきたのかとか、何のために持っていたのかとかそんなことを突っ込んでいる余裕はない。

「ひー、ひー、ひー！」

ハヤテに効果抜群だ。動搖しまくっている。50のダメージ。しかしそまだ決定打ではない。ハヤテはこの程度の攻撃で落ちるほどやわなやつではない。

「どうって、決まっているじゃないか……………かわいい……………？」

「ふつつ！」

ハヤテから血が飛び散った。心の血だ。まるで巨人に殴られたかのようにぼろぼろの姿でその場に倒れ伏した。

「んー、はや太君にはまだちょっと刺激が強すぎたかな」

美希としては限界ぎりぎりまで攻めたつもりだったのだが、少しやりすぎてしまつたようだつた。倒すことが目的ではない。落とすことが目的なのだ。

「ど、とにかく……」

ハヤテがひょいとおきてきた。見た目よりもダメージは少なかつたらしい。そして早く服を着てくださいとそこら辺にあつたジャケットを持ってきた。

と、ここで美希は新たな策を思いついた。

(つーー背中に悪寒が……)

その瞬間、一瞬だけだがハヤテは何かを感じた。いやなことが起ころるべきの前触れのようなものを。しかも、前例がないほどのいやなものを感じた。その感じを裏付けるように、美希が若干の笑みを浮かべて近寄ってきた。

しかも、ただ近寄つてきたのではない。一挙一動に”色気”を感じさせる動きだ。その仕草にハヤテが動けなくなつてゐる間に、美希はハヤテにほぼ密着するくらいの距離まで擦り寄つてきた。

そして、ハヤテの胸に顔をうずくめて言つた。

「さあ、着させてくれるんだろう……？それとも……脱がせたい？」

そういうて水着をす」しはだけさせた。

「ふつ

とは今回は行かなかつた。美希がさらに頬に手を回してきたのだ。二人の顔は少し動けば触れるほど近くにある。その仕草はまるで大切なのを愛でるようだ……

「ちよつ！――それ以上はダメー！」

ここで選手控え室から顔を真っ赤にしたナギが調停に来た。言うまでもなくこれ以上のことをハヤテにされるのは許せないからだ。それにこれ以上は年齢制限がかかってしまういそつな雰囲気さえあつた。ここでとめなくては作品が変わってしまう。

「ちえつ、全年対象じゃあこじまでか・・・

なにか確信めいたことをつぶやいて美希は惜しげもなく選手控え室へと戻つていつた。

といふことで、これで美希のターンは終了だ。

「いつたいこれはなんなんだ・・・

ハヤテはまだ汗だくだくでひとつずつとやつづぶやいていた。

「さて、美希選手はいつどのよつに難攻不落のハヤテ氏を攻略するのでしょうか」

「ファーストアタックなので、まずはどうこつたところが弱いのかをじっくり分析してくると思いますねー」

理沙とマリアによる司会が別室の選手控え室で行われていた。理沙はこういうことをして遊んでいたと暇で死にそうになるのでやっているのだが、マリアはちょっとでも大人なところを見せるため見栄を張つて参加してみた。後悔はない。

「ハヤテ君は意外とほかの男の子より幸せな田代先生でいるのではうごうことに耐性はありますねー」

考えてみれば自分もハヤテにいろいろ恥ずかしい思い出があるマリアだった。

「おつと、美希選手が入場するよ!」

ハヤテがいる部屋の扉が開いた。

「・・・・・」

絶句だった。スク水姿の美希が出てきたのだから無理はない。マリアはもう少し子供のやる」とかと思つていただけに、レベルの高さに驚きを隠せない。

一方の理沙はとすると、なるほど、そうきたかといった感じでうなづいていた。最初は少し驚いた様子だったがすぐにその手方を理解したようだった。

「だいぶ一点集中型の攻撃で着ましたね、マリア選手

「えつ、ええ」

絶句していたマリアは、理沙の大人の冷静さに驚いた。そして見栄を張つて参加してみたはいいが、実力の差を自覚させられただけな気がしてきた。

つていうか、スク水つてじゃつかんアウトじゃないだろつかという気がしてきた。

「おつと、美希選手ハヤテ氏に何か話しかけてますね」

「んー、ここで少し大人のたしなみを披露しないと……。
”ハヤタ君・・・どう・・かな・・?//”

「ブハ――――つつ」

マリアの口からお茶のようなものが飛び出した。正確に言つてお茶95%残りマリアさんなのだ。

(どびどびどびどび・・・どう?ええ?そんな発言するしませええ
えん!)

動搖しまくりだ。画面に映つているハヤテよりもひどいかもしれない。今までこいつのシーンを見たことがないことも影響しているかもしれない。そもそも、友達が少なかったマリアなのでこいつの話をしたことがないのだ。

(そりゃいくらかういう勝負だからって・・・だからってつー!)

”どうって、決まってるじゃないか……。　かわいい……。
?／＼／＼”

「ブハ―――――」

お茶なんか飲まなきゃいいのに、マリアちゃん。しかしあのメイド。田に見えぬ速さで後片付けを済ませる。そしてまた考える。

(かかか、かわいいとかそういうこと聞くの规则じゃないんですか！？)

ハヤテもマリアと同様にかなり動搖しているように見えた。とかお茶の代わりに赤いものが飛び散ったように見えた。

「これはハヤテ選手大ダメージですねー」

理沙はとうとこれまた冷静だった。この展開は予想できただとも言いたそうな顔だった。それどころかいいぞいいぞもつとやれとテレビパーを送つていいようにさせて見える。

(最近の子供はこれだから悪い事件に巻き込まれたり……)

そんなこと思つているが実は悔しいだけだったりしなくもない。

”さあ、着させてくれるんだろう……？それとも……脱がせたい？”

・・・・・。

もはや絶句。ところが、いつたいびりしてこんな言葉が思いつくな
かその発想が理解できない。マリアにまもつといひ、かわいいら
ことしか思いつかない。

「なんであるなこと言えるんですかね」

「ああ、美希選手はエ ゲーもやりますからねー。まつとわれのま
ねでもしていいんでしょう」

何ですヒーーー?

マリアとナギの叫びが同時に響いたといひ。

44話（後書き）

挿絵を描いてくださった心優しい方が現れました！

http://photos.yahoo.co.jp/ph/w
inpc1125/vwp?dir=/98bc&.d
nm=3b8d.jpg&.src=ph&.
iewt&.hires=t

ぜひ見てくださいね！

なんとも0000ヒート—感謝の読みきつ小説（前書き）

「」の小説は、はやての「」とは一切関係ありません。尺者による完全オリジナル小説になります。初めてのオリジナルなので温かく見守ってください。できれば感想、評価もいただけると感激です。

なんとも000000HT！感謝の読みきり小説

チョンチョンチョン・・・・・

鳥のさえずりを聞いて少年は眠りから覚めた。窓からは心地よい日差しが出迎えている。今日も良い日になりそうだ。

「はあーあ」

盛大にあぐいをしながらも、すばやく寝巻きから学校の制服に着替える。その手つきは男の子というよりは几帳面な女の子のような感じだ。決して服を脱ぎっぱなしにしたりしわくちゃにしたりはしない。よく本に載っているようなその服に合つたたたみ方をしてる。これを見ただけで家事が得意なのがわかる。

着替えが終わると、今度は弁当の準備を始めた。フライパンを暖めて卵を焼いたり、お肉を焼いたり野菜をきつたり。これまた手馴れた手つきだった。

そんなことをしながら、洗濯物やらいろいろと支度もしていると、ビビジーと威勢良く呼び鈴が鳴った。

「誰だ？ こんな朝早くに」

そんなことをつぶやきつつ、呼び鈴を押した人を確認すべく、玄関ドアを少しだけあける。ちなみに、ドアフォンとかそういう類の便利なものは少年家には装備されていない。

覗き込むように数センチだけドアを開けてみると、少年の視界の中に入るものらしい“目”があつた。どうやらドアの近くから向こうもこからをのぞいているらしい。

「何しにきたんだよ、さく

さくと呼ばれた少女は、名前を呼ばれて無表情な顔を少しだけ緩ませるとステップでドアから少し離れて言った。

「今日は一緒に学校に行きたいなと思つただけ

普段から気分屋な彼女の性格はよくわかつてゐるつもりの少年・・・
前原優一はまた何か企んでいるのかとでも言いたげな表情をして、
でも何も言わずにちよつと待つてと言つて家中へと走つていった。

優一とさく・・泉咲実は学校へ行くには必ず通らなくてはならない坂を歩いてゐる。いつもは一人ともべつべつに登校するのだが、今日は咲実が一緒に行きたい気分だつたらしく、そういうことになつた。

二人は同じ自宅近くの公立高校の1年生のクラスメート。ついでに最近の席替えで隣の席になつた。中はなかなか良いほうだと思つ。よく勘違いかれるがべつに咲実とは付き合つていない。いや本当。なのに

さくは本当に面倒だと思つ」とは徹底的に人に任せせるようなタイプ

だ。なぜか普段そばにいることが多い俺が任される役に回るわけ。そんなやつがわざわざいつに来るなんて、きっと何かあるに違いない。わくの家から学校まで行くのにつかこよのは割と遠回りだし。

「あら、ちよつと朝の優の顔が見たかつただけよ」

うわっぽい。強烈にうわっぽい。顔が笑ってるし。普段何があろうと無表情なさくだけど、長く一緒にいるせいか、さくの微妙な表情の変化が読めるようになった。多分ほかの人たちじゃあこの変化には気づけないような微妙なものだけ。

「何か言いたいことがあるんだつたら素直に言つてくれたほうが嬉しいんだけど」「

だいたい小さい子供がするよう、何かをしてほしい時に何かいいことをしてあげるというのがさくには多いパターンだ。わかっているなら面倒なことから逃げられそうなものだけど、なぜか彼女の強い気のようなものに縛り付けられて逃げられないことが多い。ついでに何かをしてもらつてそのまま逃げるといつのもどうかというプライドの問題も少々。

そんなこんなでなんかさつきから逃げたり殺すわよ的なオーラを放たれていて逃げられない俺だつたのだ。

「あら優つて優しいのね。実は明日までの古文のレポートがあるの。さすがに当田じゅんじや厳しいだらうから今のうちにおこつ渡しておこうと思つて。はい」

ぽんと手の上にレポート用紙と問題の紙が置かれた。これをやつとけつてか。ちなみにわくは文系コース、俺は理系コースだから必ずしも同じ宿題が出るとも限らない。これは文系側にだけ出たものだ。

でなかればいいからでも『させ』てと、うだけでやつてこことまで
は言わない。

あ、そんなこと考えてたら、この間にか横にいたのにはるか先で手
を振つてゐる。

「がんばつてー」

そんな声が聞こえてくる。はいはい、わかりましたよ。

大体の方には俺とさくの関係がわかつていただけただろ？ あの
子が俺に付きまとうのは大体はああやつて樂するためだ。まあ、た
まに変なこともしてくるけど……それは多分このあと書くこと
でわかつてくれると思う。

普段無表情なさくは、やつぱりというかなんと言つか友達を積極的
に作るタイプじゃない。けど顔がいいせいか、寄つてくる人は男
女を問わず結構いる。それでもなぜかさくはあまりほかの人と関わ
ろうとはしていないように見える。昔そのことについてさくに聞い
てみたけど、話するのは面倒だけど、無視しても面倒なことになる
から適当にやつていてるのよとか言つてた。実際のところ、彼女が何
を考えているのか俺は良くわかつているわけじゃない。

ただ、ひとつだけいえることは、彼女はもてるということだ。今ま
で何人の男に告白されたかわかつたものではないらしい。らしいと
いうのは、直接本人から聞いた話じゃなくて、俺の男友達から聞い
た話だからだ。この学校ではさくは難攻不落のかぐや姫扱いされて
いるみたいだ。

たしかに、俺は今までさくがほかの男と仲良く話しているところを見たことがない。確かに最後に男と話しているところを見たのは先月部活のことについて先輩が何か伝えに来た時くらいだ。そんな性格だけど、割と俺には心を開いてくれていることは俺もわかっている。よく勉強を教えたり、面倒^{いざな}いとつき合わされるといういやな条件だが一人でどつかに出かけることも多い。こんなことしてるから他所から付き合っているだろとか言われたりしてるんだけど。別にそんなんじゃないんだけどね。

実は今日も渡された古典の宿題でどうしてもわからなこといろいろがわかつたから俺の家でちょっと教えてもらうことになつてこる。それくらいやらせればいいと言われるけど、俺としてもわからぬ問題があるつて言うのがなんとなく気持ち悪いから解けるようにしておきたいし。全教科勉強できるに越したことはないわけで。

つて言うわけで時間は放課後、我が家に移る。

「おじやましまーす」

いつもの学校での振る舞いのようにすました感じでさくがやつてきた。一応俺も玄関に出来に行く。何回もうちには来ているけど、部屋の中からどうやつたらかいうだけだとあとで怒られるから最近はこうした習慣になつてている。

それよりも、最近夏服に模様替えしたときから夏特有のスカートの短さが気になつてしまふがない。靴脱ぐ時とか後ろ確實にアウトだと思うんだけど。その、なんていふかもともと素質があつて足とか長越來越いだしなんか目のやり場に困るといつうか。いかんいかん。

変なこと考えてる」とさくに見破られる。

ちょっとこのままだと流れが良くないからさくには先に俺の部屋に行つてもらつておいて飲み物でも出しにこぐ。このワンクッシュョンはあるかないかでだいぶ後が違うもんで。適当に冷蔵庫にあるスポーツドリンクとイチゴ牛乳をコップに入れてリビングに持つしていく。ちなみにイチゴ牛乳はさくが来た時になると機嫌が悪くなるから常にストックしてある。

「せじょーひひひひひー…」

部屋に着いた俺は後足と呼べるスピードで手に持つて居るコップをテーブルに置き、やくの下の思われる足部を全力で引っ張る。なぜかつて？俺のベットの下にもぐりこんでいるからだよー。

「かよっとー、何すんのよー。えりか」

何すんのよってそれはこいつの仕事だつてーのつーなんでそんなどこにもぐりこむれたら何かいやでしょー普通。てかえつちつて・・・・・つ

俺は自分がしでかした失態に気がついた。女子高生（制服＝スカート）がベットのしたのもぐりこんでいる 足を引っ張つて引きずり出す あるものがあらわになる・・・・・・いや！ だから恥ずかしいから！

つていうか、完全にこのあそこを使われる動機になつた。やつちまつた。つていうかあつちもなんか妙に演技っぽく顔を赤くしたり恥ずかしそうな顔してるんじゃないよー」つちまでなんかそういう気分になるじゃないか！

「見た・・・・の？」

ついやいやいや　ととつたに否定してみたものの、むしろ肯定の意味に取られていることはその場に自分にもわかつている。けど、仕方ないじゃない。この場合冷静な判断なんて無理だつて。つていうか、なんかさくの顔が面白いものを見つけたように感じになつているんだけど。今はつつこめないけど。

これはまずい。とりあえず話題転換だ。つていつかこっちから攻めよ。ついでにさくにぶつけてるからいけないんだとか言つてみる。

「だつて、エッチな本が隠してあるかと思つて。なんでないのよ」

なんであつて、そんなものありません！だいたいなんでそんなものを他の男の人は読むのか俺にはさっぱりわからないんだから！ってか、大体なんでさくはうちにくるたびにその手のものを探がすんだよ。ないものはない。

さ、そんなことよりわかつたと勉強終わらせると俺が言つと、さくはここならあると思ったのにとか、見たのは高くつくとかぶつぶついいながら俺の向かいの位置のテーブルに座つた。

「で、ここなんだけど・・・」

すこしあくのことを意識してしまつたび、なるべく目をあわさないようにして対処する。ちなみに、さくは成績は優秀だ。むしろ俺より優秀だ。成績もあつちのほうが高いし、テストも点数じや勝つたことはない。いつも校内ベスト10に入つてゐるほどなのだ。べつに俺も悪いほうではないと思つてゐるけど、どうしてもさくにだけは勝てていない。

なのになんでこんなことしているのかは俺にもわからぬけど。そういうわけで、わからぬことこうを指すと、ああそれはこういうことで　とか言つてあつといつ間にといて俺を感嘆させる。そん

なに簡単に解けるなら本当に自分でやればいいこと俺も少し思つた。

「ゆづもまだまだね。もつと修行しなさい」

偉そうにそんなこと言つてくる。向こうに言わせればこの宿題の山も修行だつてか。まあ俺はそれを有効に使わせてもらつてはいるからいいけど。なんでむこうは課題をやらないのにあんなに成績とテストがいいのか今の僕には理解できない。こっちが勉強してるといつも無駄なメール送つてくるし。本当に向こうは勉強しているんだろうか。

てか、偉そうにするのは許すからそつやつて寝転んでスカートをひらひらさせるのはやめてくれ。集中できないから。てか見えてるから。はずかしいから！

「うふふ、ゆつもまだまだお子わやまね」

• • • • • *לענין* —————

そんな感じで若干の妨害も入りながらも、それなりのペースでわからぬところをこないしていった。ちなみに、今日は学校が午前授業のため時間はかなりたっぷりとある。すべての問題を終えた時、時計はまだ一時半を指していた。

「あ～あ、疲れた」

俺はその場に寝転んで大きくあぐびをした。外は6月なのにしばらく拌めなかつたお天道様が気持ちよい光を窓の外から注いでくれている。それを一緒に感じているのか鳥のさえずりまで聞こえてくる。うん、気持ち良いよね。ついついそんな届くはずもない言葉を送つてみてしまう。

「ああ、いい気持ち」

ついつい目をつぶつてしまふ。別に寝たりしないから大丈夫。だって今はさくが・・・・・い・・・・・い・・・・・・・・・

「はっー。」

何かあつた気がして俺は突然眠りから目を覚ました。もしかして寝過ごしたかと思って時計を見てみると2時45分。まだあれから15分しか経っていない。

「なんだ、まだ寝れるか・・・・・・」

またうとうとしてきた。しかしそれは腹部に感じた違和感とさくが家に来ていたという事実を思い出すことによって火星あたりまで吹っ飛んでいった。

まださくのことを理解していない人がいるかもしれないから簡潔に彼女を表現すると、いたずら好きなのだ。今までさくの無駄な発想力のおかげでひどい目にあってきたのだ。さくの目の前で眠つて無防備になるなんて自殺行為に近い。そして今腹部に感じるこの違和感。だんだんと眠気が覚めてくるにしたがつて感覚が覚えてきて違和感の正体が掴めてくる。この重量感。この弾力性。間違いない。

「あら、まだ眠るの?じゃあもう一回ゆうの上で眠りうかじい

またつてさつきまで寝てたのか。俺の上で寝てたのか。まさか俺のYシャツのしみはさくのあれだつたりしないよな。やめてくれようこう。

つていうか重いっす。いくらそういうのを気にする女の子とはいえ、健康な体を維持するためにはやはりそれなりの筋肉、骨、体脂肪が必要なのだ。適正体重付近の重さは決しておなかに乗つかられて平気なほど軽くはない。

でも、それをそのまま口にしたら確実にさくにつぶされる。もしくはたたかれる。これは経験上確定だ。俺も人間だからそれくらいのことは学習した。それではどうしようか。とりあえず重いからおなかの上からどうでもらおう。とりあえず体を起こして・・・・・・。

「あれつ！？」

自分が置かれている状況に思わず声を上げてしまった。でも許してほしい。だつてなんか体をロープで縛り付けてあつて動けないんだから。おかげで起こした体を支えられなくて床に頭を打ち付けたよ。結構痛い。つていうかさくは・・・またこんなことを・・・

「今すぐこれを持じきなさいつー！」

ロープに縛られた状態で勝ち誇った表情で突っ立つてゐるさくに言つても惨めな感じしかなかつたが、とりあえず必死で訴えてみる。

「あら、どの口でそんな偉そうなことを言つてゐるのかしら」

いつもの無表情には変わりないが、俺にだけわかる程度のわざかさだけど、悪魔の微笑を浮かべてゐるのがわかつた。楽しんでやがるなこの野郎。てかそんなにふんぞり返らないでくれ。下からだと丸見えなんだつて。気づいてるだろそれくらい。しかも体を動かせないから視界を思うように動かせないんだつて。こつちが恥ずかしいから、本当。

そんな俺の思いが通じたのか、丸見えの今のポジションから動いてくれた。とりあえずほつと一息。

「あら、好戦敵なのは口だけじゃないみたいね」

いきなりさくがまた腹の上に乗ってきた。そんなに勢いよく乗つたら・・・つえつ・・・けつこうきついんですけど。俺がおなかの圧力に必死に耐えていると、今度は男の敏感な部分を手でさするように確かめてきた。いや、好戦的ってそれは違うんですよーさつきはで

寝てたのとやつやつて乗つかつてくるから反射でそつなるんです！

「ふ～ん？」

あー、やめて！そんな人間のカスを見るような目で見ないで！って
いつか、そいやつてで触らないでくれ！その何か、手でなめ取る
ような感じ背筋にいやな感じが走るから！なんかこう、ぞくつとす
るから！

この耐え難い羞恥心のおかげか、突然体に力がみなぎつてきた。き
つと前代未聞の事態に体のリミッターが外してくれたのだろう。想
像もできぬいくらい位の力で身体の自由を奪つていたロープをちぎ
る。

「おわつとー」

俺の腹の上にいたさくはその拍子に転げ落ちたけど大して痛そうな
素振りをしていないので気にしないでおく。ロープを完全に取つた
俺はまず作と一定の距離を作つて息を整える。限界を超えた力を使
つたせいなのか、かなり息があがつている。

「はあはあいつちゃつて、本当はむつとやつてほしかつたくせ」「

違う！それは断じて違う！」心拍数の高鳴りはそうじゃないと俺
は信じているんだ！

「元気になつたからペろペろしてあげよつと思つたのに。つまんな
いの」「

「・・・・いい加減にしなよーこつーーー！」

その後、やーとか言いながら部屋の中を逃げるさくをわりと必死に追い掛け回したりしていたら、いつのまにかもうすぐ夕暮れ時とうところまで時が過ぎていた。無駄に広い我が家家の構造を知り尽くしているさくはここに住人である俺の手にかかるともなかなか捕まることができなかつた。まあ、はじめこそ怒り心頭といった感じで追い回していたのだが、後半は遊び半分、というかなんで追いかけていいるのか忘れていた。だからさくが

「トランプで決着をつけましょ！」

とかいつて勝ち逃げしていつても悔しいとしか感じなかつた。ようするにあれば、俺は馬鹿なんだ。そんな感じでまたいつもどうりになつて、さくを家まで送ることになつた。

さくの家は意外と、といつて言いかわらないけど、門限とか、お小遣いとか、身なりとかそういうのはすぐ親にしつこく言われているようだ。しかも、玄関でしかあつたことはないけど結構怖い。なのに何でああいう風に育つたのかはわからないけど、人前では教育の成果かおしとやかな女の子になつていてる。

そういう訳で、部活がない日は日が暮れるくらいまでには家に着かないといけないので今日も夕空を眺めながら我が家からさくの家まで歩いている。

「走り回って疲れたわ。ゆう、おんぶ」

馬鹿なこと言つてないでさくと歩きなさい。ちえつとか言いながらまたさくは歩き出した。この年になつておんぶとかやつてられないんでね。そこは我慢してもらつ。

空を見上げると、沈みかけの太陽が消えかけている自分を一生懸命に見せよつとしているかのように赤い光を放ち、雲が幻想的な感じにその色に染まっていた。俺は別に芸術とか美術とか好きじゃない

けど、こうじう風景を眺めているのは結構好きだ。時間を忘れて心をリラックスさせられる。

しばらく無言で上を見上げながら歩いていたが、右手に冷たいものを感じた。さくの手だ。さくは冷え性の体质を持っているので手は夏でもひんやりとしている。つぐづぐ、損な体质だなと思つ。

なんとなくそれがかわいそうだったから、手を握り返してあげた。手をあつためてあげよ。結構俺はあつたかいんだ。毎日健康食を食べてるおかげで血流が最高なんですね。

俺が握り返すと、ぎゅっと少し手に伝わってくる力が強くなつた気がした。まあ、その辺のことは今は気にしない。だって空がきれいなんだから。

「じゃあね、ゆう。また明日」

さくの家の前までついた。さくはちよつとだけ顔を赤くして手を振つて家へ入つていった。きっと俺のあつたかい手のおかげで血流が良くなつたんだな。うん、いいことだ。まあ、赤くなつたと言つても無表情なさくだから本当に少しだから夕陽に照らされてただけかもしれないけど、まあどっちでもいいや。

さて、やることはやつたから家に帰つて勉強でもするかな。

少しぃさくの家を見てから俺の家までの、さつき一人で歩いてきた道をまた戻つていった。

「ふう、疲れたー」

「」飯を作つて、干していた洗濯物やらその他も色々こなすともう夜真つ盛りの時間になる。テレビなんか見ていられない。せつと勉強を始める。

たまに疲れて勉強しないで寝ることもなくはないけど、そうしてのからさくに勝てないのかと思うと勉強せずに入られなくなる。なぜなんだろうね。クラスの男達には負けたことないのに。

そうして勉強が終わつて、俺はベットに転がるようにもぐりこむ。今日も一日疲れた。

正直な話、こんな生活していく嫌にならないのかと友達に言われたことがある。まあ、客観的に見ると確かにそう思わなくもないかもしない。けど、どうしても、前の自分よりも今の自分は幸せだと思う。

いつだつて暇をせずに自分にかまってくれる人がいる。それが何よりも幸せなことだと思うんだ。だからなのか、今の自分を不幸だとか、嫌だとかは思ったことはないね。まあ、疲れるることは確かだけど。

「さて、もう寝るかな」

明日もきっとわざがまた何かしてくるだろ。きっと振り回されるだろ。けど、そう思つても俺は嫌になつたりしない。次は見返してやろうとか、もう引っかかるたりしないようにいろいろ頭を使えるしね。

また明日も・・・楽しいだらうからさ・・・

お休み・・・

•
•
•

「それじゃあ、さっそく次行こうか」

さつそく疲労困憊の様子のハヤテやマリアさんをおいて、いつもの調子でたんたんと同会を進めていく理沙。彼女の精神力の強靭さはいつまでもない。多少のお色気は視界にも入らない。むしろ、自分の番が回ってくるのを楽しみにしているようにも見える理沙は、部屋の端っこで出たくないよーヒーピー泣いている泉を容赦なくハヤテのいる部屋へ投げ込んだ。

(ビビビビビビビ・・・ハヤ太君に・・・ええええっちなこと
を・・・)

何もそこまでじろりと入っていらないのに勝手に色々と妄想が広がっていく泉。まあ、先ほどの美希があまりにも過激だったから致し方ないかもしない。

「えっと、瀬川さん・・・まずはこの縄をほどこてくれませんか？」

なんだかドアのそばでそわそわしているので、さっきから鬪争という手段を奪っているこの縄をほどいてもらつ。しかし、今の泉には何を言つても通じなかつた。

(ハヤ太君が縄に縛られて……ハワワワ)

いや、彼女に非はないです。はい。そういうかわいそうな性格なんです。

(い、いかん。何もしていないのにまるで僕が犯罪者みたいだ……。
：。何とかしなくては！）

本当に何もしていらないのに被害にあつてているハヤテ君。本当にかわいそうとしか言いようがないがそれは持病不幸の不幸や労なので仕方がないのかもしれない。

(と、とうあえず瀬川さんを落ち着かせないとまた警察の方にお世話になりそうだ……どうしてもんかな……）

部屋の隅でまた何か新しい妄想を始めた泉が先ほどよりも激しくペーピー言っている。よそ（控え室の人たち）からみたらまさしく変態的な世界となつて居ることだろう。

「なあ、マリア。あの二人は何をやっているんだ？」

その控え室で、皆でゆつくりとお茶を読みながら42型液晶テレビに移っている様子をまつたり眺めている。

その目線は脇間のグルメ番組を見るようなどうでもよきやうなものもあり、お笑い番組を見るときの哀れむような目線もある。ようするにどうでもいいけど哀れな二人を眺めているわけだが、どうもさつきから様子がおかしい。泉ははしつこでなんか騒いでるだけだし、ハヤテは顔に焦りが見えてきた。まったく持つてこの部屋に居るメンバーには理解不能な状態だった。

「たぶん、変なんだろ、あの二人」

「あつ、そうか」

「わつわつそ�そ�でしたね」

そんな感じの受け取り方だった。

一方で・・・

「瀬川さん！」

意を決したハヤテ君はやや強い口調で泉に声をかける。それに驚く形で泉も少し静かになった。

その声を聞いていた控え室でもモニターに注目が集まった。

「・・・抱いてもいいですかー！」（落ち着かせようとした）
着いた答え

続く！

45話（後書き）

めずらしく長期にわたって伏線を回収していくところマニアです。
さて、だれかこれに気づいている人はいるのでしょうか・・・。

「ブー！」（お茶を吹く音）

(は、
ハヤテのやつこの私を差し置いてなんてことを！)
(だ、
大胆ですわ！)

控え室はお茶まみれになつたそうだ。一方泉は・・・

「ほえ？」

あまりのできごとに固まっていた。具体的に表現すると脳細胞がぐつぐつとまだ沸騰している状態のラーメンに付けられた感じだ。わざりにくい表現だつて？それは言わない約束だぜベイベー。しかし、その状態は長くは続かず、すぐに思考回路が復活してきた。

(そそそ、それって・・・・・ふふふプロポーズ?・・・・・)

ぱつと何かが飛ぶ音がした。そんな音なるわけないわけだが、きっと見ている人が勝手に想像して付けているんだろうと思う。そして顔がヒートアップってきて、その熱で思考回路がやられて動けなくなってしまった。たんぱく質は70度くらいまで上がるともう一度と元通りに戻らないらしいが大丈夫だろうか。

(よつゝーどうとか落ち着いてもらえたぞ)

見た目は動かなくなつて落ち着いたように見えなくもないが、ハヤテは攻撃は最大の防御作戦で泉をねじ伏せた。さすが最強レベルの

執事だ。本人がそれを自覚していないことを省けばだが。

しかしながら、こんどはなかなか話しかけてもうんともすんとも言わなくなつた泉にさすがのハヤテも違和感を覚え始めた。

もしかして、これ何かミスつた？

泉はそのまま床に倒れ付したという。

「試合終了ーー」

モニターで様子を見ていた理沙が終了をつけにやってきた。

「いや、まさか挑戦者がダウンするなんて予想外だったよ。さすがハヤ太君だ」

そういうながらそちら辺にいた執事に泉を控え室に連れ戻させた。以前、面倒なヒゲの事件で怪しいと思っていたが、これでほぼ確定したようだと理沙は思いながら、さつきからナギに罵倒されている

ハヤテに次は私の番だとつげにいった。

「全くもって何なんだ、これは」

息切れ気味のハヤテのこの疲労は精神的なものだらう。そんなハヤテの元へナギがやつてきた。

「その調子だハヤテ。もうコクピットを避ける必要は無い、おもいつきり撃墜してやつて早くこの無意味な戦争を終わらせるんだ」

そういうナギも息切れ気味のよつだつた。おやらく幾度となく繰り返された激しい戦闘に対してお茶を噴出しきたのだらう。

「しかし大佐、敵の思惑がはつきりしないうちは手の出しあうがあります」

実際はハヤテはなにをしたらしいのかよくわかつていない。

「とにかく、殺らなきゃ殺られるぞ。割り切るんだ」

そんなことを言つてナギは去つてしまつた。正直な話ハヤテは何を言われたのかわからなかつたが、それはナギも自覚しているようだ

その顔は苦虫を噛み潰したようだつた。

そんな不毛な会話がされているうちに準備が整い理沙が入ってきた。

「殺りなきゃ殺られる・・・まずは粗手をよべ観察するんだ」

理沙は普段となんら変わらぬ制服姿である。髪型、表情ともに一つも通りだ。若干いつもの表情といつのがなにか悪いことを考えていそうなどじゆがひっかるが。

「そんなにみつめられると胸がときめいてしまつな、ハヤ太君」

ハヤテの視線にびくともせず、理沙はどんどん近づいてくる。おもわずハヤテが下がりたくなるほどの威圧感だった。何気ない先程の台詞からもなにか嫌なものを感じる。

これは・・・殺られる・・・！

ハヤテの本能が警告してきた。しかし、それすらもすでに手遅れだつた。

「それじゃあ、いただきまーす」

刹那、理沙が近寄ってきて、そして

ブチュー――――――――――――

とこう強烈な吸引音を長々と部屋に響かせた。

その一瞬の出来事に反応できたものは1人もおらず、皆ただただ呆然と立ち尽くすしかなかつた。

そして、全てが終わつた後には氣を失つたハヤテの亡骸があるだけだつた。

46話（後書き）

長い間更新できずについて申し訳ありません。
これからも更新のめどは立つていません。

作者のやる気、時間的都合がつき次第更新といふことになりそうです。沢山のコメントありがとうございます。とても励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1685d/>

ハヤテのごとく！～初恋物語～

2010年10月9日12時14分発行